

公は咸陽に入り、宮室府庫を嚴封して、霸上に駐屯してゐたが、後月餘にして項羽が咸陽に入るや、子嬰及び秦の諸公子宗族等を殺し、子女を虜にし、財寶を掠め、遂に輪奐の美を極めた咸陽の宮室を一炬に焼き拂つた。かくて秦は始皇帝が天下を統一してから、僅に十有五年にして、もろくも茲に滅亡したのである。

### 女の身最眞國を失ふ

一

漢の高祖は匹夫の身を以て一劍風雲に乘じ、遂に秦を滅して、漢二百餘年の基礎を確立した。その後文帝が立つて、専ら仁政を以て民に臨んだがために、學國秦平を謳歌して、三代以後治蹟第一と稱せられた。更に武帝に至り、その治世五十四年の久しきに互り、内に在りては學藝を獎勵して文運を盛ならしむると同時に、外に對しては屢々衛青、霍去病等をして匈奴を伐つて、之を漠北に驅逐せしめ、更に朝鮮を服し、南粵なんまつを取り又張騫けんを遣はして西域を來朝せしめたので、その領土大いに擴張し、國威四方に赫耀するに至つた。次いで昭帝に至り、霍光を用ひて人民を安撫し、宣帝に至り、銳意政を勵み、力を民治に用ひたので、漢室の基礎はますます鞏固となつたが、元帝の頃から國政が漸く弛緩し、成帝の時になつては外戚王氏の一族に悉く顯要の地位を占められ、哀帝になつてその專横益々甚だしく、遂に平帝を經、孺子嬰に至つて、漢は無慘にも王氏の爲に

國政漸く弛緩す

女の身最眞國を失ふ



滅亡の非運に陥つたのである。

元帝は名を爽と云つて、宣帝の子である。性柔和にして慈悲の心に富み、豫てから深く儒道を好んでゐた。然るに宣帝は動もすれば刀筆の吏を用ひ、刑名の主義を以て政治を行つたので、太子の爽は之を飽き足らず思つて、一日父帝に向つて諫言を奉つた。

『陛下は常に刑罰を重くして人民に臨まれるやうであります、その結果は動もすれば苛酷に流れ、そのために遂には國民の怨恨を買ふやうにならぬとも限りませぬから、寧ろ儒生を用ひ、孔子の道を以て政治をなされたなら宜しいかと思はれます』

宣帝にはこの諫言が氣に入らなかつた。

『我が漢家には自ら漢家の制度といふものがある。それは古の霸道と王道とを適宜に調和して行ふことである。然るに當世の俗儒は頑冥固陋であつて、徒らに大言壯語するばかりで、少しも時勢に通じたものがない。若し儒教のみを以て行ふたならば、徒らに優柔に流れて、到底立派な政治を行ふことはできない。さういふ迂愚な俗儒の輩に天下の大政などを委せることは、到底できるものでない』といつた。その後になつて帝は『我が家を亂るものは屹度太子であらう』と歎息したといふことである。

太子父帝を諫む

儒生時勢に通ぜず

不幸にも豫言的中

宣帝のこの豫言は不幸にして的中した。漢室は實に元帝のときに至つて滅亡の兆候を現はしたのである。但し宣帝は太子が徒らに儒道を好むがために、漢家が亂れるであらうと心配したのであつたが、併し漢室の滅亡したのは、元帝が儒道を好んだからではなく、他に原因があつたのである。その發端は王氏を納れて皇后としたことである。

二

元帝が王氏を娶つたについては、面白い話がある。

帝が未だ太子であつたとき、司馬良娣といふ宮女を寵愛してゐたが、病に罹つて亡くなつた。その臨終に際して太子に向ひ、

『妾が死にまするのは壽命ではございません。嫉み深い人たちから呪はれたために死ぬるのでございます』と怨言を吐いた。

それ以來太子は左右の宮女どもを疑ふやうになり、さては若い女性に近づくことを厭ひ、たゞ鬱々として一室に閉ぢ籠り、日夜良娣のことばかりを思ひつゞけてゐるのであつた。父の宣帝は之を聞くと痛く心配して、

臨終の怨言を銘す



『何んとか太子の氣分を引立てる方法はあるまいか』と皇后に相談すると、皇后は、『寵愛の女に死なれて氣が沈んでゐるのでございますから、それを直すには矢張り他の若い女で、太子の心を紛らす外はございませんか』と思ひます』と答へた。

かうした事から、或る日皇后は後宮に數ある宮女の中でも取分け若く美しい者を五人だけ選んで、自分の左右に集め、そこへ太子を招きよせることゝした。やがて太子は召されて皇后の御座所へ出て見ると、そこには綺羅びやかに着飾り、粧を凝した五人の美姫がゐて、いづれも花のやうな顔に無限の媚を浮べ、懇ろに太子を歡待すのであつた。

けれども亡き寵姫の思で、胸が一杯になつてゐる太子は、これ等の美姫を見ても何うしても浮いた氣は起らず、たゞ鬱々として冷かな素振を示すばかりであつた。すると女官の長が太子の傍に来て、

『さあ皇后様の仰せでございますから、五人のうち、どれでも御氣に召したのを仰しやつて下さいませ』と催促した。

太子はそのとき五人の美姫には少しも興味を抱いてゐなかつたが、皇后の命令と云ふのだから、それに背くことも出來ず、『えゝ、儘よ、どうにでもなれ！』と心の中で思

太子をして美人を選まじむ

でたらめに選んだのが將來の大福因さば

ひながら、碌々五人の美姫の顔を見もせず、たゞよい加減に一人を指して、

『あれが可いだらう』と答へた。それは太子の一番近くに坐つてゐた王氏の女で、政君といふ美姫であつた。すると女官の長は、

『よろしう御座います』と云つて、その旨を皇后に申上げたので、早速その夜の内に侍中の杜輔と掖庭令の濁賢の二人を附けて、政君を太子の御殿へ送らせたのであつた。

太子の宮殿には之れまで十數人の侍女がゐて、そのうち長いのは七八年も寵愛を受けてゐたのであるが、まだ一人も子を産んだものはなかつた。けれども政君が來てからは、痛く太子の氣に入るやうになり、間もなく懐妊して、甘露三年に王子を産んだ。宣帝は非常に悦び、驚と名づけて嫡皇孫と爲し、太孫常といふ皇孫附きの役目までも新設して、左右を離さぬほどに寵愛したのであつた。

黄龍元年宣帝が崩じて太子爽が位に即いた。これが即ち元帝である。太孫の驚は皇太子となり、驚の生母の政君は婕妤の位に上り、政君の父の王禁といふものに陽平侯の爵を賜はり、更に三日の後には王婕妤は皇后に冊立されたのである。けれども當時この王政君が、將來漢室を滅す一大原因となるとは、本人は勿論誰も豫期してゐなかつた。

王氏忽ちお氣に入る

王氏始めて顯榮



後になつて又傳昭儀の腹からも皇子が一人生れた。元帝は非常にこの皇子を愛してゐたので、遂には太子鶯を廢しようとしたが、皇后やその兄の王鳳などが一所懸命になつて運動をした上に、史高の子の史丹といふものが、元帝の寢室に入り、涕泣して諫言したので、鶯は僅に廢されることを免れ、かくて元帝が崩じてから、遂に帝位に即いたのである。成帝即ちこれである。

三

成帝が位に即くと忽ち王氏の一族は悉く拔擢せられて大官高位に上り、遂にその勢威隆々として漢室を壓するやうになつた。成帝の母王太后は宮中に於て絶大なる勢力を振ひ、太后の兄王鳳は大司馬、大將軍となつて、尙書のことを管掌し、建始元年にはその弟王崇は安成侯に封ぜられ、又王譚は平阿侯に、王商は成都侯に、王立は紅陽侯に、王根は曲陽侯に、王逢時は高平侯に封ぜられた。丁度その當時のことであつたが、一日濛々たる黄霧が四方を立ち罩めて、天地暗澹として咫尺を辨ぜざることがあつた。人々は之を見ると、

「これは王氏の一族が何の勳功もないのに、無暗に封ぜられたので、天が怒つて異變を現はしたのである」と嘯き合つた。

河平二年には王氏の兄弟どもは悉く列侯に封ぜられ、次いで陽朔三年には王音が大司馬に任ぜられ、王譚が城門の兵を總轄することゝなつた。こゝに至つて兵馬の大權悉く王氏一族の掌中に歸することゝなつたのである。かくて王太后の兄弟一門は悉く國家樞要の職に任ぜられることゝなつたが、獨り太后の弟王曼のみは、若くして死んだゝめにその恩德に浴しなかつた。太后は痛くこれを氣の毒に思ひ、曼の子の王莽を取立てゝ、永始元年に新都侯とした。これが後年漢を滅す元兇となつたのである。

成帝は位に即いてから後は、徒らに酒色に耽り、燕樂を事とし、毫も政治を顧ることがなかつた。殊に帝が趙飛燕とその妹の合徳を寵愛するやうになつてからは、その放埒はますます甚しくなつた。飛燕は趙氏の女であつたが、纖便輕細で、舉止が翩々として輕快だつたので、人々は之を稱して飛燕と云つた。又合徳は膏滑にして浴するときには身體より光を放ち、その上音聲が清らかで、歌舞に巧みであつたと云ひ傳へられてゐる。後飛燕は皇后となり、合徳は婕妤となつて、互に寵を競うに及んで、帝は二人の色香に



溺れ、朝を廢して深閨にあつて、只管遊樂に耽つたのである。

かうした間に朝廷では、王太后を中心として王氏の一族が思ふままに跋扈して、その專横は往々にして人目を恃たしむるものがあつた。それで朝臣のうちには、外戚王氏の權勢を今のうちに抑制しなければ、由々しき大事が起るであらうと上書する者が少くなかつた。かうなると、今まで酒色に心を奪はれて政治を見なかつた成帝は、多少疑惑の念が起つたので、一日密かに師傅の安昌侯張禹の邸に至り、左右の者を遠ざけて、

「實は近頃朕の所に、王氏の一族が專横を行つてゐることや、又近來色々の天變地異のあるのは、天が王氏の跋扈を怒つてゐるのだから、早速その一族を罰しなければならぬと云ふことなどを上書する者が澤山あるのだが、本當に王氏の一族は不都合なことを働いてゐるのであるか。お前はそれについて何う考へてゐるか」と問うた。

すると禹はお上手者で、正直なことを云つて王氏に睨められるよりも、それに媚びて身の繁榮を願ふのが第一と考へて、

「一體天變地異などの起りまするのは、それが何のために起りますのやら、私どもにはとんと其の意味が判りかねるのでございます。で、聖人の孔子さへも、怪力亂神を談

頼もしから  
天子の輔  
導役

らずと云つて、かゝる事を語るのを避けられたのでござります。況して私どもなどが、かれこれと揣摩臆測などの出来るものではございません。それに王氏のことを上書する者どもは、多くは迂儒書生の輩で、天下の大道を亂るものでござりますから、必ずともにかゝる事を一々お取上げないやう願はしう存じます」と奏した。

成帝は常に自分が信用してゐる張禹の言葉を聞き、扱はさうかと安心して、爾來少しも王氏を疑はなかつた。それを幸に王氏の一族はますます「牢乎たる勢力を張り、遂に綏和元年には王莽を大司馬に拜するまでになつたのである。

かくて同二年に成帝は在位二十六年にして暴かに崩じ、次いで哀帝が位に即いた。帝は名を欣といつて、恭王康の子で、元帝の孫であつた。成帝には子がなかつたので、欣を立て、太子としたのであつた。然るに哀帝は元來王氏の出でないのだから、如何にもして王氏の專横を抑制せんものと思ひ、先づ大司馬王莽を罷免して董賢を以て之に代ふることにした。然るに哀帝は王氏を抑へ遂げない内、在位僅に七年にして崩じ、次いで中山孝王の子劉箕子が僅に九歳で位に即いた。即ち平帝である。幼帝であるからこの機會にと王氏は再びメキ／＼と勢力を恢復した。王太后は自ら朝に臨んで政を攝し、大司

帝は王氏を  
疑はず



馬董賢を自殺せしめ、その後釜に再び王莽を据えて諸政を執り行はしめた。莽は封ぜられて安漢公と爲つた。元始三年には莽の女を納れて皇后と爲し、翌年莽に宰衡の號を加へ、以て諸侯王の上に位せしめることとし更に九錫を賜つた。こゝに於て王莽は廟堂の上に立ちて万機を行ひ、その號令は一として行はれないことがなかつた。

四

王莽は幼時より大志があつて、夙に己れの立身榮達を望んでゐた。然るに王政君が一度皇后となつて、その一族から九人の侯と五人の大司馬とを出し、その子弟がいづれも榮耀榮華に耽つてゐた時に、彼ばかりは父が早く死んだゝめに恩恵にも與らず、依然として獨り貧苦の生活を送つてゐた。それでも彼は恭儉を旨とし、衣服の如きも儒生の着るやうな粗末なものを纏うて、毫も恥づる色なく、沛郡の陳參に師事して汎く古人の事歴を學んでゐた。かうして彼は努めて英俊明敏の士と交ると同時に、長者に對しては禮儀を以て事へ、萬事萬端抜け目なく立ち廻つたので、次第に衆人の信用を博するやうになつた。殊に陽朔年間伯父の大將軍王鳳が病氣となつたときには、王莽は日夜病床に侍

し、或は懇ろに病苦を問ひ、或は自ら藥餌を供して、數ヶ月の間衣帶も解かず看護したので、王鳳はすつかり感心してしまつて、太后に薦めて莽を黃門侍郎としたのであつた。

ところが飽くまでも抜け目のない莽は、朝廷のことは万事伯母の太后の自由になることを知り、若し太后の氣に入りさへすれば、思ひのまゝに立身出世が出来ると思つたので、爾來全力をつくして太后に取入つたのである。或時太后に仕へて氣に入つてゐた女官が病氣に罹り、實家に歸つて保養をしてゐた時などは、莽は態々その家に見舞に行つたことさへあつた。こんな事までして彼が直接間接に太后の甘心を買つたことは、到底常人の企て及ぶ所でなかつた。果然莽はかうした手段によりて、メキ／＼と太后の信用を博し、成帝の永始元年には早くも新都侯に封ぜられて、綏和元年には大司馬まで歴昇つたのであつた。

王莽は太后や一族を籠絡したと同じやうに、又國民をも瞞着した。彼は今や位人臣の極に達し、富貴は意のまゝであるにも拘らず、表面にはますます恭儉の風を装ひ、汎く賢人を聘して禮讓を以て遇し、又屢々金錢を散じ、その他あらゆる手段を以て官民の歡



人心收攬に努む

女の身最眞國を失ふ

五四

心を買ふことに努めた。そればかりでなく、彼は古聖賢の教を奉じ、飽くまでも仁義道徳を尊ぶやうに見せかけ、古の聖學を復興すると稱して、明堂、辟雍、靈臺等を築き、天下の學者を招き、國內の經籍を蒐集し、天文圖讖を集めて大いに聖賢の道を鼓吹した。かくて彼は密かに篡奪の志を抱き、豫てから仁政を施して人心の收攬に努めたから、彼の徳を讃頌した上書を奉つたものが、四十八万七千五百七十二人に及んだ。但しその夥しい上書の中には、莽が腹心のものを全國に遣はして、否應なしに書かせたものが大部分を占めてゐた。

元始五年の冬、平帝が十四歳のとき、病氣に罹つて引籠つた。すると王莽は璧を戴き、圭けいを秉とつて泰山の神に向つて、『私が身を以て帝に代りたい』と祈願をこめた。が、それは恐らく帝の病氣に代らうと云ふのではなく、帝の位に代らうと云ふ意味であつたのだらう。爾來莽は天子が常に身を離さず持つてゐた、詔勅を認める御料の御物を己れの手許に取上げ、勝手次第に自分に都合のよい詔勅を濫發した。かくてその年の臘日(十二月)宮中で椒酒を飲む儀式があつたときに、莽は密かにその中に毒を入れて献上し、遂に平帝を毒害したのであつた。

遂に幼帝を毒殺す

飽くまで鉢裁を粧る

王莽は今やあらゆる權力を一身に集め、詔勅までも自分勝手に作つてゐるのであるから、もはや新に帝を立てる必要はなかつたのであるが、それでも人一倍外形を氣にする彼は、すぐに帝位に即くのを遠慮した。そして彼は豫てから買収しておいた大學者や博士の口を借りて、劉嬰といふ、昨年生れたばかりの宣帝の玄孫を、田舎にゐる宗族の中から見つけ出し、之を以て皇太子として迎へ、莽が万機を攝することゝなつた。これは莽を以て昔の周公に比し、嬰を以て成王に比したのであつた。然るにその後莽は遂に僭して皇帝の位に即いたが、大義名分を怖れて、眞の天子の稱號を用ひずに、假皇帝の名を用ひ、年號も亦居攝と改めることとなつた。

## 五

王莽はこれまで謹慎恭儉の風を装つて、飽くまでも人民を瞞着してきたが、今や全く赤裸々にその鋒鋷を現はすやうになつた。こゝに於てか國民は啞然として驚き、朝臣の心あるものは慨然として憤つた。かくて居攝元年には漢室の一門の安泉侯劉崇が張昭と謀つて數百人の兵を集めて、南陽苑に事を擧げたが、一敗地に塗れて死し、次いで二年

女の身最眞國を失ふ

五五



に故の丞相方進が子の、東郡の太守翟義てきぎも兵を起したが、遂に戦利あらずして空しく戦死してしまつた。

王莽悉く假面を脱ぐ

初始元年に至り、王莽は愈々その假面を脱して、遂に假皇帝から眞皇帝となり、黄衣を着、王冠をつけて未央宮の前殿に於て天子の位に即き、漢の國號を廢して新と更め、その年の十二月朔日を以て建國元年としたのである。然るにその時まで孺子嬰は皇太子であつて、まだ天子の位に即いてゐなかつたので、天子の玉璽は王太后が預つて、長樂宮の奥深くに所藏されてあつた。で、莽は眞皇帝にはなつたものゝ傳國の玉璽がなくては、形式に缺ける所があるので、安陽侯の王舜といふものを太后の宮殿にやつて、玉璽を受取らせることにした。すると曾ては淺はかにも己れの一族の繁榮にばかり熱中して、毫も漢家の將來について考へなかつた太后は、漢室の滅亡した今、始めて夢から覺めたやうに王莽の野心を知つて、以ての外に立腹し、

王太后始めて覺醒す

『莽は幼少のときに父を失つて孤兒となり、貧しく暮らしてゐたので、私が可愛さうに思つて面倒を見てやつたのが因もとで、だん／＼と出世し、その一門が悉く高官になつたのじゃ。これは偏に皆漢の皇室のお蔭なのに、その莫大な御恩に報いないばかりか、却つ

我は漢の寡婦なり

て恩を仇にして、主君の國を奪はうとは何んたる人非人の所業しよさであらうぞ。莽は既に他人の國を奪つて新の皇帝となつたのだから、いつそ自分で勝手に新の國璽を作るがいゝじやないか。何も亡國の漢の國璽を無理やり持つてゆくには及ぶまい。私は元の漢室の寡婦だから、今更玉璽のことなどには關係がないのじゃ。それに私はもう年をとつて、明日にも知れぬ命だから、若し私が死んだなら、玉璽と一緒に葬つてもらひたいのだ。私が生きてゐるうちは、決して玉璽を渡すことが出来ない」と老の涙を溢しながら、かへらぬ愚痴を繰りかへすのであつた。

王舜は之を聞いてゐたが、稍々暫くあつて、

『仰は重々御尤ですが、王莽が一旦云ひ出した以上は、今更後に引きますまい。で、若し屈竟な武士でも差向けて、手荒なことでも致しましたら、取りかへしの附かぬことゝなりますから、何卒私に玉璽をお渡し下されたい』と脅したので、太后は言ひ甲斐もななくオメ／＼と玉璽を取出して

國璽を地に投げて泣く

『もう私は今に死ぬる身だが、長い目で將來を見てゐるがいゝ、今に屹度莽の一門が殺されて、曝し首にされる時がくるだらうから』と云つて、手にしてゐた玉璽をさも無念

女の身最眞國を失ふ



さうに大地へと投げつけた。

かくて漢の皇室は高祖が即位して以來、十二世二百九年にして滅亡したのである。こゝに憐をとどめたのは孺子嬰の身の上である。彼はその後改めて安定侯と呼ばれ、故の鴻臚府の一室に幽せられ、一人の乳母を附けられたのであるが、乳母はたゞ食物を運んでやるだけで、一切言葉を交はすことを禁ぜられてゐた。それに子嬰は一步も室外へ出ることを許されなかつたので、彼は成人してからも啞者と同じやうに、物を云ふことを知らず、犬猫さへも辨へなかつたと云ふことである。

### 農家から起つた後漢の光武

一

王莽が漢の天下を篡つて帝と稱した最初においては、彼に對して兵を擧げて抗する者が多かつた。劉崇や翟義や劉快など相踵いて討莽の軍を起したが、何れも事を成すに至らなかつた。斯うなると彼は衆望を集めて推し立てられたのではなくても、一時の少康は得られるのであつた。誰も心服はしないが、迂濶に兵を擧げて一敗地に塗れるのは莫迦々々しいから、暫く機運の熟するのを待つ外はない。決して治まつてゐるのではなく、時勢を窺ふための沈黙が若干年は續く。王莽が十八年の在位は正にこの意味で保たれたのである。

この誇大妄想的な王莽の新政府では、國庫の窮乏を彌縫する爲に、往々にして大官を富豪に賣り付けた。南陽縣の宛といふところに代々素封家として知られた李守も、またその一人に當てられ、有難くもない宗卿師といふ帝室の大官を買はせられた。この人は

農家から起つた後漢の光武

買はせられた官位

篡立者にも少康あり



至つて謹直な老人で、閨門の内を慎むこと宮廷の如しと稱せられた程だったので、さてこそ王莽は彼を宮内大臣といふやうな位置に置いたのであつた。

李守は百人に近い大家族の家長だつた。郷里の宛と京師とに、彼の家族は別れて住んだ。子息の李通も五威將軍從事から巫縣(四)の丞となされたが、更に有難くもないので、辭して郷里へ歸つてしまつた。

李通の從弟に李軼といふものがゐた。この男は通よりも山氣があつて、事を好む質だつたので、官を罷めて歸つた通を訪ね、そろそろ相談を持ちかけた。

『新帝の世も最早や先が見えたやうに思ふ。天下はやはり劉氏の漢に逆戻りする外は無ゐる。とり分け劉縝(字は伯升)劉秀(字は文叔)の兄弟はものになりさうに思はれる、どうだ、一つこの兄弟を昇いで見ては?』

二人は何う話を纏めたか、やがて劉秀と三人で密々と計畫に取りかゝつた。

劉秀は南頓の縣守の次男で、その頃二十八の青年であつた。身丈七尺三寸、鬚眉美しく、口大に鼻高く、額上の骨の高いのは日角といつて天子の相であると稱せられる容貌

を具へてゐた、彼は新野の陰麗華といふ美人を得たがつてゐたが、學問のために都へ出て執金吾(警視總監のやうな官)の威風堂々たる行列を見て美しくなり、『官吏となるなら執金吾、妻とするなら麗華女だ』と歎息した。これで見ると始から遠大な望を抱いてゐたのではなかつたことが察せられる。

その頃南陽は劉氏の巢窟であるだけに、とかく不穩の事が多く、その上打續いて蝗の害が酷しく、群盜は横行する、人民安き心もなかつたので、秀は新野の方へ難を避け、宛の町へは折々買物に出かけるくらゐであつた。彼は大金持の息子たちが、自分を看板に立て、大芝居を打たうとしてゐるなどは夢にも思ひ寄らぬ事であつた。今まで通りに田畑を耕作してゐるのが安全な本分のやうに考へてゐた。然し内心密かに機運を察するの明はあつたに相違ない。

兄の伯升の方は性來の慷慨家で、漢の天下は奪はれ劉氏一族は見る影もない悲境に沈淪してゐる現状を目して、常に悲憤の辭を洩し、弟の秀とは違つて耕作などには目もくられず、旦暮社稷復興の大望に燃えてゐた。さうして平林あたりで寄々計畫を回らしてゐた。



さて李通李軼と劉秀とは鼎座して凝議した。秀もこの大財力の後援の下に事を擧ぐるの有利なことは明かであるから、一つやつて見ようといふ氣になつた。

『だが李守老人は都にゐらるので、我々が事を擧げたと知れたら、老人の身に必ず禍が及ぶだらうと思ふが、何とする所存だ』と訊くと李通は、それには又方法もある事と心配もしなかつた。而して謀を定めて劉秀と李軼との二人は竊かに春陵へ行つて旗上げの準備に着手した。王莽の天下は元來盗んだものではあるが、ともかくも統一した大新國であつたのを、この三青年の密々談が物になつて見事に天下はガラリと急轉した。

この看板に立てられた青年劉秀字は文叔こそ後漢二百年の朝を開いた世祖光武皇帝その人であつた。

看板に立つた青年は未だ天子

二

劉秀と李軼とが春陵へ行くと、李通は都にゐる父の李守の許へ密使を送つて歸郷を促がした。然しその使者は途中で病死して達しなかつたが、李守は通知を受けなくても略その状勢を察してゐたから、取り敢へず郷里へ歸らうと考へた。ところがその親友に中

郎將の黃顯といふのがあつて、

『早く逃げるのも宜いが、諸方の關所は既に嚴重に固められてゐる、君の貌は見知られてゐるし、これは一つ公けに歸國養老を願つた方が却つて安全だらう』と忠告した。

李守はこの言を納れて上書をした、その書が未だ天子の目に觸れない内に、李通等が叛を謀ることが聞えて、守は忽ち獄に投ぜられた。黃顯は驚いて王莽に謁見し、

『李守は兒等の不軌を聞いても逃げも隠れもせず、堅く忠節を執つて御沙汰を待つてゐます。一應私に李が一身をお預けを願ひます。私が彼を召連れて南陽へ馳せ下り、兒等に篤と説諭を加へましたなら、翻然と心を改めますることゝ存じます。而して事件が大きくならぬ内に鎮撫されることゝ考へられます。萬一この策が成功せず、兒等が飽くまで叛を企てますならば、北の方遙かに都を向かせて、李が瘦首を私が刎ねるまでゝございます』と願つた。

王莽も一旦はこれを許したが、李通等は劉秀を押し立て、兵を擧げて都に向ふとの報が來たので、李守も黃顯も殺されて了つた、家族どもゝ同じく殺された。

南陽一帶の群盜の頭領どもは、その時皆一方の將となつて討莽の軍を催ほした。平林

農家から起つた後漢の光武

親友の爲に懇願す



始めて分捕  
の馬に跨る

農家から起つた後漢の光武

六四

では秀の兄の劉伯升が起ち、新市では従兄劉玄が將となり、下江には王常が勢を張つた。これ等の大將たちは手始めに竟陵、安陸などの地方を攻略して、兵糧や軍費を作つた。劉秀は李通を軍師として、地皇三年十一月長聚といふ村を攻めたのが初陣で、始めて分捕の馬に跨つて威容を備へた。それまでは未だ馬といふものを持たず、實に牛に跨る外はなかつたのであつた。

秀は兄の伯升と合して甄阜けんぷの屬正たる梁丘賜と小長安に戦つたが、散々に敗戦をした。秀は一頭の馬に妹の伯姬と共に跨つて逃げ出した。途中で姉の元が走つて行くのを認めて馬に乗せようとしたが、姉は手を振つて、

『だめ〜お前たち早く逃げなければ捕まつて了ふよ、早く〜』と急せき立てたので、その姉を残して馬を飛ばした。姉や弟たちは遂に敵の爲に殺された。

今度は近郷の諸豪を糾合して再び梁丘賜と戦ひ、一夜にして甄阜を陥れ梁を斬るを得た。かくて附近の諸將の軍を合すると十餘萬に達する討莽軍が出来上つた。そこで總帥そうすうに仰ぐのは誰にするか、問題になつた。南陽組は劉伯升を推し、新市や平林組は劉玄を推した。伯升の名には王莽も恐れをなし、その首に莫大の賞を懸け、人相書にんさうがきを天下に配

忽ち起る總  
帥問題

きまりの悪  
い天子様

布した程の勇將で、若し彼を統帥としたら軍律嚴格であまりに怖ろしい威令が行はるゝだらうと考へて、彼を統帥に頂くのを憚る者が多かつた。さうして凡庸な劉玄が遂に首領に推され、遂に地皇四年二月に皇帝に立つといふことになつた。壇いんすいを消水の濬ほりに築き南面して諸將の拜賀を受るのに、玄は面を赤くし汗を流して、手を額に當て、言葉も出なかつた。伯升は大司徒、秀は大常偏將軍に拜せられ、宛えんの町は俄かに帝都となつたのである。

秀は軍を進めて昆陽こんやうを陥れた、定陵その他風を望んで降るといふ勢になつた。京師では形勢容易ならざるに驚き、天下の兵を擧げて討漢の軍を起し、王邑、王尋、嚴尤、陳茂等の諸將は四十餘萬の大軍を率ゐ、百萬と號して南下した。その軍中には虎や豹、犀、象など猛獸を驅り集めて各軍に屬せしめ、その出征の光景は旌旗輜重千里絶えずといふ大規模のものであつた。

この仰山な征討軍の陣容を聞いて、元來烏合の衆たる昆陽の漢兵は忽ち膽を寒うした。敵の姿も見ない内から逃げ出すものが多く、城中に踏留まつたのは纔かに八九千に過ぎない小勢であつた。この形勢を見て劉秀は考へた。このまゝ孤立の城に立籠つて、千萬

農家から起つた後漢の光武

六五



寡を以て衆  
に對する策

農家から起つた後漢の光武

六六

の大軍に包圍されては策の施すべきやうが無い。一時も早く自ら城を出て散亂した味方を集めるが上策である。斯う考へたから城は王常に託し、秀自身は李軼等と僅に十三騎で城外へ斬つて出で、一方の血路を開いて圍の外へ脱するを得た。

寄手の兵はやがて昆陽の城を十重二十重に取圍んだ。鉦鼓の響は十里の外に聞え、夜となく晝となく強撃を射込むので、城内では水を汲みに行くにも、戸板を負つて出ると云ふ有様になつた。兵糧は忽ち盡きて城の陥いるのは目前に迫つた。

圍を衝いて出た劉秀は歩騎千餘を集め得たに過ぎなかつたが、その僅少の兵を率ゐて秀は包圍軍に斫り込んだ。秀自身に先頭に立つて縦横に敵を斬り伏せる勢は、敵も味方も驚き恐れた。今まで小敵といへども決して侮らず、敵を怖るゝものとさへ思はれてゐた劉秀が、この目に餘る大軍の中へ無二無三に割つて入つたので、續く兵士も勇氣百倍し、縦横無盡に駈け散らすのであつた。

城内からもこの有様を見て取つて、三千の決死隊が斬つて出た。僅かながら命を捨て懸つた内外の兵に斬り捲られて、寄手の陣は次第に崩れ始めた。さうなると漢兵の勇氣は更に加はり、遂に包圍軍は總崩となつて來た。大軍の事ではあり、それが總崩れと

大勢を定む  
る昆陽の血  
戰

なると、その混亂は名狀すべくもなく、互に押し倒し踏み越ゆるまゝに、伏屍百餘里に連なる慘敗となつた。その上に大雷雨が襲來し、烈風に民家の屋根は吹き飛ばされ、河水は忽ち氾濫し、準備された猛獸どもは水攻に驚いて狂ひ出し、味方の軍中を暴れ廻るといふ始末で、百萬の大軍は目も當られぬ敗北となつた。

三

昆陽の一戦は天下の大勢を定むるものとなつた。その慘敗は王莽の死命を制するものとなつた。この敗報が傳はると今まで己むを得ず忍んでゐた國民が、一齊に叛くに至るのは當然であつた。果せるかな到るところに討莽の旗は高く掲げられた。

勢に乗じた劉秀は馮異を降し、成紀、隗囂等を従へ、威望頗る盛大となつた。然るにその間に漢の假の都たる宛では、驕名天下に轟いた劉伯升が李軼等の奸策に陥いられ、劉玄の爲に殺害された。秀はこれを聞いて一旦宛へ引返した。劉玄に謁して他意なき旨を述べ、兄の喪に服することもなく、さりとて昆陽の大功を誇る風も更になかつた。玄の方が却つて甚だきまりの悪い感があつた。そこで新に秀に破虜大將軍を授け武信侯に

天下忽ち響  
應す

農家から起つた後漢の光武

六七



封じてその功に酬いることにした。

討莽軍はその秋九月遂に都を攻めて王莽を斬つた。劉玄は長安を帝都とした。

然るに玄には徳なく威なく、群雄を御するの材でないから、忽ち輕んぜられて、劉望は汝南に、李憲は盧江に、王郎は邯鄲に、各々帝と稱し王と稱して立つ有様であつた。

その中に劉秀は、尙も軍に將として河北一帯から北方薊までも平定して、天下統一のため奮闘を續けてゐた。數次苦戦もしたが、遂に王郎を斬つて邯鄲に入つた時、長安からは秀を封じて蕭王とし、兵を收めて凱旋せよとの命が來た。當時長安では謀將功臣等劉玄を輕んじて、宮中府中の秩序も紊れ、帝王の聲望といふものは少しも無かつた、秀は命を奉じて兵を收めたが、邯鄲に休養して都へは歸らなかつた。

だらしなき帝王

偶々秀に策を獻するものがあつた。

『劉玄が帝位を保ちきれないのは明かな事で、遠からず大紛亂となるに相違ない。その際萬一劉氏以外の者に漁夫の利を占められるやうな事があつては心外千萬である。機先を制して今の内に自ら檄を四方に飛ばしたなら、天下翕然として麾下に集るであらう。兵を收めるのは以ての外だ』といふのであつた。

諸將強いて帝號を捧ぐ

長安からは再三凱旋を促がして來たが、然し秀は歸らなかつた。そして兵を練つて河内の地を平定し、更に中山へ行つた時、部下の諸將から皇帝の尊號を奉つた。秀は未だそれを受けなかつた。然し諸將の熱望は止まなかつた。そして諫めた。

『親戚を捨て郷里をあとに、遠く大王の軍に従つてゐるのは、要するに大王に縋つて立身せんが爲である。此際衆士の願を冷かに斥けては部下の將士皆力を落し、郷里に歸る氣を起すであらう。今手足を失つては天下に何事をもなすことは出來まい』

この諫言には秀も動かされて、郟まで來て遂に衆望を擔つて皇帝の位に即いた。そして國を漢に復し、年號を建武と定め、天下に大赦を令し、百官の制を整へた。數年前まで新野の農民と伍して、宛の町に穀物を買ひに來てゐた若者劉秀字は文淑は、忽にして大漢の天子となつたのである。

最初から體を成さないでゐた劉玄の朝廷は、斯うなると自然消滅する外はなかつた。叛いたでもなく、欺いたでもなく、一戦も交へず、さりとして談判もせず、全然存在を無視されて帝位の消滅を見たのであつた。然かも劉玄は山東に起つた赤眉の賊に誑かされ、長安を明け渡して賊軍に降つたが、忽ちに殺されて愚名を残したのみであつた。

滑稽なる帝王の末裔



農家から起つた後漢の光武

七〇

蜀の公孫述、隴西の隗囂、河西の竇融等も相踵いで平らぎ、建武二年一月には全く天下を統一し、後漢十二帝百九十六年の基は此處に確立された。

僅かに執金吾の威容を羨んだ劉秀は、一朝にして天子となつた。妻にするならと歎じた陰麗華は、既に天子となる三年前に夫人として彼の手に迎へられてゐた。然し麗華には子が無かつたので、恰もその年男子を擧げた郭夫人が后に冊立された、但しこの皇后は後に廢せられ、陰氏は太后として明帝の代に崩じた。光武帝が天下取りの最初の資本を投じた李通は、帝の妹の伯姬を妻とし固始侯に封ぜられ、その兒等も榮達したが、山氣の多かつた李軼は、光武即位の前まで劉玄の參謀役であつたが、詐術に富むために人望が無く、遂には同じ仲間のはずの朱鮪に殺されて了つた。

#### 四

幸福な運命の兒光武帝

漢は高祖劉邦、光武帝劉秀、蜀漢の昭烈帝劉備と三度社稷を興した。その中で最も順調に幸福に事を成し遂げたのは光武帝である。高祖は項羽といふ勁敵が残り、辛つとそれを亡ぼすと、部下に韓信や英布のやうな宛然一大敵國の觀ある者がゐた。蜀には魏と

韓信たらざるを得んや

吳と鼎立して、遂に天下を統一する事が出来なかつた。光武にはさういふ難關はなかつた。言ふまでもなく彼の功勞は目醒しいものであつた。然し彼は手剛き競争者といふものを持たなかつた。始めて帝として立つ人は、多くは若干の無理をして立つのである、が、光武は急がずとも他に横取さるゝ憂なく、無理をせずに向うから轉がつて來るのを待つてゐたやうなものである。若し劉玄が天子の材であり、李軼その他玄の周圍の人々が守成の器であつたならば、光武の運命は韓信の末路に似たものとならざるを得なかつたであらう。幸に王莽や劉玄の如きすら一時は天下に君臨されるやうな意氣地のない時代だつたので、光武の偉材は何の反抗も故障もなしに蠢々と伸びたのである。彼は張良、陳平、蕭何を要せず、又臥龍鳳雛を起たしむることもいらなかつた。惑はず争はずに天下は彼の掌中へ轉げ込んだのである。



## 痛ましき恐怖の一生

一

後漢最後の天子獻帝は、人生悲惨の極度を示すために、この世に生れ出たやうなものである。帝は實に未だ母の胎内に在る頃から、既に虐待されはじめて、五十餘年の間、あらゆる迫害と侮辱と酷遇の限りを受けた。あらゆる困苦と缺乏と悲歎の限りを嘗めた。その五十餘年は、帝に取りては如何に永い々々憂き世であつたであらう、如何に涯しなく續く業因に泣いたであらう。その弒逆を免れたのはせめてもの幸福のやうではあるが、實はその凡庸無力の爲に價無き命を預けられたに過ぎないので、寧ろ早く死してその數々の悲惨事に遭遇しなかつた方が、遙かに幸福であつたに相違ない。

苦しき通し  
の五十年

父靈帝の後宮では何貴人(貴人は女、官の官名)が權威が強かつた。後漢發祥の地たる南陽は宛の生れで、屠者の娘であつたが、身丈七尺一寸といふ大女の上に、嫉妬が強いで怖れら

痛ましき恐怖の一生



午殺しの娘  
が皇后

痛ましき恐怖の一生

七四

れた。何氏は皇子弁を生んだ、それまで靈帝には度々子が出来たが、何れも育たなかつたので、今度は何とか育てたいと、道士の家へ里子にやつて置いた。皇后の宋氏が廢せられて幽殺された後を承けて、何氏は光和三年に皇后に冊立された。

ところがその年に、王美人(美人は官名)も帝の胤を宿した。何後に取つては不安の種である。そこで欺いて墮胎薬を飲ませたが、その効もなく、翌年王氏は王子協(獻帝)を生んだ。皇后は矢も楯も堪らず、先づ王氏を毒殺した。襁褓の中に生母を亡つた皇子協は祖母董太后の手で育てられた。

宮廷にバザ  
ーを開く

靈帝は意を國政に専らにするやうな天子でなかつた。のみならずその行動は世の譏りと嘲りを買ふことが多かつた。皇子協が生れた光和四年には、宮中でバザーを開いた。種々の商品を陳列して、女官達を賣子に仕立て、天子親らも番頭手代の風姿をして喜んでゐた。後庭に飼つてある犬には衣冠を着せてゐた。四頭の驢馬に車を牽かせ、親ら轡を取つて駆け廻ることが好きだつたので、都には四頭車が流行した。主馬の役所を設けて馬の買上げをやつたために、一頭二百萬錢にも騰貴した。さういふ際に重臣たる竇武、陳蕃等にも大局に處する材幹なく、大小の政務は帝の左右に阿附追従する宦官どもの掌

権臣の邸は  
宮城を凌ぐ

中にあつた。宮中府中の綱紀紊れ弛んで、宦者どもの傍若無人なふしだらの中に混じて、天子親らもそのふしだらを續けてゐた。

権力を得た者どもは競つて大邸宅を構へた。その規模結構は宮城を凌駕するものがあつた。靈帝は高樓の眺望が好きであつたが、宦者どもは帝を樓臺に上らしめないやうにした。それは臺上から自分どもの大邸宅の嚴めしく聳え立つた状と、都の町の寂れ行く姿とを見られては面白くないからであつた。

『昔から天子は高きに登らずとてあります、高きに登れば百姓離散すと申します』  
斯ういふでたらめを言つては帝の意を枉げてゐた。

靈帝の時には殆ど朝廷といひ國家といふのが無意義になつてゐた。唯腐敗の極に達しながらも未だ崩壊しないでゐたのは、光武以來の諸制度が存續してゐたからで、全く情性的の存在に過ぎなかつた。一旦破綻の徴が見えたとなると、ガラ／＼と根底からの大崩壊とならざるを得ない状態であつた。

二

痛ましき恐怖の一生

七五



漢朝覆滅の序幕は黄巾の賊によつて演ぜられた。

鉅鹿に張角、張寶、張梁といふ三人兄弟があつて、太平道と稱する妖術で愚民を惑はし、信徒數十万人に及んで、隠然一宗教國の觀を呈してゐた。中平元年に至つて歲恰も甲子に當り、改革の起る年だといふ豫覺が天下一般にあるのを利用して、

蒼天已死、黃天當立、歲在甲子、天下大吉、

といふ文字を、到るところの城壁や門牆に白く書いて廻つた。その意味は、漢の天下は滅びて太平道の天下になるのは今年だといふのである。人心は頗る動搖した。その徒馬元義といふものが、宮中の一部と策應して先づ事を擧げんとしたが、早く事洩れて元義は車裂にされた。然しこの一敗で屏息するやうなことはなく、却つて八方の徒黨は一時に蜂起し、黄色の帽を目印として天下を荒し廻ることになつた。世に所謂黄巾の賊である。

朝廷は皇甫嵩を總帥として討賊の軍を起し、翌年張角等を殺して一時賊徒を潰亂せしめてしまつたが、久しく動かさなかつた干戈の響は天下に聞えて、多少腕節の強い者は密かに亂を思ふやうになつた。英傑曹操の如きもこの時始めて甲冑を帶して戰の味を

大混亂は黄巾の賊に始まる

賊平らいで亂を思ふ

知り、事を好む氣を唆られたのである。

賊の騒が鎮まつたといふので行賞があつた。宦官張讓等十餘人一時に列侯に封ぜられた。趙忠は車騎將軍になつた。然しそれは多くの不平と怨恨とを買ふことになつた。

冀州の刺史王芬といふ者が、故の太傅陳蕃の子の逸と道士襄楷とに會した時、道士は「此頃の天文を察すると、宦官たちの運命が甚だ宜しくない、重なる人々は族滅を被るやうなことになるはしないかと思ふ」といつた。

「それは痛快な話ぢや」と陳逸は喜んだ。

「あいつ等を叩き潰すことは、拙者年來の宿願なのぢや」と王芬は慷慨した。

王芬は同志を募つて密かに大計畫を立てた。それは先づ黒山の賊徒討伐といふ名義で兵を起し、帝の巡幸を機として留守の宮城を包圍し、宦官どもを全部取押へ、勢に乗つて帝を廢し合肥侯を擁立しようといふのであつた。當時議郎といふ官にあつた曹操に、この話は持ち込まれた。然し曹操は輕々しく相談に乗らなかつた。

「天子の廢立は伊尹や霍光の如き偉大な勢力家にも難事としてある」

斯う突放された王芬の計畫は事前に洩れ、芬は逃げて平原に到つて自殺した。芬の計

曹操容易に動かす



略は成功しなかつたが、帝王闇愚、朝廷無力、宦官專横と來ては、各地に駐屯する武將等の胸中にこの種の考が往來するやうになつてゐたことは疑ふまでもない。

中平六年四月靈帝は病に罹つた。次第に危篤に陥つた。宮中には早くも暗闘が持ち上つた。何皇后の子弁と王美人の子協との相續争ひである。といつても本人達は十四の兄と九の弟とで、頑是なく遊んでゐるが、その周圍がいきり立つたのである。兄の方は皇后を始め後の兄大將軍何進があり、弟の方は董太后や宦官の蹇碩などが附いてゐる。

四月十一日帝は臨終に際して蹇碩に協の將來を懇々と依託した。碩は乃ち協を以て直ちに位に即かせる爲には、先づ何進を殺してかゝらねばならぬと察し、俄にその參内を促した。何進はうかと參内しかけたが、途中で情を告ぐる者があつたので、そのまゝ引籠つて病と稱して出なかつた。宮中では何大后の頑強な主張が通つて、兄の弁を帝に弟の協を渤海王に封ずる事とし、更に協は陳留王に遷された。茲において太后と何進とはその實權を握ることになつた。南陽の屠者の息子と娘とは。斯くて天下の權を掌中に收めたのである。

協を守り立てようとした碩が殺されたのは言ふまでもない。靈帝の母の董太后は嫁姑

遺詔は反故  
さなる

の喧嘩に負けて故郷へ遷されることになり、その甥驍騎將軍董重は殺された。太后はために憤死した。

この時何太后方の用心棒に召し上せられたのが巨大漢董卓である。

三

董卓が未だ都へ到着する前に、禁中には大變亂が勃發した。

新たに朝廷の實權を握つた何進は、この際宦官一掃の策を考へた。然しその非常手段は何太后が氣乗りがしないので、進も些か逡巡してゐた。進に附いてゐた袁紹、袁術などは頻りに慫慂したが、どうも決斷が附かぬ。それでは諸方の將軍を都へ召集して、先づ太后を脅かさうといふ事になつて、飛檄は八方へ飛んだ。

張讓等の宦官どもも手を束ねて斯ういふ危機を傍觀する者ではない。逸早く形勢を見て取つて、奸策を回らし何進をおびき出し、易々と宮門内で首を刎ねた。機先を制せられた袁紹等は、それと知つて立どころに手兵を率ゐ宮城へ攻め入つた。兵力にかけては宦官輩は一堪りもないから、何太后も帝弁、陳留王も一纏めにさらつて宮城を逃げ出さ

宦官一掃の  
策を立つ



うとした。太后は辛うじて免れたが、帝と陳留王とは引抱へられて連れ出されてしまつた。

袁紹は禁中に亂入して、老若を問はず宦官は片端から叩き斬つた。中には鬚が無いために宦官と誤認されたものもあつたが、凡そ二千餘人を虐殺した。

張讓、殷珪等は亂軍の中を潜つて、帝と陳留王とを伴なひ、暗に紛れて逃げ出した。その途中で僅かのお供は散りくになり、最後に残つて二人を保護したのは尙書の盧植ろしよくと河南の閔貢びんこうの二人だけであつた。洛河のほとりへ辿りつくと、張讓に逢つたから盧植は彼を責めて斬らうとした。張は免れ難きを知つて河へ身を投げてしまつた。

閔貢に手を引かれて暗路を辿る十四歳の幼帝と九歳の陳留王とは、飛び交ふ螢をせめてもの光と頼み、いづこを指すともなく迷ひ歩いた末、再び禁中へ歸らうとしたが、早や二人とも疲れ果て、今は一足も運ばれなくなつた。已むを得ず民家から荷車を借りて帝と王とを載せ、とぼくと北邙山ほくほうざんの北まで来ると夜は白々と明け放れた。その日は二頭の馱馬を借り出したから、一頭には帝を乗せ、一頭には閔が王を抱いて乗つた。都に近づくに従ひ、ほつくと宮廷の官吏なども集つた。

大軍を率ゐた董卓は洛外の顯陽苑まで来ると、都の空には火光天に漲つてゐる。驚いて途を急がせ黎明に都の西口に着いた。

『天子は何處へ在らせられるのか』と訊ねると北門にと答へる者があつた。卓は諸公卿とこれを迎へ、北邙山下で行き逢つた。三千の軍兵を従へた董卓の武者振りは、懼え切つてる帝の膽を一縮みにさせた。

『恐い々々』と帝は泣き號ぶので、諸公卿も持て餘して、

『宣旨である、軍兵を少しく遠ざけられたい』と申入れた。卓は肯かずに、『國家の賊を平らげ、皇室の危きに馳せ向つた拙者に、兵を退けよとは何事でござる』と帝の前に進み出で、いろく事情をお尋ねしたが、一目見て震へ上つた幼帝に満足な返答が出来るわけがなく、少しも纏まつた話が出来ない。僅に九歳の陳留王の方が却つて要領を得た話をした。

卓は心の内に喜んだ。この王の方が餘程お賢い、自分と同族の董太后が愛撫して育てられた方だ、この王を帝位につけなければなるまい、と早くも廢立の考はその胸にあつた。一同はその日再び禁中へ歸つた。この騒ぎで秦の始皇以來傳はつたといふ傳國でんこくの玉



宦官に代り  
て董卓の暴  
虐極る

痛ましき恐怖の一生

八二

璽も行方不明になつて了つた。

卓は果して帝弁を廢して弘農王とし、陳留王協を位に即かした。即ち獻帝である。それに反對を唱へた何太后は早速弑して、卓は自ら相國となり、幼帝を擁して大に暴威を揮ふに至つた。今まで大勢の宦官が專横を極めてゐたのを一掃した代りに、一人の董卓の暴虐を迎へた形になつた。

宮中はこれで一應は片附いたやうなものゝ、一度この非常手段の成功を見た各地の武將連は、おめくくと引籠つてゐられなくなつた。袁紹、袁術を始め十餘の猛者は關東諸州に蜂起して、袁紹を盟主とし、曹操を奮武將軍とし、一齊に董卓討伐の師を興したのである。卓はこれを見て我が廢立の罪を問ふのだと思ひ、廢帝弘農王を先づ毒殺した。

弘農王の年齢は資治通鑑、漢紀等には薨去を十五歳とし後漢書には十八歳と  
てある

王の毒殺も亦一の悲劇であつた。

董卓は人をして王に耽毒を勧めさせた。

『この藥を召上れば厄病をお免れになります』と言はせた。王は疑つて、

弘農王毒殺  
の悲劇

『予は病氣ではない。それに藥を進めるのは予を殺さんための毒藥であらう』と飲むことを肯かなかつた。然し飲まさず置く筈がなく、強てこれを勧めた、王は遂に毒を知りつゝ服用する決心をした。

王は先づ妃の唐姬や近侍の者等と宴を催ほした。一旦は帝位にも上つたこの少年王は、何の罪もなく運命に弄ばれて、今や恐ろしい毒藥を服すべく、その近親と別離の宴を催ほさねばならぬ切迫つまつた悲境に陥つた。王は悲憤の聲を震はして一首の歌を詠つた。

天道易兮我何艱、

棄萬乘兮退守蕃、

逆臣見迫兮命不延、

逝將去汝兮適幽玄、

唐姬に起つて舞へとの王の所望があつた。姫も亦涙ながら舞ひつゝ詠つた。

皇天崩兮后土頽、

身爲帝兮命天摧、

生死路異兮從此乖、

奈我煢獨兮心中哀、

座にある者は皆泣いた。王は妃に向ひ、

『そなたは一旦王者の妃と立つたのだから、濫りに吏民の妻などにならず自愛したが宜し、さらばこれでお訣れだ』と毒を仰いで忽ち薨じた。

痛ましき恐怖の一生

八三



妃遂に自矜  
を保持す

痛ましき恐怖の一生

八四

妃は潁川の人で、王に別れて郷里へ歸つたが、父の會稽の太守瑯は再縁を勧めたが肯かず、遂に帝王の妻たる自矜を捨てず、我が名を名宣る事をしなかつた。(帝王は自ら) 妃が節を持って渝らないことは、その後獻帝の耳にも聞えたので、迎へて宮廷の園中に居を興へ、弘農王妃としての待遇を繼續することにした。

四

さて傲岸な董卓が一朝にして廟堂の權を握りはしたが、天下の形勢は次第に險惡となるばかりであつた。北には袁紹、公孫讃、東には曹操、南には袁術、孫堅等が虎視眈々と洛陽を睥睨してゐて、何時猛然と襲ひかゝるか解らない状態であつた。董卓は天子を擁してゐることが、自分の非常な強味であることを熟知してゐた。無力な幼帝ではあるが、この天子を他に奪ひ去られては、名分を亡ぶものであるから、群雄どもが動もすると天子を奪はうと企つるらしいのが氣になつた。それには洛陽の帝都を西の方長安に遷して置くのが安全であると考へられた。

卓は突然遷都を斷行した。先づ天子を遷し洛陽の市民にも長安移住を強制し、從來法

遷都は天子  
を奪はれぬ  
用心

外に贅澤を極めてゐた官官どもの邸宅財産は勿論、凡そ財を蓄ふる者は片端から沒收した。その命に應じないものは容赦なく殺戮した。宮殿といはず官廳といはず、悉く焦土と化せしめて、再び洛陽には都しがたくして了つた。二百里の間雞犬の聲を聞かずといふ程に寂れた土地に激變させた。特に卓が後世にまで憎惡さるゝに至つたのは、支那人が大事にする墳墓を荒したゝめである。彼は何の憚るところもなく、歴代帝王の諸陵を始め公卿の墓を發いて金銀珍寶を横領したのである。

卓は洛陽を荒し盡して、徐ろに長安に乗り込んだ。そして手盛りで太師となり、位を諸王侯の上に昇せ、車駕は天子と同様とした。天子といふものは全くの裝飾品に過ぎないことゝなつた。尊重する必要もなければ厚遇する必要もない。殆ど前世紀の遺物の觀があつたとも言ひ得るであらう。

光武帝以來桓帝の代までは、門閥か功勞かに依らなければ、單に腕づくでは一州の刺史にも容易に任ぜられなかつたのが、今では腕づくで天子を小脇に抱ゆれば、忽ち天下に令することが出来ることになつた。これは董卓の場合に限らない、袁紹や袁術や曹操や孫堅や、その他の諸豪も目當とするところは其處にある。董卓一人に勝手なまねをさ

腕づくの世  
界なる

痛ましき恐怖の一生

八五



せては置かれぬといふのが諸豪の胸中である。天子獻帝は戦局の上にも政局の上にも何の權威も價值もなく、いはゞ劉氏といふ貧しい一小家庭の少年主人が、權勢家の庇護を受けてゐるに過ぎない状態であつた。

斯く見縊られながらも天子の稱號を捨てなかつたから、貧しい宮殿の寂しい番人として押込められ、政局の動搖毎に迷惑千萬な飛沫を被り、酷たらしい虐待をも受けなければならなかつたのである。位に即いてから位を剝がれるまでの三十年は、何の罪も無いが唯單に天子と稱するが爲に課せられた苦役であつたとも言はれるであらう。

帝都を長安に遷した董卓は、洛陽に己の居を構へて威張つてゐた。然し孫堅は忽ち彼を攻破つて洛陽を奪ひ取つた。卓は陋くも敗亡して長安へ逃げた。孫堅は舊の禁中の井戸の中から測らずも傳國の玉璽を拾ひ上げた。これは後に次男孫權が吳帝と稱するに至つた前兆であつたと言はれてゐる。

長安へ逃げた董卓は、さしもの暴威も敗けて逃げ込んだのだから幅が利かなかつた。司徒王充等の計略にかゝり、部下の呂布のためにあへなく殺された。その捨てられた屍を見て、恨重なる長安の市民は、卓が便々たる腹の臍に油を注いで燈を灯した。

然し董卓一人が殺されたといふので、そのまゝ鎮靜することは出来なかつた。部下だつた李傕、郭汜などが卓の爲に讐を報すると騒ぎ立てた。そして李と郭とは議合はず互に争ふ仲となつた。それは要するに天子を奪ひ合ふ喧嘩であつた。天子といつても少年だから奪ひ取る爲め拐かすのは容易の事であつた。鎮東將軍張濟は、一時天子を弘農へ遷して彼等が奪ひ合ひを止めさせようと、輿車に乗せて引出した。

其處へ李傕の部下たる羌胡(西)の蠻卒どもが紛れ込んで、車の御簾の中を覗きながら「やアこれが天子ちうもんけエ、この小ほけな小僧つ子が……」と罵り騒ぐといふ亂暴さ。辛つと追拂つて門を出ると、今度は郭汜の部下が戟を立て、遮り留めた。帝は簾をかゝげてこれを叱つた。

その夜は霸陵といふ處へ着いたが、食物に乏しく、従者一同絶食の憂き目を見た。郭汜は其處で方針を變へて、高陵へ遷幸を仰がうと言ひ出した。諸公卿や張濟はやはり始の豫定通り弘農へと主張した。帝も亦弘農は祖廟にも近いからと言つて見たが、郭は飽くまで承知しない。車は左へも右へも行かず、その一日は帝にも一食をも供しなかつた。已むを得ず一時新豊に車を駐めた。



一安心と思ふ間もない

其處でも郭は帝を拐かし去らうと企てた。然しそれは失敗して、郭自身が手兵を残して逃亡した。ところが豫て牒し合せてゐたらしく、一月餘り経つと郭に置き去りにされた部下が、營中に火を放つて帝を盗み出さうとした。侍中劉芥が密かに帝を避難させるところへ、帝を育てた董太后の甥に當る董承や楊定などが、兵を率ゐてお迎に來合せたので、危いところを助かつて華陰の殷熾の營中へ遷した。これで一安心かと思ふとさうでなく、お供した楊定と殷熾とが不和であつたため、楊は腹心の者を使つて、『この營中には郭汜が來てゐる』と流言を放たせた。果して帝はこれに怖れて營中を脱出して、道南の路傍に野宿するに至つた。董承等が苦心の末、その冬弘農へ遷ることにしたところが、今度は張濟、李傕、郭汜等が聯合して天子奪還を企て、弘農の東方で、帝輿を中にして大戦争をした、お供の公卿たちは殘少なに殺されたし、御物典籍の類殆ど散佚し盡した。帝は曹陽の谷間に野宿して難を免れ、李樂、韓暹等の援を得て、一度は李傕等の軍を撃破することが出來たが、再び彼等は追撃して來た。李樂は帝を輿に乗せたのでは到底逃げられぬと見たから、馬を牽き出して、『事急でござりまする、これにお召しを』と促がした。帝は、

天子久しく兵馬の間に逃げ惑ふ

『百官を見捨て、何處へ行かれようぞ』と涙を流したが、四十里が間の亂軍中を辛くも陝まで落ち延び、人家の戸板などを集めて假の御座所を造り、百人足らずの人々が左右に侍し不寢の番で護つてゐた。それも忽ちに李郭等の兵に襲はれた。人々色を失ひ、今は早や天子の御運もこれまでだと、さらぬだに僅少のお供の人数の中にも、思ひ々々に落ち行くものが出た。一天萬乗の天子は此處に憫れにも天涯の孤客たらんとする状態になつた。

斯うなつては舟を浮べて孟河へ逃る外は無いと、夜陰に乗じて忍び出た。帝も皇后も徒歩である。黒白も分かね夜の野道を、皇后の身の走らるべくもないので後の兄の伏徳が皇后を抱えては走るのであつた。さういふ始末だから最早や荷物などの騒ぎでなく、伏徳が取り出した十匹の絹が全財産といふ姿であつた。逃げながらも一行の中に怪しい者が紛れ込みさうなので、怪しいものは斬り殺した。皇后の御袖もその血汐に赤く染つた。

帝も皇后も徒歩の夜道

河の岸まで辿りつくと、そこは十餘丈の斷崖であつた。追尾して來た賊軍は既に足音が聞えるまでに後に迫つた。寸時も猶豫されないので擔いで來た絹で帝の胴中を括り、



崖から下へ吊りおろした。辛うじて帝と皇后とは小舟に乗せた。匍ひ下るもの、飛降るものなどあつて、衣類や冠り物など形もない姿になつてしまつた。

舟に取付く  
手は切り落  
さる

僅か二三艘の扁舟に、我も我もと飛びつくので、制止せんにも手段なく、李樂は飛び付く者の手を片端から叩き斬つた。船の中へ落ちた指が掬ひ上げる程であつた。危く船に救はれたのは、帝と后との外楊彪、董承等數十人で、そこまで従つて來た官女をはじめ取り残された人々は、何れも河岸で追手の兵に殺された。既に舟を押し出したと見た賊兵は崖の上から雨霰と矢を射かけた。董承は己の衣服を脱いで舷に張り、その蔭に帝と后とは身を窄めて矢を避けた。

斯くて辛くも河東の大陽へ到着し、李樂が營中へ一時落着くことゝなつた。そこへ河内の太守張楊が米を献上し、安邑へ遷つてから太守王邑が綿や反物などを献上したので、帝の一行は纔かに嚴冬を凌ぐを得た。

淺ましい假  
の朝廷

方々と逃げ惑ひ歩いた帝は、今は虎口を脱れて少しく落着くことが出來たので、假に朝廷の政廳を開く事にした。さうすると今まで度々の危難を助け奉つた人々は、我もくゝと恩賞の拜職を申出た。朝廷といつても何一つ調度が備はつてゐるでもなく、官印

さへ無いといふ淺ましい體であつた。

その間に董承は洛陽へ行つて還幸の準備をした。建安元年の夏、帝はやつと久しぶりの舊都洛陽に還るを得た。然し洛陽は董卓が焼き拂つた後だから、宮室も政廳もない。當分は焼け残つた故の宦官趙忠が屋敷跡に輦を駐むる事とし、秋になつて南宮の陽安殿へ遷ることが出來た。

公卿百官は廂の下や墻の間などに雨露を凌ぐといふ状態であるのに、各地の群雄は租税や賦課を都へ素直に送らう筈がないから、餓死する者が續出した。其處へ乗り込んだのは怪傑曹操字は孟德であつた。

五

曹操は洛陽の衰微極度に達し、宮中の缺乏甚しきを幸として、皇居を我が根據地の許へ遷してしまつた。さうして帝は曹が營中に置かれたのであつた。

帝は此處に或意味での安住の地を見出した。群小の徒に誘拐されたり、夜道を徒歩で逃げ惑つたりする心配は無くなつた。然し一面からいへば、囚人を苦役から監房へ移し

政局に没交  
渉の天子



たやうなものであつた。董卓に遭つて既に有名無實の天子とされた帝は、曹操に逢つてその權威を絶滅し、政局とは完全に没交渉の位置に据ゑられた。

袁術が帝と稱しようと、呂布が殺されようと、劉備が徐州に起たうと、公孫讃や袁紹が死なうと、赤壁に大戦があらうと、さういふ事の唯一つでも帝には影響が無くなつた。折々曹操に露骨に厄介物扱されるのに、深い哀愁を感じる位で、積極的にも消極的にも手も足も出せない曹氏の食客に過ぎなくなつた。

さうした無意義な年を十七八年も送り迎へた。その間に天下の形勢は、互に和する事も出来なければ亡ぼすことも出来ない鼎足の形をした三國時代となつてゐたのである。さうして大漢根絶といふ悲劇の大團圓は次第に近づいてゐたのである。無益な小策を弄して徒らに壽命を刻み縮めるやうな事件も折には起つてゐた。

建安四年の暮に車騎將軍董承は、曹操の專横に業を煮やし、密かに劉備等と策應して討曹の軍を起さうと計つたが、事前に露はれて承は殺された。その娘で帝に侍してゐた董貴人は妊娠中であつたので、帝は切に命乞をしたけれども、殘忍な曹操はそれをも殺して憚らなかつた。この虐殺は伏皇后を震ひ懼えさせた。后はその父伏完に書を送つて

壽命を縮める小策

殘酷な古疵の祟り

董貴人の横死も明日は我身の上となるかも知れないからと、曹操を除く方策を相談した。完は武士と謀つて曹操を刺させようとしたが果さなつた。これは操が心膽を寒からしむるものであつたが、その主謀者は幸にも知れないでうやむやの裡に事済となつた。

それから遙かに年を闊した建安十九年に至つて、この古い事件の真相が操の耳に入つた。怪しからぬ皇后の仕打だと操は激怒して、御史大夫の郗慮まろと尙書令華歆くわきんとに兵士を附けて帝居へ遣はし、皇后の引渡しを申入させた。郗が帝にその事を談判してゐる間に、早くも華はつか／＼と皇后の居室へ押入つた。華は扉を叩き破つて皇后を引摺り出した。髪は亂れ跣足のまゝで曳かれ行きながら、后は帝を仰いで、

『最早生きてお目にかゝられませんか』とお訣れを述べると、帝も聲を震はして、『朕が命も何時までの事か判らない』と涙を溢した。

皇后が殺されたは勿論、その腹に出来た二人の皇子も毒殺された。

この騒から間もなく操は我が娘を帝の皇后に冊立した。それから操は自ら魏王となり、その儀容は次第に天子の例に近づいて來た。然るに操は二十五年に急病で亡くなつた。子の曹丕さうひが丞相魏王を相續した。而してその年の内に帝は曹丕に迫られて位を譲り渡さ



悲慘なる死  
後の餘榮

痛ましき恐怖の一生

九四

ねばならなくなつた。今まで有名無實ながらも漢の天子であつたのが、魏の山陽公劉協として不面目極る餘生を尙ほ十四年も悲しく送らねばならなかつた。山陽公は魏の青龍二年五十四歳で卒した。その葬儀だけは漢の制により天子の禮を以て營まれた。

蜀の後主劉禪が、おめ／＼と晋の安樂公として八九年の餘生を食つたのは、醜い意味で帝に後ありと謂つべしである。

### 命惜しさの蜀の劉禪

一

孔明卒して  
衰亡の秋は  
來る

蜀の昭烈皇帝は關羽の仇を報じようとして吳を伐つたが、敵將陸遜のために四十餘營を破られ、一敗地に塗れて白帝城に遁れ、憂悶悲憤のうちに崩じた。太子禪が十七歳にして位を嗣いだ。所謂蜀の後主即ち之である。その後丞相諸葛亮は先帝の遺詔を守り、後主劉禪を輔佐し、先づ鄧芝を吳に遣はして之と結び、又南蠻を征し、孟獲を七度まで擒にしては放ちやつて之を服し、更に志を中原に抱き、六たび祁山に出で、魏と戦つたが一旦病に犯されて、建興十二年の秋、空しく五丈原頭の露と消えた。こゝに蜀の國には早くもうら寂しい衰亡の影が見えそめたのである。

蜀の丞相であり、又軍師であつた諸葛亮字は孔明は、機略縦横の大才で、實際國家を一人で背負つて立つてゐたのであつた。ところが一旦亮が死んでしまつてからは、蜀の國には人才が寥々として曉の星も音ならざるものであつた。嘗て劉備が桃園で兄弟の約

命惜しさの蜀の劉禪

九五



を結んだ關羽は、建安二十四年に呉のために殺され、次いで張飛は部下の范疆、張達のために刺され、又龐統は流箭に中つて死し、その他黃忠、馬超、趙雲の徒も或は死し、或は老いて、前朝以來の重臣は概ね朝を去つてしまつた。そして亮の後に大司馬となつて政を執つたものは蔣琬であつたが、彼はたゞ實直な、温厚な長者といふだけで、外敵を撃破して蜀の國威を輝かすといふやうな偉大な人物ではなかつた。或る時楊敏といふものが、蔣琬を諂つて、

『蔣琬は何をやらせても、とても故の諸葛亮の片腕にも及ばない』と云つた。

或る人が之を聞えて、蔣琬に向つて敏を罰するやうにと勧めた。そのとき琬は、『實際俺は凡の點に於て丞相諸葛亮に及ばないのだ。敏の云つたことは決して詐でないから、之を罰するわけにはゆかない』と云つて、敢て敏を罪しなかつた。

これを以て見ても、琬は到底亮に及ばないことを自認してゐたのであつた。その後琬が死んでから、費禕と董允とが政を執つた。この二人も亦公正な人物で、克く忠誠を勵んだが、併し蜀を背負つて立つやうな大人物ではなかつた。そのうちで比較的用兵のことに精しく、攻略に長じてゐて、稍々諸葛亮の衣鉢を傳へたのは獨り姜維のみであつ

琬自ら亮に及ばざるを熟知す

ひさり姜維あるあり

魏を討つて疲る蜀

た。彼は亮の後を繼いで兵馬の大權を握り、九たび中原に出で、魏を伐つたが、之に依つて得る所は極めて少なかつた。元來姜維は忠義の深い人で、夙に亮の遺志を嗣いで中原を定めんとする志があつたために、日夜攻戰に従事したのであつたが、之が蜀のためには却つて害となつたのであつた。それは度々の戰爭のために多くの精兵を失ひ、又民を疲弊せしめたばかりでなく、却つて魏を激發して蜀の滅亡を早めたからである。それで朝臣の中にも、姜維が屢々兵を起すことを憂へてゐたものが少くなかつた。例へば征西將軍の張翼の如きは、姜維が抱牢より魏に攻め入らうと準備してゐた時に、『蜀は西僻に位し、土地が瘦せ、民が貧しいために、金銀兵糧に乏しいのです。それにも拘らず、近來たび／＼兵を起して遠く魏の國まで侵攻するので、國用は乏しくなり、人民はますます／＼疲勞して行くばかりです。之れではとても溜りませんから、當分要害を堅く守つて、軍民を養ふことが必要かと思ひます』と熱心に諫めたが、姜維は之に従はなかつた。そして彼は屢々魏に兵を出したので、魏の司馬昭は蜀軍を根底から覆滅せんがために、鄧艾を征西將軍に任じ、又鍾會を鎮西將軍に任じて大舉して蜀を伐たんとしたのである。



蜀の國には今やかうした危急がひし／＼と迫りつゝあつたにも拘らず、後主劉禪は日夜酒色に沈湎して、毫も政務を顧みなかつた。殊に黄皓といふものが用ひられるやうになつてからは、彼は歡心を買ふために多くの美女を献じたので、後主はますます放埒な生活を送るやうになつた。當時劉琰といふ者の妻の胡氏は非常な美人であつたが、一日胡氏が宮中に行つて皇后に謁すると、皇后は之を一ヶ月餘も宮中に留めておいて、その儘家に歸さなかつた。すると琰は胡氏が後主と通じたものと考へて、手下の兵士五百人を庭前に召し出し、胡氏を縛つて、その顔を履のまゝで踏み躪らせた。後主禪はこの事を聞くと、

『履を以て人の顔を踏むなどは不都合極まることだ』と云つて、琰を執へて、五百人の士卒と共に斬罪に處してしまつた。

劉禪は父の昭烈皇帝と違ひ、暗愚であつて、人を見るの明がなかつたので、國家の忠臣は悉く之を斥けて、獨り佞人黄皓を寵愛し、遂に彼を重用して諸政を委するやうになつた。このとき閻宇といふものがあつたが、少しも勳功がなかつたけども、黄皓に取入つたばかりで右將軍となつて、ひどく幅を利かしてゐた。黄皓は豫てからこの閻宇を重

用して己れの勢力を張らうと考へてゐたが、丁度そのとき姜維が洮陽で敗れたといふことを聞いて、閻宇を以て姜維に代らしめたいと奏上した。で後主は直ちに之を許し、祁山の姜維の陣中に、一日に三回も使者をやつて、兵を引いて歸れと命令した。依つて姜維も已むを得ず成都に歸つてきたが、宮中には多くの佞臣が跋扈してゐるのを慨歎して暫く引退して兵を養ふことゝなつた。

二

魏は愈々討蜀の大軍を起し、鄧艾をして關外、隴上の兵十萬を率ゐて沓中を攻めしめ、姜維がその防戦に没頭してゐる間に、更に鍾會をして關中の兵三十萬を率ゐて、斜谷、駱谷、子午谷の地を過ぎて、漢中の虚を衝かしむることゝした。然るに姜維は鍾會の一軍が漢中に向つたと云ふことを聞いて、急を救はんがために、沓中より漢中に進み劍門關の天險に據つて鍾會を防いだ。かくて姜維が會と戦つてゐるうちに、鄧艾は兵を率ゐて陰平郡に至り、非常な困難を犯して無人の地を七百里も進み、遂に江油府に出て蜀の將軍諸葛瞻を殺し、遂に大軍を以て成都に迫つた。



帝に逃亡を  
勤む

蜀では魏の兵が間道から出て、突如として成都に迫つたので、一同は上を下へと狼狽したが、後主は之を聞いて大いに驚き、急に諸大臣を招いて會議を開いた。けれどもその席上では誰一人として、奮然として國難に當らうと主張するものがなく、中には『蜀と吳とは同盟國の間柄だから、陛下には一旦吳へ身を寄せられ、徐ろに回復のことを圖られるのがよろしいかと思ひます』と云ふものがあるかと思へば、  
『いくら同盟國といつても、他國へお落ちになるのは面白くないから、いつそ南中へお退きになつて、時機をお待ちになるのがよろしいかと考へます。南蠻は嘗て丞相諸葛亮が征伐した以來、深く心服してをりますから、陛下がお越しになつても、まさか疎略なことは致すまいかと思ひます』と云ふものもあつて、議論が紛然として決定しなかつた。

このとき光祿太夫の譙周といふものが進んで、

『昔から他國へ亡命して天子の位を保つたものは一人もありません。それで陛下が吳へ行かれても、天子と稱してゐるわけには行かず、必ず臣と稱せねばなりません。それに魏の國は今勢力が非常に強いから、我が國を併呑したなら、やがて矛を轉じて吳を伐

無恥なる安  
全策

名を捨て、  
實を取れ、

ち、之をその版圖にするに相違ありません。そのときには陛下は再び魏に對して臣と稱せられねばなりません。若しかうして二度の恥辱を受けるくらゐならば、寧ろ始めから魏に降つて、一度の恥辱ですむやうにするのがよいと思ひます。次に南中へ蒙塵されるならば、敵國へ降伏する恥辱は免れますが、併しこの場合には御身の危険といふことを考へねばなりません。なる程昔諸葛亮が征伐したときには、南蠻はよく心服してをりましたが、今敵國から破られて、亡命者のやうな姿で落ちのびて行つたなら、恐らく陛下を快く迎へることはあるまいと存じます。それでこの際陛下には寧ろ位を遜つて魏の國に降り、元々通りにこの蜀に封ぜられるやうに取計らはれるのが、唯一萬全の策かと考へます』と云つて、一座を見廻はしながら、更に

『若し私の策が御採用になれば、私が自ら魏の都へ行つて、萬事宜しいやうに取計らひませう』と結んだ。  
要するに譙の説は體面論などは全然度外視して、たゞ身の安全を計る一方の手段であつた。群臣はいづれも無難を望むの餘りこの説に賛成したが、後主は南中落ちに未練があつて、まだ何れとも決定しなかつた。けれども譙周の説は遂に帝の心を動かして、廟



議は降参といふことに一決した。このとき皇子の北地王じん諶は、朝臣等の餘りに言ひ甲斐なき態度を怒つて、

『私どもは今敵を迎へて潔く一戦し、若し勢窮り、力屈して如何ともすることが出来なくなつたならば、君臣父子が一所になつて城を枕にし、社稷のために死んでこそ、地下に於て先君に見ゆることが出来るのであります。それにも拘らず今敵と一戦をも交へずに、只おめくくと魏の軍門に降参しようとは何事でありませうぞ』と云つたけれども、帝は之を聽かなかつたので、諶は社稷の滅亡を見るに忍びず、遂に憂憤の極、昭烈皇帝の廟に詣で、慟哭の聲をあげ、先づ夫人趙氏及び子女を殺し、次いで己れも自刃したのであつた。

皇子の憤死も刺激なし

怯懦の極を見る後主

今や朝廷には一人の主戦論者もなくなつたので、帝は太僕蔣翊じやうけんを劔門關にやつて、姜維に降参のことを命じ、又侍中張紹ちやうせうを成都を距る八十里の地に滞陣してゐた魏將鄧艾の許に遣はして降表と璽綬とを捧げしめ、次いで後主は自ら縛して葬式の輿に乗り、太子緒王六十人を伴ひ、北門の外十里餘の所に出で、降人となつた。かくて蜀漢の民戸二十八萬人口九十四萬、軍隊十萬二千官吏四萬人は魏の有に歸することゝなつた。是に於て

蜀は昭烈以來僅に二代にして滅亡した。時に蜀の炎興元年冬十月のことであつた。

三

後主劉禪はその後暫く成都に留まつてゐたが、翌年の三月に魏都洛陽へ移されることゝなつた。嘗ては一天萬乗の君として尊榮を一身に聚めた劉禪も、降人として一路遙に洛陽へ出發したときには、その恩寵に浴した大臣卿相等は悉く離散し去つて、たゞ従ふものとは秘書令の郤正せきせいと殿中督の張通の二人だけであつた。彼等は共に妻子を捨て、禪に従ひ、住み馴れし故郷を離れて雲山縹渺たる敵國へと入つたのであつた。その孤忠は悲しむべくも亦いぢらしいものであつた。殊に郤正は少しも昔と渝らずに、眞心を以て禪に仕へたので、禪は

『あゝ郤正がこれほどまでに忠義なものとは、今まで少しも思はなかつた』といつて歎賞したと云ふことである。

人榮ゆれば即ち集り、人衰ふれば即ち去る、兎角人の心の測りがたき世の中に、郤正と共に最後まで後主に對して忠義を盡したものに、建寧の太守霍弋くわくよくがあつた。彼は魏の

傷心の春の旅路



邊將亡國の報に泣く

大軍が蜀の境に迫つたと聞くと、直ちに上書して、成都に上つて防禦軍に加はりたいと願ひ出た。けれども後主は、既に防禦の準備が整ふたからと云つて、弋の來授を止め、彼をして南中の軍を督せしめた。然るにいくばくもなく成都陥落の報が傳つたので、霍弋は轉た悲憤の情に堪へず、即ち素服を着、葬式の禮を執り、三日の間亡國を哭き身を慎み守つた。時に部下の諸將は皆速かに魏に投降せんことを勧めたが、弋は

主君の先途を見届けて

「茲は帝都より離れた僻陬の土地だから、成都陥落の噂も果して事實であるかどうか判らない。それに氣づかほしいのは主上の安否であるが、之れとてもまだ一向判然しない。で、これ等の事情が判明するまでは、軍に將たるものはその去就を苟くもすべきでない。若し魏が主上に對して相當の禮を以て待遇することが判明したならば、そのとき出て降つても決して遅くはない。若し又萬一主上に危害を加へるやうなことがあるならばそのときこそは死を以て魏に敵對するばかりである」と云つて、飽くまでも後主の先途を見届けやうとした。然るにその後、劉禪は遂に遠く洛陽へ移されることゝなつたので、今や霍弋には依るべき君主がなくなつた。で、弋は悵然として上書して、

「臣が聞く所によれば、人間は三つの恩を受けてゐるといふことであります。即ち彼等

は父と母とのお蔭によつてこの世に生れ、又君のお蔭によつて安全に生活を營むことが出来るのであります。で、この三つには誠を以て仕へ、よく忠孝を勵まなければなりません。然るに臣の國は敗れ、主君は他に降伏せられたので、臣には今や據るべき所がなくなつたのでございます。で、臣は己むを得ず魏に降る次第でございます」と云つて、その苦衷を披瀝した。

魏の丞相の晉王司馬昭はこの上書を見ると大いに感心して、弋を改めて南中都督に拜し、従前の任地を治めしめたといふことである。

後主劉禪は洛陽へ着てから安樂公に封ぜられ、一門と共に臣として魏に仕へることゝなつた。一日晉王司馬昭は安樂公を招いて酒宴を催したが、皮肉にもその席上で、蜀の音樂を奏し、蜀の舞踊を演ぜしめた。すると安樂公に陪從して宴に列つた蜀の舊臣どもは、いづれも潜然として望郷の涙に掻きくれたが、獨り安樂公のみは如何にも愉快さうに、他愛なく笑ひ興するのであつた。司馬昭は密かに側にゐた賈充を顧みて、

「かう云ふ暗愚な人を君主に戴いてゐては、諸葛亮のやうな偉い人物が輔佐した所が、恐らく長く國家を保つことはできません。況して姜維くらゐのものが助けたのでは、國家

恥を知らざれば恥ぢず



が滅亡するのは當然なことだ』と嘯いた。司馬昭は更に安樂公に向つて、

『今こゝで蜀の音楽や舞踊などを見られたなら、故郷に居られた當時のことを追懐されませぬか』と問うた。すると安樂公はけろりとして、

『いや、この都が面白いので、とんと蜀のことは考へませぬ』と答へた。郤正は之を聞くと、座に堪へられぬやうに感じたが、後に安樂公に向つて、

『晋王があゝした間をなされたときには、涙を浮べて、先帝始め故人の墳墓は皆遠く岷蜀の地にありますので、日夜念々として追懐の情に堪へませぬとお答へになる方が宜しうございます』と注意した。

その後司馬昭は再び同様の問を發したときに、安樂公は豫て郤正に教へられた通りに答へると、昭は意地わるさうな目に微笑を湛へて、

『それは郤正が言葉によく似てゐますね』と云つた。安樂公は全く圖星を指されてひどく狼狽しながら、

『誠に御意の通りで……』と云つて、頭を下げたので、左右のものは失笑を禁じ得なかつた。安樂公はその後八年にして晋の太始七年洛陽で死んだ。年六十五であつた。

無神經の極  
度か

忽ち剝げる  
附け焼刃

### 曹氏から司馬氏へ

—

建安二十五年十月、魏の曹操の子曹丕は後漢の獻帝に迫つてその禪讓を受け、遂に自ら稱して帝と號した。これ魏の始祖文帝である。文帝在位七年にして死し、次いで明帝が位に即いた。この時蜀の諸葛亮は屢々精兵を提げて祁山に來侵し、吳も亦時に江を渡つて入寇したが、魏軍よく之を拒いで、國祚爲に毫も動かなかつたのみならず、更に兵を出して遼東を討平したので、魏の盛世は明帝の時にありと云はれてゐる。然るに三世芳に至つて朝威大いに衰へ、遂に元帝の時に至つて司馬炎のために帝位を篡奪せられ、かくて魏は五世、四十六年にして滅亡したのである。

司馬氏が初めて魏に仕へたのは司馬懿のときであつた。懿は河内温縣の人で、その祖先の司馬功といふものは嘗て趙の大將であつた。懿は初め曹操に見出され、文學椽となり、次いで太子中庶子に累進した。彼は嘗て蜀の諸葛亮に屢々戦を挑まれたが、堅く守

短かゝりし  
魏の盛時

曹氏から司馬氏へ



女衣裳を贈つて辱しむ

曹氏から司馬氏へ

一〇八

つて出でなかつた爲、婦女の服を贈りつけられて侮辱を受けたことがあつたが、併し彼は元より一介の武弁でなく、胸に韜略を藏め、經綸の才を有し、しかも、野心滿々たる人物であつた。曹操は由來雋敏にして人を見るの明があつたが、懿が厚望を有し、將來油斷のならぬ男であることを早くも看破し、且つその容貌に險惡の相を具へてゐるのを忌み、一日その子丕に向つて、

「懿は臣下として神妙に君に仕へてゐるやうな人物ではない。若し彼をこのまゝ使つてゐたなら、將來必ず家に仇をするであらう。で、今のうちに彼を退けるがよい」と注意したが、丕は懿を痛く信用してゐたので、極力彼を辯護して、漸く事なきを得た。

曹操が死んで文帝の時代となると、司馬懿は頻りに拔擢された。そして魏の將曹眞が蜀の諸葛亮のために敗らるゝに及んで、懿が之に代つて兵馬の權を握り、屢々蜀軍を拒いで、遂に亮をして志を中原に得ざらしめた。次で亮が死んで蜀の患が稍々息むやうになると更に兵を率ゐて遼東を征し、公孫淵を襄平に斬つて遂に北方の患を除いた。是に於て懿の武功は天下を蔽ひ、その勢力は牢乎として抜くべからざるやうになつた。

景初三年に明帝は治世十四年にして死んだが、臨終の際大將軍司馬懿を長安から召し

能く孔明を防ぎ得たり

魏既に司馬氏の天下

父に劣らぬ司馬師

曹氏から司馬氏へ

一〇九

て、後事を托し、又曹爽を大將軍とした。かくて明帝の子の芳が八歳にして位に即くや、曹爽が輔政となり、司馬懿は侍中郎に任じて内外の軍權を執り、尙書の職をも兼ね行つた。かうして曹爽と司馬懿とは明帝の遺詔に依り、芳を輔けて政を行つたが、豫て大望を抱ける懿は、如何にもして爽を倒して己れ一人政權を恣にしたいと考へ、遂に嘉平元年に至り、爽を襲つて之を殺し、彼に代つて丞相となつた。依つて魏に於ては今や勢力彼に匹儔するものなく、その上帝はまだ頑是な少年であつたから、彼は自分の思ひのまゝに國政を左右することが出来た。その後嘉平三年六月に至り、懿は俄かに病んで歿した。年七十三であつた。蓋し司馬氏の專横は實に懿の時から始まつたのである。司馬懿が死んでから、長子の師がその後を嗣いで撫軍大將軍となり、尙書の事を掌つた。師は深謀があつて沈着であつた。嘗て父の懿が曹爽を殺さうとしたとき、誰にも之を圖らずに、たゞ師にだけ相談した。そして爽を殺す前の晩になつて初めて師の弟の昭にも事實を告げたのであつた。昭はそれを聞くとそはくして頗る落着かない様子であつたが、之に反して師はいつもの通りぐつすと熟睡してゐた。そして翌日になると師は兵を司馬門に集めたが、軍兵を指揮する手際がいかにも鮮かだつたので、懿は深くそ



れに感心したと云ふことである。

其の後魏帝芳はだん／＼成長するに従ひ、次第に司馬師の専横を憤るやうになり、屢々李豊などを召して師の大將軍の職を奪ひ、その勢力を壓抑しようとして圖つた。然るに師は帝の陰謀を知つて先づ李豊を殺し、次いで魏主芳を廢して、明帝の甥に當る高貴卿公髦を位に即けた。かくて司馬師は今や公然と廢立を行ひ、自ら相國となつて益々専横を働いたので、揚州の都督母丘儉は刺史の文欽と共に兵を擧げて之を討たんとしたが、遂に師のために破られて無慘の最後をとげた。

然るに正元二年に至つて、師は眼球の飛び出す奇病に罹つて死亡したので、弟の昭が後を繼いで大將軍となり、尙書の事を掌つた。その後彼は大都督となり、僭越にも天子の用ふる黄鉞を勝手に使用して、賞罰を恣にした。けれども彼は尙之に満足せず、更に魏主髦を廢して益々専恣を行はんと欲し、先づ甘露二年に彼の腹心の賈充をして、曹髦廢立のことを提議せしむるに至つた。かくて賈充は一日、曹操以來の宿將諸葛誕に向つて、曹髦の禪位に對する意見を聞くと、誕は卒直に、

『若し帝を廢するやうなことがあれば、俺は死を以て之に反對する』と云つたので、賈

漸く露骨に  
なる非望

充は昭に勧めて、先づ誕を懷柔するために司空の役に彼を拔擢させた。すると誕は司馬昭等の奸策を看破して、その任を受けず、却つて壽春城に據り、吳の後援を得て昭を伐たんとしたが、昭の二十萬の大軍に壓せられ、翌甘露三年遂に敗滅するに至つた。

二

次いで甘露五年四月に至り、司馬昭は相國晋公となり、九錫を加へられ、その威赫々として今や帝王を壓するやうになつた。之を見て魏帝髦は憤懣に堪へず、一日密かに侍中王沈、尙書王經、散騎常侍王業を召して、

『司馬昭が朕の位を篡はんとする野心のあることは、誰も知らぬものがない程である。

自分はおめ／＼と彼の陰謀にかゝるのを待つてゐるよりも、寧ろ卿等と共に進んで彼を討滅しようと思ふが、卿等の意見はどうであるか』と訊ねた。すると尙書王經は

『誠に御憤りは御尤ですが、併し一旦やり損つたならば、取りかへしのつかぬ事になります。それに陛下の親兵と申しても、今いくばくもありません。若し迂濶に荒療治をして、却つて命に關はる大病になつては大變です。何んとか御分別があつて、更に好い時

おめ／＼と  
死を待たん  
や



機を待たれては如何なものでせうか」と云つて、大いに自重するやうに勧めたが、一旦思ひ詰めた帝の耳には、それが少しも入らなかつた。帝は聲を厲まして、

『朕はもう到底我慢が出来なくなつた。死んでもかまはぬから是非とも昭を討滅したい』と云つて、堅い決心を現はした。王沈と王業とは主君から大事の相談を受けたが、後難のほどが恐ろしいので、御前を退出するとすぐに司馬昭の許に行つて、その事を密告しようと思つた。そして彼等は王經を誘つたが、忠義な王經は頭を振つて、

『俺には君主を裏切るやうなことは出来ない』と云つて同行を拒絶した。

氣の立つた帝は、今は一刻も猶豫がならぬと考へ、直ちに太后に事の仔細を告げ、宮中の宿直、護衛の士や、奴僕小者の末までも集めて、漸く百餘人を得、帝自ら劍を抜いて號令し、折しも雷霆閃めき、豪雨篠を衝く中をば、一目散に司馬昭の邸へと向つた。之より先き大將軍司馬昭は、王沈と王業の密告に依つて直ちに應戰の準備に着手し、昭の弟屯と賈充とを指揮官として、王の一隊を逆襲せしむることとし、かくて兩軍は南關下で遭遇戰を演ずることとなつた。けれども昭の一隊は百戰練磨の精銳であり、之に反して帝の一隊は深宮の長袖者流の集りであつたから、勝敗の數は戰はずして既に明かだ

後難を恐る  
重臣

雷雨の中に  
天子の孤軍  
奮闘

あつた。それでも萬乗の天子が自ら袞龍の袖を掲げ、劍を抜いて縦横に荒れ廻るので、昭の兵はむげに手出しもならず、たゞ遠巻きに劍の林を作つて、空しく犇めいてゐるばかりであつた。帝は之を見て、

『劍を捨てろ?』と一喝すると、一同のものは思はずその場に劍を捨て、平伏してしまつた。

司馬昭の軍がいかに精銳でも、天子の前に出ては、流石に手を出すものがなかつた。

その時賈充が茲に駆けつけてきたが、成濟といふものが今までの戰況を報告して、

『何分陛下が自分で戰つてゐるので、手の下ろしやうがないのです』と訴へると、賈充は聲を荒ららげて、

『平生お前だちに扶持を與へ、妻子を養はせておくのは、今日のやうなことがある爲だ。若し司馬家が今日亡びたならば、汝等一門の命があると思ふか。何をまごついてゐると叫んだ。』

『では陛下を捉まませうか、それとも殺ませうか』

『殺してしまへ?』

曹氏から司馬氏へ



帝都の街に天子を刺す

曹氏から司馬氏へ

一一四

賈充の命令で成濟は忽ち躍り出で、劔を揮つて眞正面から帝を刺した。かくて昨日までは帝座にあつて魏を治めた曹髦も、今は白刃に貫かれて無慘にも帝都の街頭に路傍の露と消えたのであつた。

三

司馬昭は髦を殺したが、未だその機が熟しないと見たか、直に帝位に即くことをせず、更に曹操の孫に當る曹奩そうけんを位に立てた。元帝即ち之である。そして昭のために殊勳を立てた成濟は、大逆無道の者とあつて、その三族と共に誅せられた。

司馬昭遂に志を果さずして卒す

帝曹奩立つて五年にして咸熙と改元したが、この年蜀帝劉禪は魏に降つたので、魏主は昭の爵を進めて晋王と爲し、天子の儀禮を賜はることとなつた。然るに咸熙二年八月、司馬昭は多年我慢してゐた帝位篡奪の野望を満たさずして死んだので、その子炎が後を嗣いだ。

初め昭が晋王となつて世子を定めるときに、炎を立てるか又はその弟の攸いふを立てるかについて議論があつた。昭は元來攸を愛してゐたから、之を世子とする考であつたが、

三代がいつて帝位篡奪

賈充等は、炎の髪が長くて立ては地に着き、手を垂るれば膝の下まで達し、どうしても人の臣下となるべき相貌ではないと主張したので、遂に炎が世子に選ばれることとなつた。かくて炎は晋王を相續してから僅に三ヶ月にして、父祖以來蓄積し來つた實力を以て、恰も嬰兒から玩具でも取上げるやうに、無難作に魏の帝位を篡奪してしまつた。是に於て曹丕に依つて基礎を置かれた魏は、遂に痛ましくも滅亡するに至つた。時に元帝奩けんは二十歳であつた。

そのとき魏の末路を見て、悲憤の涙を流したのは曹丕以來の老臣、太傅司馬孚しほぶ一人であつた彼は奩の手を執つて、

『私だけは死ぬまで魏の臣であります』と歎歎流涕した。

その後、先帝を殺さした賈充は車騎將軍となり、先帝を裏切つた王沈は、驃騎將軍となつて幅を利かせた。

曹氏から司馬氏へ

一一五



孫權死して  
漸く衰ふ

宦官らしい  
悪計

降参してからの辣語

一  
吳の孫權そんけんは父孫堅、兄孫策の餘威を受け、自ら帝位に上り、天下を三分して覇を江東に唱へたが、權の歿後は、歴代の君主多くは庸劣で、左右の人材も漸く下落し、爲に吳の國勢は次第に衰頽に向ふのであつた。

孫權死して後、少子亮りやうが位に即いた。彼は徒らに細事に屑々せつせつとして人君たるの資に乏しかつた。亮は位に即いてから、親ら政に當り、屢々中書省に出て、孫堅以來の古記録等を調査して政治の参考とした。一日亮は生梅なまうめを食つたが、餘りに酸すっぱかつたので、宦官に命じて蜜を取りよせると、その中に鼠の糞があつた。之より先き、その宦官は蜜を保管してゐる役人の許に行つて、密ひそかに蜜を貰はうとしたことがあつたが、役人は剛直な者だつたので、之を拒んで與へなかつた。それで宦官は之を恨み、その役人を失敗しちらせるために、蜜の中に鼠の糞を入れておいたのであつた。亮はうす／＼この事に氣がつい



たので、蜜を保管してゐた役人を呼んで、

「この頃宦官がお前の所に蜜を貰ひに行かなかつたか」と訊ねた。すると役人は、

「はい参りましたが、蜜を與へませんでした」と答へた。で、亮は宦官を呼んで、

「蜜の中に鼠の糞を入れたものはお前であらう」と訊くと、彼は飽くまでもそれを否認するのであつた。で、亮は侍臣にその糞を破らせて見ると、中は乾いて外部だけが濕つてゐた。亮は之を證據として、

「若し鼠の糞が前から蜜の中に入つてゐたならば、中も外側も同様に濕つてゐる筈なのに外側ばかり濕つてゐるのは、後からお前が入れたに違ひない」と責め訊いたので、宦官も到頭それを白状してしまつた。このやうに彼は觀察力が鋭く、よく細事を穿鑿する癖があつたので、政治に付いても亦頗る綿密で、大將軍孫綝の如きは亮の難問に依つて、屢々答辯に窮することがあつた。で、綝は之を憤つて遂に亮を廢して瑯琊王の休を立てることゝなつた。景帝即ち之れである。然るに天興元年に景帝は突然腦溢血に罹つて口が利けなくなつたが、臨終の際に幼子孫資に帝位を嗣がせよとの手書を遺して崩去した。

天子明察に  
過ぎて廢せ  
らる

當時同盟國の蜀は既に滅亡して、魏がますます盛大となつた時であるから、まだ頑是  
ない幼主では心許ないと考へ、宗族の中から賢者を擧げて帝位に即け、以て魏の侵略に  
備へようとする議が起つた。そのとき左典軍の萬彧といふものがあつたが、曾て烏程の  
令であつたとき、烏程侯孫皓と親しかつた所から、頻りに皓の才識を稱揚して、

適當の  
人な  
お鉢が  
廻る

「烏程侯は明斷にして、恰も長沙桓王(孫策の諡號)の倂があり、その上學を好み、法を  
尊び、一點非難の打ち所のない立派な帝王の材である」と云つて推薦した。當時皓は一  
般に評判も悪くなく、又他に適當な者もなかつたので、大臣たちも大體は皓を帝位に即  
けることに決し、この旨を太后に告げると、太后は、  
「私は政治のことは判らないが、吳の國を立派に立て、行く者であれば、誰が後を嗣い  
でも差支がない」と云つて賛成したので、遂に皓が吳の四代目の帝位に即くことゝなつ  
たのである。

二

孫皓は時に年二十三であつたが、帝位に即いた當座は一所懸命に人氣をとることに腐  
降参してからの辣語



心し、先づ景帝の子等をそれ〴〵王に封じ、又優詔を發して士民を恤み、朝廷の倉庫を開いて窮民を救濟し、宮中に奉仕してゐる官女どもをそれ〴〵臣下の獨身者に配し、更に苑中に飼養してあつた鳥獸の類までも悉く放してしまつた。こんな風に皓はあらゆる手段を用ゐて人心を收攬したので、人民はその徳を頌し、明主の評判が忽ちにして國內に弘まつた。けれどもそれもほんの束の間で、漸くお尻が暖まるに従ひ、追々地金が現はれ、さては酒色に溺れるやら、私情に囚はれて法令を蹂躪するやら、その他色々のよからぬ事が續出したので、最初の評判は全く裏切られ、人民は悉く彼に失望し、さては皓を擁立した丞相興や張布などまでが、

『とんだ天子をもち立てゝしまつた』と歎息した。すると皓はそれを聞き込んで、或る日張布が参内したときに、之を執へ、三族と共に之を誅戮してしまつた。

この時以來吳の宮廷には恐怖時代が始まつた。即ち皓は即位の翌年には太后朱氏と先帝の子四人を虐殺し、その翌年には散騎常侍の王蕃の剛直を忌み、彼が宮中の宴會で酔ひ倒れたのが悪いと云つて之を殺害して、その屍を餓虎の餌食とした。次いで皓を帝位に推薦した唯一の恩人の萬彧と留平とを毒殺し、又大司農樓玄が直諫するといふので遂

に之を慘殺した。その他豫章の太守張俊は、皓が豫てから憎んでゐる章安侯奮の母の墓を掃除したといふ廉で、三族と共に車裂の刑に行はれ、又中書令の賀邵は中風で數ヶ月の間口が利けなかつたのを、詐りだと疑はれ、焼いた鋸で頭を挽き切られて殺されてしまつた。かくて朝臣どもはいつ殺害されるか判らないので、いづれも口を緘し、行を晦まして、只管身の無事なることを祈り、又宗族中の孫秀、孫楷の如きは難を避けて晋に走つたのである。

かくて國內では士民の心が悉く皓を離れ、怨嗟の聲が市に滿つる時に當り、外に於ては南方交趾が屢々亂を起し、加之北方の晋は杜預、王濬等をして頻りに南伐の準備を整へしめたので、吳の危急は今や目睫の間に迫つた。が、それにも拘はらず皓は岑昏等の嬖臣の甘言に酔ひ、ます〴〵放埒な行爲に走るばかりであつた。そのとき黃喙といふ者の家に鬼目菜といふ草が生え、又吳平といふ者の家には買菜といふ草が生えた。鬼目菜は一名芝草、買菜は一名平慮草とも云つて、めでたい物であるといふので、皓はこれを非常に大事にし、黃喙には侍芝郎、吳平には平慮郎の官を授け、いづれも銀印青綬を佩ばしめた。又皓は十人の宮内官を司過といふ新しい役に任じ、群臣に賜宴の際、彼等の醉



中の言動を一々記録させて、皓の意に反するものには嚴重なる刑罰を課せしむることゝした。かうして呉は次第に滅亡の深淵へと近づいて行つた。

三

晋の咸寧五年(吳の天紀三年)十一月に晋は大いに兵を發し、先づ杜預は陸兵を率ゐて荆州の江陵より進出し、王濬は水軍を率ゐて巴蜀より揚子江を下り、かくて水陸二道より進攻した。そして魏軍は連戦連勝して武昌を降し、更に鼓譟して吳都建业へ迫つた。

今や危急を報ずる使者は恰も櫛の齒をひくが如く戦地より宮廷へと向つた。で、朝臣どもはいづれも狼狽し、今は一刻も猶豫ならずと、慌皓しくの前に出て、  
『北兵は勢破竹の如く進んできて、味方のものどもは最早之に敵對することが出来ませぬ。で、やがて建业も彼等のために陥落するだらうと存じます』と告げた。すると今までは暴王の威を振つてゐた皓も、悄然として、

『それでは一體どうしたものであらう』と空しく嗟歎にくれるより外はなかつた。朝臣等は稍々暫くしてから、

『これと云ふのも皆昏などの佞臣が陛下を迷はせたくめですから、彼を罰せられるがよいと思ひます』と答へると、皓は今更面目なさうに、

『では昏を奴隷にして人民に謝まることゝしよう』と云つた。

けれども朝臣等は昏を奴隷にするのでは満足が出来なかつたので、遂に彼を八裂の刑に處してしまつた。併し昏一人を屠つたからといつて、滅びゆく吳の運命を挽回するわけにはゆかなかつた。皓は遂に萬策盡き、光祿勳薛瑩、中書令胡冲等をして降表を晋軍に捧げしめ、又群臣に對して自責の書を遠り、面縛輿櫬して王濬の軍門に降参した。そして四州、四十三郡、五十二万三千戸、軍兵二十三万人を悉く籍に上せて晋に捧げた。時に天紀四年四月十六日で、孫權以來四代、五十九年にして遂に吳は亡びたのであつた。

晋の朝廷では吳國平定の報を聞くと、一同のものは踊躍して悦んだ。晋は今蜀と吳とを滅して、始めて天下を統一したのであつた。武帝の満足はいふ迄もなかつた。彼は正殿に宴を設けて臣下の参賀を受け、嬉しげに盃を擧げて一同と共に歡を盡した。けれども先に吳から晋に投じた驃騎將軍孫秀のみは、賀詞をも述べず、宴席にも列せず、遂に



南方を望んで涙を流しながら、

「昔長沙桓王(孫權の兄孫策)は弱冠にして、一校尉に身を起し、吳の基を開かれたのであつた。然るに今や庸主孫皓が江南を擧げて敵國に捧げ、宗廟も山陵も空しく廢墟に委するとは、何といふ情ない事だらう」と浩歎した。

降人孫皓は歸命侯(孫皓)の爵を與へられたが、その年の五月一日に晋の洛陽に入り、太子瑾等と共に一同泥顔面縛して東陽門から進み門内で縛を解かれて衣服車乗の優遇を受け、田三十頃及び年々に錢穀錦絹の仕送りを受けることとなり、子の瑾は中郎の官に任ぜられた。次いで五月四日に至り、晋の武帝は吳を滅して天下を統一したので、その祝賀の宴をば大殿に催し、文武百官の有爵者は勿論、その他四方蕃夷の使臣より大學の學生に至るまでを悉く召し、茲に未曾有の盛宴を張つた。そのとき歸命侯孫皓を始め、吳の降人どももその宴に召し出された。皓は殿中に參内し、頭を地に着けて敬禮をすると、武帝は得意満面で皓に坐を賜はつて、

「朕はこの座を設けて久しく卿の來るのを待つてゐたのだ」と云ふと、皓も亦負けてはゐずに、

お情の捨扶  
持を受く

皮肉さ皮肉  
で負けない  
降帝

「臣も嘗て南方に於てこの座を設けて陛下の來るのを待つてゐたのです」と答へた。之を傍で聞いてゐた賈充は案外皓の手答があるのを面憎く思つて、

「聞く所によると貴方は吳にゐられたとき、人の目を抉り、顔の皮を剝いだりなすつたさうですね」と皮肉をいふと、皓は昂然として、

「いかにも、私は人臣にしてその君を弑したり、姦佞にして節義の心なき者どもには、皆その刑を行つたのです」と言ひ放つた。之は暗に武帝が魏の帝位を篡奪したり、又武帝の父昭が魏主を弑した所業を諷し、併せてそれを助けた賈充に手強く當てつたのであつた。皓は放埒淫蕩の人物であつたが、孫堅や孫策の血を引いてゐるので、どこかに肯かぬ氣はあつたのである。



## 南北朝劇の大詰

—

魏吳蜀三國の鼎立が晋によつて統一されたかと思ふと、幾くもなく南北朝二百七十年の對立時代は來た。その最後に當つて隋の文帝に亡ぼされ、彼に統一者の名を與へたものは陳である。然かもその陳は陳霸先(陳の武帝)が梁の天下を纂つてから、僅かに五代三十年にして、目まぐるしき程に興廢常なき南北朝劇の大詰を演ずる役に廻り合せたのであつた。

後主陳叔寶はその至徳二年に光照殿前に、臨春、結綺、望仙の三高閣を築造した。高さ各數十丈、連延數十間、その柱や壁は悉く香木名木の彫刻麗しく、金銀珠玉を鏤め、軒には珠の簾をかけ列べ、内には寶の帳を張り陳ね、漢の武帝以來殆ど試みられなかつた美觀を盡したのであつた。のみならず、庭には石を積んで山を造り、水を引いて池を湛へ、その間には奇花異卉を配し、そよ吹く風にも妙香數里の外に傳はつた。



帝王の日課  
は女と酒と  
詩と

帝自身は臨春閣に住み、第一に寵愛する張貴妃は結綺閣に、龔氏と孔氏との二貴嬪は望仙閣に住ませ、高廊下を架け渡して帝は意のままに三閣の間を往來した。云ふまでもなくこの外に後宮の美人雲の如くその左右に群つてゐた。帝が日夜事とするところは、男女の文人を召し集めて宴を催し詩を賦して遊ぶのであつた。眼中國家なき佞媚のともがらは、何れも文武の政務を抛擲して宴遊に侍することに努め、官職は金錢で賣られ、獄囚も財寶で罪を贖ひ、賄賂瀆職は公々然と行はるゝ状態であつた。

統治の行き届いてゐる時でも、天子自身が國務を顧みず、政令を瀆し淫樂に耽るやうでは、その國の安きを得ることは望めないのに、況してや、その頃北方では、既に楊堅が後周の帝位を篡つて國號を隋と號し、更に後梁を併せて殆ど長江以北を掩有し、一氣に天下統一の偉業を遂げようと、虎視眈々たる際であつたから、陳の南朝は風前の燈とも謂つべきものであつた。隋の文帝(楊堅)が、「陳叔寶手掌の地に據り溪壑の欲を恣にす」と罵倒したのも當然であつた。

既に強敵の  
りて風前の  
燈の如し

陳の禎明二年、隋の開皇八年十月、隋の文帝は、『機に應じて誅殄すること一擧にあり、永く吳越を清めん』と豪語して討陳の大軍を發

した。楊素、韓擒虎、賀若弼を將として、三道から五十一萬八千の兵を進め、直ちに長江の天嶮に殺到せしめた。

二

闇愚の帝王は、何れも亡國の大禍が鼻の頭に打衝かるまでは、天下の形勢も、國內の政情も、將た又敵味方の戦況も知らないでゐるのが定例となつてゐる。

禎明三年の元旦、陳の天子叔寶は群臣を正殿に召して盛宴を張つた。その朝は不思議な濃霧が乾坤を鎖し、天日爲に光を隠し、四方晦冥となつた。然かもその霧を吸ひ込むと、辛いやうな酸ばいやうな感じを與へたといはれてゐる。帝は祝酒に酔ひ潰れて夕暮まで昏睡してゐた。安んぞ知らんこの日隋の猛將賀若弼は廣陵から既に長江を横きり、韓擒虎も采石を渡つてゐたのであつた。

陳の采石渡の守備軍は、將卒ともに元旦の酒に酔つて、隋軍が門に押寄するまで全く知らないでゐた。喊の聲に驚いて醉眼朦朧と起き出したのだから、固より一堪りもなく断け亂された。守將徐子建が馳せて建康の都に急を告げたので、朝廷上下愕然として色

酸い霧に鎖  
さるゝ元旦



を失つた。五日になつて征隋の詔書を出した。それは餘りに形勢に迂濶な、滑稽な壯語である。

「犬羊の徒が我が國境を擾がさうとする、蜂やサソリの小虫にも毒ある喩だ、直ちに隋軍を叩潰さねばならぬ、朕は親ら六師を御して八表を廓清するであらう」といふやうなことが書いてあつた。

帝は取敢へず驢騎將軍蕭摩訶、護軍將軍樊毅、中領軍魯廣達の三人を都督に任じ、南豫州の刺史樊猛に舟師を帥ゐて赴かせ、僧尼や道士の輩にまで武器を取つて起たせることとした。それで破竹の勢の隋軍を喰ひ留め得る所存であつたらしい。

七日には賀若弼が南徐州の京口を破つた。九日には韓擒虎が半日で姑孰城を陥れられた。帝都建康の運命は痛ましくも脅かされるゝに至つた。帝は軍を遠く出して置かれなくなつたので、最後の防禦戦を帝都で試みるべく、總て各軍を招き歸らしめた。そして豫章王叔英を朝堂に、蕭摩訶を樂遊苑に、樊毅を香閣寺に、孔範を寶田寺に、魯廣達を白土岡に、それ／＼配置布陣せしめた。この時までは陳の都に尙十萬餘の軍兵がゐたのであるが、少しも兵馬の智識の無い帝は、唯潜々と涙を流してゐるばかりで、帝都防備の

名將の献策  
容れられず

一切は、大監軍施文慶に任せ放しであつた。

蕭摩訶は逆襲の策を献じた。敵の背後に出で退路を脅かしたら、建康の都の孤立を救ふことが出来ようといふのであつたが、この策は用ゐられなかつた。そして唯無益に南北二十里の陣を布いて敵の突破に任せる有様であつた。上下既に戦意を失つてゐて、狡猾な者は味方の首を取つて天子に献じ、旨々と恩賞を詐取するといふ事まであつた。到底隋の大軍を支うべき陣容では無くなつた。

陳軍隨一の勇將蕭摩訶が、最後の出陣に際し、帝は懇ろに、

「朕が爲に一大決戦を望む」と頼んだ。蕭は、

「臣が従來多年戦陣に馳驅しましたのは、偏に國の爲、身の爲でございました。この度は更に妻子の爲に戦はねばならぬ事になりましたのでございます」と答へた。

この際蕭が天子の爲といはずに、妻子の爲といつたのは、帝の耳には痛く響いた。蕭の妻は密かに帝の寵幸を得てゐたのである。

蕭は既に戦意が無かつた。戦場へ出ると隋將員明に擒にされてしまつた。彼は直ちに總帥賀若弼の前へ引き出され、將に誅せられようとするに及んでも、神色自若として少

將軍の皮肉  
天子の痛い



しも動ずる様子がなかつた。賀若弼はこれを見て大に感じ、直ちにその縛を解き、禮遇を加へて陣中に置く事にした。

いよ／＼味方の崩潰と見た一方の守將任忠は、殿中へ駆け込んで帝に謁し、『斯く相成りましては萬事休すでございます。臣には何の方策もございません、陛下も御覺悟を遊ばしますやう願ひ奉ります』と帝に最後の決心を促がした。然るに帝は『これで兵を募つて尙一戦してくれまいか』と繩で括つた黄金二束を授け出した。今になつてもまだ金で人が動くやうに思つてゐる帝の心事には任忠も呆れ果てた。

『今は黄金の力は何にも相成りませぬ。陛下は一刻も早く舟に召して江を溯り、周羅隠が陣までお立退きが上策でござりませう。臣は死を以て御守護致しませう』と更に勧めたので、帝もその氣になつて、忠を舟の支度に出し、帝は女官どもに逃げる準備をさせた。然るに舟の支度に出たまゝ任忠が歸つて來ないので、帝は逃げ出す事も出来なかつた。任忠は實は途中で韓擒虎が軍に遮られたので、その場で隋に降つたのであつた。

## 三

領軍さいしやう徴は兵を率ゐて朱雀門を固めてゐた。其處へ韓擒虎の勢がヒタ／＼と押寄せた。守兵の多くは一人減り二人減りして逃亡者相踵き残り少なくなつてゐたが、小勢ながらも防矢一筋と待構へると、敵軍の中から任忠が現れ、手を振つて、『俺でさへ降参した。諸君はいつまでも何をするのだ』と叫んだので、もはや一人の防ぎ戦ふ者もなく、隋の軍勢は潮の如く宮中へ雪崩れ込んだ。

城内の文武百官は、既に自分々々の財産や家族を取纏め、悉く逃亡してゐたので、さしも榮華を誇つた建康の宮殿樓閣も、さながら空屋同然に人の氣合もなくなつてゐた。纔かに尙書僕射の袁憲一人が殿中に帝を護つてゐたのと、尙書令の江總等が六七人官署に残つてゐるばかりであつた。

帝は袁憲を顧みて、

『朕は今まで卿が誠忠を知らなかつた、今日になつて誠に面目も無い次第で。斯うなつた際に、他には左右に居る者も無いといふのも畢竟朕の不徳の致すところではあるが、江東には衣冠の道が盡きたと見える』と歎息した。

敵軍の喊聲は次第に近づいた。帝は見苦しくも何處ぞへ隠れようと逃げ回つた。袁憲

金東を出す  
帝王の心事

逸早く逃げ  
た百官



は色を正して苦諫した。

『陛下、お騒ぎになる時ではございません、縦令や隋の兵が宮中へ亂入致しましても、天子に對し決して無態なことは致しません、この大軍の中を何處へお逃げになられます、どうぞ陛下は天子の衣冠を整へ、正殿に御座遊ばして、梁の武帝が侯景に會はれた時のやうな御態度が願はしう存じます』

然し帝はさういふ落着いた事は出来なかつた。宮女等を引具して走り、後庭の井の中へ飛び込まうとした。袁は尙も涙を流して諫めたけれども、震へ上つてゐる帝の耳には徹らなかつた。仕人の夏侯公韻といふ者が、自分の身を井の口に横たへ塞いで遮つたがそれでも押しつけて、帝は到頭井の中へ飛び込んでしまつた。

隋の兵は宮中隈なく搜索したが、天子の行方が判らない。その内に井の中へ入られたといふ者があつて、大勢で井を取圍み、上から聲をかけたが答が無い。石を投げ込んで見ると、ワツと叫聲がした、それツとばかり繩を下して引き揚げようとするが非常に重い。やつとことごと引き揚げて見ると、重かつたのも道理で、帝は張貴妃と孔貴嬪と三人の體を一つに帯で括り合つて上つて來たのであつた。

梁の武帝に  
倣へ

人を引揚げ  
て呆るゝ

皇后は常の如く皇太子の深と共に、居室にあつて扉を閉ぢて座してゐた。側には仕人の孔伯魚が唯一人附いてゐた。隋の軍兵が無遠慮にどや／＼と室内へ進み入ると、今年十五になつたばかりの太子は凜とした姿で、

『永々の戦に御苦勞であつた』と恐るゝ色なく端坐したまゝ、聲をかけた。これには荒くれ武者ども、度膽を抜かれて、一同覺えず敬禮をした。

陳帝叔寶は降參狀を書かせられた。陳霸先以來五代三十三年で陳の社稷は亡び失せた。そして久しぶりに天下は隋に統一された。

(附記、一)——梁の武帝と侯景の故事。

梁の太清三年叛將侯景が梁の都を陥れ、武帝を幽閉する考で、王偉と陳慶とを帝の許に遣はした。武帝は

「侯景は今何處にゐるのぢや、茲へ連れて來たら宜しいだらう」といつて、武德殿に出御して待つてゐた。景は甲兵五百人を隨へて左右を護らせ、劍を帯び傲然として帝の前に進み禮をした。帝は、

「卿は兵馬の間に、かなり永らくゐたやうだが、別に疲れはしないのか」と問うた。

帝を幽閉せ  
んとするも  
の氣怯れ

偉い皇太子  
の挨拶



侯景は唯默然として答へなかつた。帝は更に、

「卿は何州の出身だつたかな、どうして斯ういふ事にはなつたのか」と問うた。景は同じく答が出来なかつた。側の者が代つて答へた。

景は殿を下つてから始めて口を利いた。

「戦場で白刃飛箭の間に敵と對してならば、常に意氣安緩として少しも恐ろしいとも気がひけるとも思つたことは無いが、今日蕭公(武帝を指す、帝の)に見えて覺えず憎伏させられた、あれが天威犯し難しといふのだらう、俺はもう再び會はうとは思はな

い」と歎じた。

(附記、一)——陳の後主が張孔二美姫と括り合つて上つて來た井戸は、後世まで建康の保寧寺覽輝亭の側に遺つてゐた。臙脂井とも呼び辱井とも稱せられた。これを日本風に考へるならば、前者は「べに井戸」といはないで「おしろい井戸」といふであらうし、後者は先づ「恥さらし井戸」とでもいふのであらうと思はれる。

恥さらしの井戸

### 馬嵬驛の玄宗

時局は急轉直下す

潼關が破れた。安祿山の兵は潮の如く京都に押進む。策は用ひられず心ならずも潼關に戦つて敗戦し、遂に祿山の軍に捕はれた大將哥舒翰が部下は、色を失つて急を都に告げた。事の迫れるを察し得なかつた玄宗皇帝は、その急使を夕方までも引見しなかつた。

當時毎夜初更には各地の烽火臺で煙を揚げて無事を報するのであつた。之を平安火と稱してゐた。然るにその夜は烽火があがらなかつたので、玄宗は始めて變事のあつたことを知つた。驚いて宰相の楊國忠を召して善後策を問うた。國忠は、

「かくなりました上は、暫くこの亂をお避けになるため、蜀の國へでも行幸遊ばさるゝより外はござりますまい」と奏したので、玄宗も今は詮方なく之に従ふことゝなつた。

然しあからさまに蜀に蒙塵するといつては、左右の子どもが動搖するのを恐れ、表面は陛下が親征するのだといつて出發の準備をした。それでも誰も玄宗の親征を眞面目

急な親征實は蒙塵

馬嵬驛の玄宗



に信する者はなかつた。

その夜龍武大將軍陳元禮は敕を奉じて親兵を整へ、彼等に多額の金子や布帛等を賜はり、且つ明日天子に供奉して出發するやうにと言渡した。そして厩から九百餘匹の馬を選び出して帝の出發を待ち受けた。翌朝になると玄宗は捨て難き禁裡をあとに、楊貴妃、その姉妹、皇子、その妃、皇孫及び宦官や宮人を従へて延秋門を出た。皇孫等の中で外にゐたゝめ間に合はないものはその儘置き去りにされた。憐にもあわたどしい門出であつた。

玄宗の一行が宮庭の寶庫の前を過ぎる時、楊國忠はその山なす財寶を焚捨てさせようと願つた。すると玄宗は、

賊に掠奪の種を残せ

『若し賊軍が此處へ来て、何も掠奪するものがなかつたなら、きつと一般の人民どもから金品を強奪するに相違ない。それでは可愛さうだから、寶庫は焚かずにそのまゝに残しておくがよい』と云つて、それを許さなかつた。

この日百官は、帝が唐突に蜀の方へ落ちて行つたなどゝは夢にも知らなかつたので、例のやうに入朝したが、宮城の門があくと、中から宮中に仕へてゐる女官などが大勢ドヤ

／＼と出て来て、天子の行方が判らなくなつたのに、驚き呆れて騒いでゐた。聽て百官も事變に驚いて、四方に逃げ散つてしまつた。京師は上を下への大混亂に陥つた。

玄宗の一行は正午頃に咸陽に到着したが、その時まで玄宗はまだ食事をしてゐなかつた。此處で人民どもが麥や豆を雑へた飯を献上すると、皇孫たちは恥も外聞も忘れて我れ先にと手で飯を掴みながら食べたので、献上の飯は瞬くひまに盡きてしまつた。

この時一人の賤しい老人が玄宗に謁して、

『安祿山は久しい以前から内心謀反の念があつた者でございます。それで今まで多くの臣下方が心配されて、その事を陛下に申上げられたのでございますが、そのたびごとに陛下はお怒りになつて諫臣をお殺しになりましたので、祿山は次第に勢力を増して、遂には謀反を實行するやうにもなりましたのでございます。私ども下民は宋璟が宰相でゐられた時には、陛下に對し奉つても屢々直諫をされると承りまして、それでこそ國家は安泰であると思ひまして、安心してゐたのでございます。ところが、その以後になりましては、廷臣どもは陛下の御威光に懼るゝばかりで、強ひて諫言をする者もなくなりまして、陛下は宮庭以外の事は何も御存知がないといふ事にも相成りましたのでござ

老人帝に苦言を呈す



います。誠に残念な次第でございます。それにしましても今度のやうな不幸な事件が起りませんでは私のやうな微賤なものが、陛下に咫尺し奉つて、このやうな事を申上げることなどできるはずはなかつたのでございます」といつた。玄宗は之を聞くと、今更ながら自分の不明であつたことを悔い、厚く老人を慰諭して去らしめた。

## 二

帝の一行は馬嵬の驛(陝西省興平縣)に到着した。この時將士どもは空腹な上に、非常に疲勞してゐたので、彼等は何れも憤慨して喧しく不平を訴へるやうになつた。大將軍陳元禮も大いに怒り、天子は蒙塵され、將士は餓疲れ、上下ともにこの難儀を見るのも、畢竟するに楊國忠のやうな佞奸の徒が宰相となつて、國政を誤つた結果であると考へ、皇太子に向つて、國忠を誅戮せんことを請うた。併し國忠は玄宗無二の寵臣であることとて太子も急には之を決し兼ねる様子であつた。

偶々この時、吐蕃國(今の西藏)から都へ來合せてゐた使者二十餘人が、玄宗の一行に加つてゐた。彼等は宰相楊國忠の馬の前に立ち塞がり、空腹で堪らぬから、何んとか糧食の都

餓と疲に慄む一行

誤解の下に宰相を殺す

合をしてくれと訴へてゐた。之を見ると軍兵どもは、楊國忠と吐蕃の使者とが、ヒソ／＼話をして、謀反の相談をしてゐると騒ぎ立てたので、國忠が驚いて逃げようとする所を追つかけて遂に之を殺し、四肢を断ち切り、その首を槍の先に貫いて、驛門の外に曝し、尙秦國、韓國の二夫人をも殺害した。

玄宗は四邊が俄に騒がしくなつたから、出て見ると、國忠が殺されたと判つたので、將卒を慰撫して、それを鎮めようとしたが、なか／＼それに應じて鎮まるべくもなかつた、帝は高力士をして彼等の言ひ分を聞かせると、陳元禮が之に答へて、

「楊貴妃と國忠とは元來同類であります。然るに今國忠が謀反を企て、誅戮されたからは、貴妃をそのままに許しておくことは出来ないのです。で、この際貴妃も同じく罰して頂かなければ、この騒ぎは鎮まりませぬ」と言ひ放つた。

玄宗も今は己むを得ず、將士等に向つて、貴妃を殺さうと約束して門内に入つた。然し流石まさかに多年寵愛してゐた貴妃を、むざ／＼と殺すには忍びないので、首を傾けて久しい間思案にくれてゐた。この有様を見て、京兆司の役を勤めてゐた祿韋諤ろくわいといふ者が、帝の前に進みいで、



楊貴妃を殺すに忍びず

馬嵬驛の玄宗

一四二

『今將士等は非常に激昂してゐますから、この上に彼等の意に逆らつては、急に何のやうな變事を起さうとも知れませぬ。こゝは斷然御心を決せられて、速かに貴妃を罰せられる外はございませぬ』と額で地を叩いて熱心に歎願した。

けれどもまだ玄宗は、深宮にある楊貴妃が國忠の謀反に關係する理由がないと云ふので、それを殺す決心がつかねる様子であつた。それで御側にゐた高力士は、

『貴妃に謀反の罪のないのは確かだと存じますが、何分にも將士等は、貴妃が陛下の傍にゐるうちは安心ができないと云つてをります。若し將士が不安の心を抱いてをりましては陛下とても御安心ができないわけでございます。で、茲は何卒願慮をめぐらされて御明斷の程が願はしうございます』と更に玄宗の決心を促した。

帝も今は詮方なく、遂に高力士に命じ、貴妃を佛堂に引き出させて之を縊り殺し、死屍を輿の上のせて驛庭に置き元禮等を召して之を觀せしめた。將士どもは一同に萬歳を稱へやがて部署を整へて、遙々と蜀へ行軍の準備にとりかゝつた。

易々と亡びた司馬晋

司馬炎が三國魏の帝位を篡奪して都を洛陽に奠め、國號を晋と改めた。爾來惠帝、懷帝を経て愍帝の時に至り、晋は漢帝劉聰のために滅された。炎が帝位に即いてから、實に四代五十二年である。世に之を西晋といつてゐる。然るに愍帝が歿してから、瑯琊王睿が帝位に即いて（元帝）江東の建業に都し、爾後十一代百三年を経て滅亡した。之を東晋といふのである。茲では先づ西晋の滅亡を叙し、次に東晋の滅亡に及ぶことゝする。

西晋は四代  
東晋は十  
代で亡ぶ

西晋が滅亡した原因を一口で云へば、武帝以後歴代の君主が暗愚にして無力であつた上に宗族どもが互に權勢の爭奪に耽つて、遂に八王の亂の如きものを惹起し、國內が爲に衰微し切つた所へ、所謂五胡の寇があつて、氐、羌、羯、鮮卑、匈奴等が四方から國

易々と亡びた司馬晋

一四三



都に迫つた爲である。

晋の朝廷が榮え、君主の威勢が比較的強かつたのは、僅かに始祖武帝の時代だけで、その以後は庸劣な君主が位に即いたので、君權は漸く衰へて宗族どもが跋扈するやうになつた。武帝の後を嗣いだ惠帝は中にも暗愚な君主で、西晋の滅亡の原因は、大部分この時代に胚胎したと云つてもよい。嘗て國內に大飢饉があつて、食ふべき穀物がなかつた爲に、百姓の死するものが多かつたとき、帝はさも訝かしさうに、

『もし穀物がなければ、なぜ人民は肉を粥にして食べないのだらう』と云つたことがあつた。

又或る時帝は華林園で蛙の鳴く聲を聞いて、

『あの蛙は朝廷のために鳴いてゐるのか、それとも又私人のために鳴いてゐるのか』と訊いた、すると侍臣どもは餘りの愚問に呆れてしまつたが、眞面目に答へる勇氣もなかつたので、戯談半分に、

『はい、朝廷の土地にゐる蛙は朝廷のために鳴き、私人の土地にゐる蛙は私人のために鳴いてゐるのでございます』と答へたと云ふことである。

然るに惠帝の皇后の賈氏は奸智があつて、權詐に富んでゐたので、帝の暗愚にして爲すなきに乗じ、自ら政機に關與し、以て自己の權勢を振はうとした。所が當時皇太后の楊氏とその父の太傅楊駿との勢力が強く、朝廷の大事は多く彼等の方寸に依つて決せられたので、賈皇后は先づ楊氏の勢力を覆さんと圖り、楚王璋及び淮南王允等を談らひ、元康元年三月に至り、李驥をして帝に迫つて楊駿討伐の詔勅を書かしめた。然るに朱振といふものが此のことを聞くと、楊駿に向つて、

『今朝廷では兵を出して貴方を攻めると云ふ噂がありますが、これは大方皇后が宦官などゝ相談して企てたことと思ひます。で、貴方は彼等が攻めて來ないうちに、先づ雲龍門を焼き拂つて彼奴どもの度膽を抜き、すぐに兵を率ゐて宮中に入り、陰謀の一味徒黨を空鑿したならば、恐らく宮中の者どもは貴方の勢に恐れ、張本人の首を斬つて訴へ出るに相違ありません。で、一刻も早く雲龍門をお焼きなさい』と獻策した。併し駿は元來荒仕事のできる男でなかつたので、

『雲龍門は魏の明帝が莫大な金を掛けて造られた由緒ある門だから、それをムザ／＼焼くといふのは何うも考へものだ』と躊躇して決せぬうちに、遂に賈氏の徒黨のために殺



され、次いで皇太后は廢されて庶人となつたのみならず、後金墉城で殺害されてしまつた。けれども賈皇后の殘虐は獨り之れのみには止らなかつた。次いで賈氏は汝南王亮や太傅の衛瓘を殺し、又己れの一味であつた楚王璋をも殺害した。その後皇后は太子の逸を邪魔者にし、之を廢しようとして一計を案じた。

即ち皇后は或る日天子が御病氣だと稱して太子を殿中に呼び出し、別室に於て若い女官どもをして太子に無理やりに酒を強ひしめ、遂に太子が泥酔して前後も知らなかつたときに、帝の御沙汰であると云つて、豫て下書をさせておいた文句を太子に書かしめた。その文といふのは、

『陛下は直ちに帝位をお退きなさい。又皇后もその位からお退きなさい。もし退位をなさらぬなら、無理にも退位をさせて見せます。私は母の謝妃とすつかり手筈を定め、宮中の内外から事を擧げるやうに決めてゐるのですから、愚圖々々すると不測の禍に罹るでせう。どうか皇天よ、宮中の邪魔者を除いて、私を天子に取り立て、又妻の蔣氏を皇后にして下さい。その時には私は牛羊豕の三牲を供へて北斗のお祀をいたします』といふのであつた。

太子は醉眼朦朧としてゐるので、その文面に何が書いてあるのか少しも判らなかつた。けれども太子は強ひられるまゝにその通り書いて女官に渡した。すると皇后はこの書を證據として太子に叛意があると稱し、太子を廢して庶人と爲し、次いで許昌に幽閉し、翌年三月に至り遂に之を毒殺してしまつた。

かうして皇后はますます暴威を振つたので、永康元年三月に至り、高祖司馬懿の第九子に當る征西大將軍趙王倫が三百餘の兵を提げて宮中に入り、先づ帝を東堂に押し込め、更に齊王冏をして賈皇后を執へしめた、このとき冏は血相を更へて皇后の部屋に闖入したので賈氏は之を責めて、

『郷はなぜ無禮にも私の部屋に亂入するのか』と訊ねた。冏は、  
『詔勅によつて貴方を執へに來たのです』と答へると、皇后は小首を傾けて、  
『詔勅といへば私から出る筈だが、それは何ういふ詔勅なのか。一體今度の陰謀は誰が企てたのか』と問うた。で、冏は出鱈目に、

『今度の事件は梁王彤が企てたのです』と答へると、皇后は、  
『狗を繋ぐなら頭をつながなくてはならなかつたのに、尾をつないだのが重々わるかつ



た』と云つて浩歎した。

蓋しその意は、先づ宗族の權臣どもを除かないで、太子を先きに殺したのが不覺であつたといふのである。かくて皇后は金墉城きんようじやうに幽せられたが、のち金屑酒といふ毒酒を飲まされて殺されてしまつた。

趙王倫は疾風迅雷的のクーデターに成功したから、自ら相國となつて九錫を加へたが後には惠帝を金墉城に幽し、自ら帝と稱して専ら威福を弄した。是に於て淮南王允を始めとし、次いで齊王冏、成都王穎、河間王顥等がいづれも趙王討伐の兵を起した。所謂八王の亂は之れから始まるのである。次いで倫が成都王のために攻殺されると、齊王冏が之に代り、天子を輔けて政を執つたが、驕奢にして専恣の行があつたので、河間王が長沙王又をして冏を殺さしてしまつた。然るにその後成都王穎が河間王顥と共に謀反をして兵を率ゐて京師に入り、顥は丞相となり、顥は皇太弟となつた。所がその後間もなく顥と顥との間に不和を醸して、互に争つたが遂に顥は敗れて頓北の太守に殺されたので、東海王越が之に代つて帝を輔弼することゝなつた。

光熙元年十一月に至り、惠帝は麥粉の中毒に依つて崩御したので、皇太弟の熾が天子

## 八王の亂

の位に即いた。これが第三代目の懷帝である。

かうして晋の宗族等は血で血を洗ふやうな戦争をしゐるうちに、氏、羌、羯、鮮卑、匈奴などが漸く勢力を得て、四境から都近く侵入するやうになつた。一體是等の夷狄は漢魏以來中國に降服したもので、多くは國內の各地方に雜居してゐたものであつた。所がその後漸く勢力を扶植してきたので、晋の武帝のとき、郭欽といふものが彼等を國外の邊地に移し、四夷と中國との境界の防備を嚴重にすべしと主張したのであつたが、武帝が之に従はなかつたので、遂に後年天下の大患となつたのであつた。

## 二

今當時に於ける彼等の勢力を概観するに、西南夷に屬する氏の李雄といふものはもと巴西郡に住んでゐたが、惠帝のときに羅尙の軍を破つて成都を陥れ、自ら成都王となり、遂に皇帝と稱し、國號を成と立てた。又鮮卑の慕容廆は武帝の時に鮮卑の都督となつたが、その子皝に至つて大棘城に遷つて、その勢力がますます盛大となつた。次に鮮卑の種族で拓跋氏なるものがあつたが、悉祿官の時代に於て西方の三十餘國を降して

## 五胡の概観



兵勢四隣に轟いた。

併し之等の夷狄のうちで最も強大なるものは匈奴の裔である劉淵であつた。彼の先祖は漢魏時代に中國に降つたものであつたが、自分は漢の甥であると云つて、漢の姓を冒し劉と稱したのであつた。淵は博く經史を學び、文武の兩道に通じてゐたが、武帝の時五部の帥より北部都督となり、惠帝のときに累進して五部の大都督となつた。又その子に聰、曜といふ二人があつたが、何れも驍勇絶倫で、克く父の業を助けたから、淵の勢力はますます強大となつた。かくて彼は兵を集めて大單于と稱するに及び、遠近風を望んで歸服するものが夥しかつたので、遂に都を離石に奠め、國號を漢と唱へ、自ら漢王と稱した。その後淵は皇帝と稱し、都を平陽に遷したが、永嘉元年十月に至り、その子聰及び石勒等をして洛陽を攻めしめた。然るに翌二年に至り淵が卒するに及んで、子の和が立つたが、間もなくその弟の聰が之を弑して自ら帝位に即いた。

劉淵次第に振ふ

劉聰が位に即くや、淵の遺業を紹いで討晋の大軍を起し、先づ南陽を徇へ、次いで襄陽までひた押しに押し、近く洛陽に迫つたので、太傅の東海王越は檄を天下に飛ばして義勇兵を徴し、自ら兵を率ゐて石勒の軍を討つたか、越は軍中に卒し、全軍は遂に覆

滅の厄に逢つた。晋はこの役に於て殆ど軍の主力を失つたので、今は漢の新鋭を迎へて戦ふの力なく、洛陽の陥落は目睫の裏に迫つた。晋は茲に窮餘の一策として遷都を決行することとし、俄に中郎劉會をして船數十隻を洛水に廻漕し、宿衛の士五百人と、穀物千斛を積み込ませて蒙塵の用意をさせ、洛陽の留守には河南の尹潘滔が之る當ることとなつた。然るに朝臣どもは洛陽を去るのを好まず、爲に帝が宮掖を出るときには、之に従ふものは極めて少數のもののみで、しかも帝の乗るべき車駕さへもなかつた。

帝の蒙塵に従ふ者なし

帝は泣く／＼住み馴れた宮闕を出て、徒歩のまゝで洛水を指して落ちのびたが、途中銅駝街にさし掛つた。これは漢の時代に銅の駱駝を鑄て、宮城の南隅へ立てたから起つた名稱で、

金馬門外衆賢を集め

銅駝陌上少年を集む

といふ句は此處を詠じたものである。丁度そのとき一群の盜賊がこの街上に現はれ、帝の所持品を奪つて着のみ着のまゝにしてしまつたので、帝はいづこへ落ちのびるわけにも行かず、再び宮中に歸つたが、珍器什寶などを持ち去つた後なので、殿内は荒涼として

追剽に逢つた皇帝



恰も空屋のやうであつた。そのとき河南の新安にゐた魏浚といふものが、土地の民家から僅かばかりの米麥を徵發して帝の供御に献上したので、叡威斜ならず、直ちに浚を揚威將軍平陽の太守に任じた。

漢帝劉聰は更に大軍を催し、一舉にして晋を屠らんと欲し、前軍大將軍呼延晏に二萬七千の兵を授けて、驀直に洛陽を攻めさせた。そして晏が河南まで進攻する間に、晋の軍は十二回も敗北を續け、三萬餘人の兵を失つて殆ど抵抗力を失つた所に、更に劉聰の弟の劉曜並に王彌、石勒等の新銳が一齊に各道から洛陽を指して殺到したので、晋の軍勢は一溜りもなく潰滅してしまつた。

かくて五月晦日には漢の軍は東陽門及び諸官衙を焼き拂ひ六月十一日にはその將王彌及び延晏等の兵が宮中に亂入し、遂に帝を執へて端に幽閉した。之と同時に彼等は晋の皇太子詮、吳王晏、龍陵王楸以下、大臣大官士民子女を虐殺すること三萬餘人に及び、又皇室の陵墓を發掘し、宮室、諸廟、諸官衙を一炬に付し、懷帝の皇后羊氏を曜の陣營に奪ひ去り、更に帝をは平陽に遷した。かくて司馬炎以來帝都として榮えた洛陽は、僅に十一日の間に一望荒涼たる焦土と化してしまつた。

晋末宮中の  
大虐殺

帝を廢して  
奴隸視す

永嘉七年春正月、漢帝劉聰は光極殿に御して新年の大饗宴を開いた。殿内の裝飾は善美を盡し、左右には四方攻伐の諸勇將や、大臣巨官等が整然として衣冠を正し、正面の一段高い帝座には、劉聰が大漢皇帝の威風凜々として着座した。然るに聰はこの晴れの席上に於て、懷帝に賤民の着る青衣を着せ、酒の酌をさせて辱しめたのである。そのとき席上に陪してゐた庾珉や王雋などの晋の舊臣は、懷帝の變り果てた姿を見て悲愁の情に堪へず、思はずその場に泣き伏してしまつた。すると聰は、

「芽出度の新年の賀宴に慟哭するとは不都合な奴である」と云つて、珉、雋等十餘人の頭を刎ね、次いで二月になつて鳩毒を飲ませて帝を殺害してしまつた。帝時に年三十であつた。

之より先き懷帝が漢の虜となつたときに、晋の王族や重臣どもは吳王晏の子で、武帝の孫に當る秦王業を擁立して皇太子としたが、その後懷帝の殺害せらるゝや、長安に於て業を帝位に即け、瑯琊王睿が左丞相となり、索綝が太尉となり、又麴允が大將軍となつて之を輔任した。それが即ち愍帝である。

かうして愍帝が位に即いたことは即いたが、新都の長安は今まで戦亂が續いて、店舗



や邸宅はいづれも兵火に罹つたので、残つた戸数は僅かに百戸に過ぎず、滿城の光景は慘として、たゞ荆棘のみが茫々たる有様であつた。それに朝廷の財政窮乏の極に達したので、政府の役人どもの正服を作ること出来ず、又宮中には乗るべき車駕が僅かに四臺あつたきりであつた。加之當時騒亂が相次いだため、人民は疲弊して生活にも困るやうになつたので、到る處盜賊が横行し、遂には王室の陵墓を發掘して珍寶を奪ふものさへあつた。

かくて晋の帝室は長安に據つて僅かに殘喘を保つてゐたが、その間に漢は屢々兵を出して長安を攻めた。そして愍帝が即位してから僅かに四年半を経た建興四年十一月には劉聰が自ら精兵を率ゐて長安を襲ひ、先づ攻めて外城を陥れたので、麴允や索綝等は力盡きて小城に退くことゝなつた。そのため城の内外の連絡が全く斷ゆるやうになつたので、城中は飢餓に瀕し、一斗の米價が金二兩に騰貴するやうになり、さては人々が争つて人肉を啖ひ、遂にはそれも盡きて死亡するものが多かつた。かう云ふ有様であつたら、今は帝に薦める供御もなくなつたので、麴允は諸所の倉庫を漁つて僅かに食料の殘物を掻き集め、それを粥にして帝の供御とした。併し後には之れすらも盡きてしまつた

ので、帝も今は辛抱がし切れなくなつて、遂に降表を作つて劉聰に送り、羊車に乗り、肉袒輿櫬して降参した。かくて帝は遂に平陽へと送られてしまつた。

次いで索綝は曜のために誅戮され、御史中丞吉朗は晋の末路を悲しんで自殺し、又麴允は執へられて投獄されたが、遂に牢中で自殺してしまつた。

降参後の愍帝の境遇は甚だ憐むべきものであつた。同年十一月、漢帝劉聰は一日遊獵に出たが、その際愍帝に車騎將軍の代りをさせ、槍を持つて行列の先驅をさせた。群集が之を見ると、

『長安の天子が槍持になつた』と云つて何れも涙を流した。次いで翌月に宮中に於て大宴會のあつたとき、聰は嘗て懷帝に試みたと同様に、愍帝に青衣を着せ、酒の酌をさせたり、杯を洗はせたりしたが、後には之をも毒殺してしまつた。かくて西晋は賈皇后の專權と八王の亂とに依りて國勢が萎靡した所に、五胡の寇を蒙り、遂に胡人のために滅してしまつた。

三



愍帝が漢のために殺害されて西晋が滅亡するや、丞相瑯琊王睿が絶統の後を受け、都を揚子江畔の建業に奠めて帝位に即いた。これが東晋の始祖元帝である。帝は西晋の惠帝や懷帝とは再從弟に當るので、司馬懿の血脈を傳へたものであつた。かくて東晋は從來の帝都洛陽よりも遙に南方に移り、その領土は非常に縮少したのであるが、揚子江の天險を隔て、一隅に偏在してゐただけに、強力なる胡狄の襲撃を免れることが出来た。尤も時には彼等の攻撃を受けたこともあつたが、晋軍がよく之を拒いだのみならず、屢々之を破つたので、東晋の國家は西晋時代のやうに支離滅裂に陥るやうなことはなかつた。それに元帝以來、王導、陶侃、溫嶠、謝安、謝玄等の忠臣がゐて能く君主を輔佐したので、國內は寧ろ太平を樂しんだのであつた。

かくて東晋は第九代目の孝武帝の時代までは割合に平穩無事であつたが、安帝の時代に至つて劉裕が勢力を得、遂に恭帝に至つてその帝位を篡奪したのである。

安帝は名を德宗といつたが、殆ど白痴同様で、三十になつても口が利けねばかりでなく、飲食から起居に至るまで、凡て自分で始末が出来ぬ有様であつた。それで會稽王の道子といふものが太傅となつて帝を輔けることゝなつたが、その後諸政を擧げてその子

東晋の忠良輩出

劉裕功を立つる類々

の元顯に委せることゝなつた。依つて元顯は朝に立つて政を専らにし、その施政が當を得なかつたので、江東の地が騒然として不穩の狀を呈するやうになつた。そのとき孫恩といふものが民心の動搖に附け込んで、海島から出て叛亂を起したが、劉裕が之を伐つて平定してしまつた。その後南郡公の桓玄が兵を起して建業に入り、太傅道子を殺し、自ら相國となり、次いで楚王に封ぜられ、九錫を賜はつたが、のち帝に迫りてその位を禪らしめた。依つて劉裕は京口に於て兵を起して玄を討伐し、遂に之を殺して安帝を復位せしむるに至つた。

然るに義熙六年に至り盧循といふものが、劉裕の北征してゐる暇に乗じ、番禺より出で、建業を襲つたが、又々裕のために破られて戦死してしまつた。是に於て劉裕の勢威は隆々として揚り、一躍して國家の元勳となつた。

劉裕は彭城の人で、漢代の楚の元王交の十九世の孫だと云ひ傳へられてゐる。裕は幼にして母に別れたが、父がそれを養育することが出来なかつたので、之を棄てやうと思つたことさへあつた。そのとき從母が可愛さうに思ひ、裕を救つて京口で養育したのであつた。彼は夙に大志を抱いてゐたが、北伐の功を立て、篡奪を行はんと欲し、南燕を

父に棄てられんとした子



伐つて之を滅し、更に西の方後秦を伐ち、遂に秦王泓わうをして國を擧げて晋に降らしむるに至つた。依つて裕は外征の功を擧げ、勢威堂々として建業に凱旋したので、帝は裕を相國宋公に封じ、九錫を加へて之を禮遇することゝなつた。裕は嘗て未來記を見た所が『昌明の後尙は二帝あり』といふ句があつた。昌明といふのは先帝孝武帝の字であるから、安帝とその次帝とを除けば、自分が帝位に即くことが出来ると思つてゐた。で、中書侍郎王韶わうきやうし之といふものに旨を含めて、遂に安帝を毒殺してしまつた。

かくて裕は先帝の遺詔と稱して、安帝の弟の瑯琊王德文を帝位につけた。恭帝即ちこれである。次いで元熙二年六月に至り、裕は腹心の中書令傅亮を遣はして、恭帝に對し帝位を劉裕に禪るべきことを勧めしめた。すると帝は

『晋の天下は既に先年桓玄が謀反をしたときに滅びたのも同様であつたが、劉公の力で二十年も滅亡するのが延びたのである。で、朕は悦んで劉公に位を讓るであらう』と云つて、一も二もなく承諾し、即座に退位の詔を書いて渡し、次いで瑯琊王の邸宅へ引き取つた。一國の天子の讓位としては餘りに無雜作なものであつた。

その後三日にして劉裕は即位の大禮を行つた。これが宋の武帝である。晋の廢帝はこ

さつさ退  
位する

の日零陵王に封ぜられて零陵に遷されたが、その後裕は之を殺さうと思ひ、前の瑯琊の郎中令張偉といふものに毒酒を渡して、廢帝を毒殺するやうにと命令した。すると偉は『臣下の身分で主君を毒殺して生きてゐるくらゐならば、寧ろ死んだ方がましだ』といつて、自分がその毒酒を飲んで自殺してしまつた。

所が廢帝夫妻はこの事を聞いて大いに恐れ、その後は寢臺の下で自ら炊事をして飲食し決して一室より外に出なかつた。それで裕も流石に廢帝を殺す好機會がなかつたが、遂に一計を案出し、廢帝の妃の弟を遣はして妃に面會させた。すると妃は肉身の弟をまさか敵の廻しものとは夢にも思はなかつたので、別室に出で彼に面會した。監視の兵どもはその機に乗じて帝の室内へ亂入し、帝を執へて毒藥を面前に突きつけた。帝は之を見ると、

『俺は佛教徒であるが、佛教では自殺したものは再び人間に生れ變らないと云うてゐるから、俺はどうしても之を飲まぬ』といつて、それを卻けたので、兵卒どもは其處にあつた衣服を帝の頭に被せて縊り殺してしまつた。かくて東晋は無慘なる恭帝の死を最後として、恰も朽木の如く脆くも倒れてしまつたのである。

廢帝自殺を  
肯んせず



## 八代の中五帝は廢殺

一

東晋の後を承けた劉宋は、その始祖武帝(劉裕)の在位三年の間だけは兎に角少康を得た。然し二代目の少帝以後は、内は君主の廢立が頻繁に行はれ、外は敵國の侵攻を蒙り、爲に天下騷然として殆ど寧日がなかつた。一體宋には八代の天子があつたが、そのうち満足に帝位を保つたものは始祖武帝と四代目の孝武帝と六代目の明帝の三人だけである。その他の天子はいづれも或は位を篡奪せられ、或は弑殺せらるゝの悲運に會したのである。かく國內では宗族どもが互に帝位を争つて、國祚が常に動搖してゐたので、外に對して國威を宣揚することが出来なかつたばかりでなく、却つて外敵のために多くの領土を蠶食された。

即ち少帝のときには、宋は北魏の明帝のために青、兗、河南の諸郡を攻略せられ、文帝の時には魏の太武帝の馬蹄に蹂躪せられ、明帝の時には又々魏の攻撃を受けて淮北、淮

八帝の内  
で全うし  
たのは三  
人



西の地を失つたのである。かくして宋は少帝以來國勢萎靡として振はなかつたが、蕭道成の出づるに及んで、宋の國祚は遂に彼の手中に歸してしまつた。

漢の蕭何の  
後胤と稱す

蕭道成は蘭陵の人で、漢の相國蕭何の後裔だと云ひ傳へられてゐる。性質は沈着で度量が廣かつた上に博學にして文を能くした。道成が兵に將となつて頭角を露はすやうになつたのは、宋の明帝の時からであつた。その後泰始二年に太子詹事の孔覲が晋の安王子助の自立を助けて兵を擧げた時、道成は之を討平して功を立て、次いで翌年には淮陰を鎮むることとなつた。道成はこの間に大いに豪傑の士を招いたので、垣崇祖や垣榮祖の如き英傑の士が四方より集まり、又劉僧副の如きは二千人の衆を率ゐてその配下に從つた。

日月に似た  
赤痣

道成は宋に仕へて軍中にあることが久しかつたが、彼の肩には赤い痣があつて日月の狀を爲してゐたので、將來彼が必ず高貴の位に上るであらうと云ふものがあつた。朝廷では之を聞くと深く道成を疑ひ、彼を黃門侍郎と爲し、帝都に呼び入れて之を殺害する計略を廻らしたが、彼は之を察して遂に入京しなかつた。

秦豫元年四月に至り、明帝の病が篤くなつたとき、帝は桂陽王休範を以て司空と爲

皇胤ならぬ  
新帝

し、褚淵を以て護軍將軍に任じ、協力して太子昱を輔けしめた。そして道成は褚淵に薦められて右衛將軍となり、始めて國家の大政に參與するやうになつた。次いで明帝が崩してその子昱が僅かに十歳にして立つた。これが後廢帝といふのである。この幼帝は元來明帝の子ではなかつた。嘗て明帝はその嬖人の李道兒といふものに宮女の陳氏を賜つたが、後帝は再び陳氏を召し還して寵幸した。併しそのときには陳氏は既に妊娠してゐたので、その生んだ昱は實は李道兒の子であつた。

この後廢帝の元徽二年五月に至り江州の刺史休範が兵を潯陽に擧げて建康を攻めんとした。依つて道成は新亭に於て休範の軍を破つて之を殺戮し、功に依つて中領軍に任ぜられた。

廢帝昱は兇暴にして殺を好み、常に鉞椎鑿鑿の類を左右より離さず、一日殺さざれば慘然として樂しまずといふ程であつた。嘗て昱は突然領軍府へ行つたことがあつた。そのときは丁度盛夏の候であつたので、蕭道成は天子の來たのも知らずに、素裸になり、好い氣持になつて午睡してゐた。昱は之を見ると道成を起立させ、その腹に的を書かせて將に之を射ようとした。で、道成は驚いて、

裸腹に的を  
描いて射る

八代の中五帝は廢殺



「老臣は何も犯した罪がありませんから、どうかお許しのほどを願ひます」と云つた。そのとき昱の侍臣の王天恩といふものが。

「蕭領軍の腹は見事に大きいから、射撃には持つてこいですが、若しこの矢が命中して領軍が死んでしまへば、立派な射撃がなくなつてしまひます。で、どうか飽箭（骨で作つた圓鏑矢）でお射りなさい」と諫めた。で、昱は鏑矢を取つて道成の臍のあたりを射、弓を投じて呵々として大笑した。

道成はこの事があつてから、深く昱の暴虐を憂懼すると同時に、その残忍な行爲を怒り、遂に袁粲及び褚淵に昱の廢立を相談するに至つた。そのとき袁粲は廢立に反對したが褚淵は之に賛成した。依つて道成は愈々昱を廢することに決心し、一日昱が新安寺に行つて泥酔して歸り、仁壽殿で熟睡してゐた所を、楊玉夫及び楊萬年といふものをして弑殺せしめ、明帝の子の安成王準を立て、帝位を嗣がしめた。順帝がこれである。

準は明帝の泰始七年に安成王に封ぜられたが、容姿端麗、眉目恰も畫けるが如く、見るもの以て神人と爲した。次いで廢帝昱の即位の年に揚州刺史の官を賜はり、翌年更に揚南豫二州の軍事都督を加授せられ、廢帝の四年には驍騎將軍となつた。しかも準はそ

醉中の天子  
を殺す

のとき僅かに十一歳の少年であつた。是に於て道成は幼君を擁して司空となり、尙書の事を録し、驍騎大將軍を兼ねて東府を鎮めた。

二

蕭道成は既に昱を廢して自ら專權を振つたので、荆襄の都督沈攸之は太后の旨を受け、兵を擧げて道成を討たんとしたが、夏口に於て柳世隆のために破られて自殺してしまつた。次いで中書令袁粲は尙書令劉秉と共に道成を伐たんと謀つたが、褚淵がその企を道成に告げたので、道成は之を攻めて粲父子及び秉を石頭城に殺した。粲は戰敗れたときに、子の最を顧みて、

「俺は兵を擧げたからと云つて、一旦傾きかけた宋の國祚を救ふことの出来ないのは百も承知してゐるが、たゞ大義名分の上から勝敗を度外において今度の事を企てたのである」と云つた。既にして道成の軍將の戴僧靜といふものが城中に入り、粲を殺さんとして迫つたときに、子の最が身を以て粲を助け、僧靜のために斬殺されてしまつた。そのとき粲は最に向つて、

敗るるを知  
起つて義軍を  
起す



忠を失はず  
孝を失はず

八代の中五帝は廢殺

一六六

『俺は今まで忠臣たるを失はなかつたが、お前は又孝子たるを失はなかつた』と云つて父子俱に死んだ。

これから以後は最早蕭道成に向つて一人も反抗するものがなくなつたので、彼の命令は一も行はれざる所なく、昇明三年三月には自ら相國及び齊公となつて九錫を加へた。次いで翌日、道成は帝に迫つて禪位の詔勅を書かせようとした。帝はどうしてもそれを肯かないで、さては佛蓋の下に匿かれて出て來なかつた。そのとき道成の部下の王敬則は、兵を率ゐて帝を迎へにきたので、太后は大いに心配して、隈なく殿中を探させ、漸く帝を見つけ出して、敬則の前に連れてきた。帝は敬則に向つて、

『お前は私を殺す氣なのか』と訊いた。すると敬則は

『いや、たゞ陛下を別の宮殿へお移しするだけです。陛下の御先祖が司馬氏から國をお受けになつた時と同じことなのです』と答へた。帝はこれを聞くと悲歎の涙に咽んで、

『これから生れ變つてくる時には、二度と天子の家には生れたくない』と云つた。この日は宋の天子が皇帝の印綬を解いて、新に齊の帝位に即いた道成に渡す儀式があるので、朝廷の百僚は悉く參内した。で、道成は傳詔の者を遣はし、綬を預る當番の

陛下の祖先  
と同じ事

侍中謝朓に綬を持つてくるやうにと催促させると、謝は故意と、呆氣けて

『一體今日は朝廷に何の大事があるのか』と訊いた。

『今日は陛下が綬を解いて齊の皇帝にお渡しになる日です』

『齊には齊の侍中がある筈だ。俺は宋の侍中だから、齊のことなどには關係がない』と云ひ放つて、如何にも面倒臭さうに、枕を取り出し、ごろりと横臥してしまつた。それで傳詔は大層心配して、

『若し貴方がそんな事をなさると大變なことが起りますから、それでは病氣引籠りと云ふことにして下さい』と云ふと、飽くまで忠義剛直な謝は落着き拂つて、

『俺は病氣でも何んでもないのに、そんな事が云へるものか』と朝服を着て出て行つてしまつた。

かうして謝朓が頑張つた爲に、大切な讓位の儀式に差支が生じたので、百官は大いに狼狽して、取敢へず王儉を俄か仕立の侍中に任じ、漸く綬を解かせて讓位の儀式を行つた。儀畢つて順帝が宮城を出たとき、光祿大夫の王琨といふものが、車に取りついて、

齊には齊の  
吏僚あらん

八代の中五帝は廢殺

一六七



壽長うして  
此悲に會す

八代の中五帝は廢殺

一六八

「人は壽長うして歡びを爲すと申しますが、老臣は壽長うしてこの悲みに會ふのが殘念でございます」と云つて慟哭したので、百官はいづれも嗚咽せざるものがなかつた。のち順帝は汝陰王に封ぜられて丹陽宮に幽閉されたが、次いで道成のために殺害されてしまつた。かくて宋は劉裕以來八世五十九年にして亡びたのである。

### 南齊八主二十三年

一

南齊は興廢頻々たる南北朝に於ても蓋し最も微弱な國の一つであつた。それは同國が僅かに二十三年間に八主を更へて滅びたといふ事實に依つても大抵想察されるのである。

宗族に壓倒  
さる

この齊の國では、殆ど西晋以來の流弊と云つてもよいやうに、宗族の權勢が徒らに強かつたので、君權は常に之がために壓迫されてゐた。三代目の廢帝鬱林王昭業は即位の後僅かに一年にして、西昌侯鸞らんのために弑せられ、次いで海陵王昭文がその後を嗣いで位に即くことゝなつた。然るに鸞は帝が即位してからまだ四ヶ月にもならぬうちに、再び之を廢して自ら帝位に上つた。これが即ち明帝である。その在位四年にして永泰元年四月に明帝は歿し、太子の寶卷が位を嗣いだ。これを廢帝東昏侯といふのである。寶卷は太子であつたときから學問が嫌ひで、嬉戯にのみ耽つてゐたが、即位の後には大臣等

南齊八主二十三年

一六九



に面接して國政を見ると云ふこともなく、たゞ宦官や左右の嬖人のみを近づけ、兎角に放埒のことのみ多かつた。

菖蒲の花を  
呑んで孕む

このとき雍州の刺史に蕭衍しょうえんといふものがあつた。同じく漢の相國蕭何の後裔で、齊の遠縁のものであつた。嘗てその母の張氏が、菖蒲に奇麗な花が咲いたのを見たことがあつた、その時傍にゐた人はそれを見つかなかつたので、張氏はその花を取つて嚙み下してしまつた。すると張氏はこの時から懐胎して衍を生んだと云はれてゐる。衍は英達にして孝慈恭儉、しかも博學能文で夙に大志があつた。

當時齊では揚州の刺史始安王遙光、尙書徐孝嗣、右僕射江祐、右將軍蕭坦之、侍中江祀、衛尉劉暄りゅうけんの六人が朝に立つて政を執つてゐた。蕭衍は之を見て、一日參軍の張宏策に向つて、

天下の驍勇  
を募る

『六人のものが朝にあつて政治を行ふ時には、必ずその間に勢力争ひなどがあつて、齊の國が早晚亂れるに違ひない。で、我々は今から之れが用意をしておかなければならぬ』と云つて軍備を整へ、盛んに四方より驍勇の士を招いたので、之に應ずるものが萬を以て數ふるほどであつた。その上行は部下に命じ、材木を伐り出して檀溪といふ谷間

に沈めおき、又茅を山のやうに夥しく積んで、戰爭の準備に怠りなかつた。

讒言を信じ  
元老宿將を  
殺し盡す

然るに朝廷に於ては天子たる寶卷の失行がますます甚だしくなつたので、遂に右僕射の江祐が發議して、寶卷を廢して江夏王の寶元を立てようとした。所が衛尉の劉暄は之に反對した。と云ふのは劉暄は、嘗て寶元の下に在つて郢州えいしゅうを治めたことがあつたが、そのとき暄の遣り方が餘りに過酷であつたため、寶元の信用をすつかり失つてゐたからであつた。こんな事情があつたため、祐は寶元の代りに更に始安王遙光を立てやうとしたが、暄はこれにも反對したので、廢立の議は一時行惱みの状態となつた。然るに遙光は劉暄が自分の帝位に即くのに反對したと云ふことを聞いて大いに怒り、密かに侍臣を遣はして暄を暗殺させようとした。暄は大いに恐れ、遂に江祐に廢立の異圖のあるのを帝に發いたので、寶卷は大いに怒つて祐を誅戮し、次いで劉暄を遣はして遙光を討平げさせた。

その後寶卷は左右の奸人の讒言を信じて、僕射蕭坦之、領軍劉暄、司空徐孝嗣、將軍沈文季等の大官宿將等を誅戮したので、人々はいづれもその殘虐に驚かざるはなかつた。



二

是に於て太尉顯達は齊主寶卷の罪條を數へ、兵を潯陽じんやうに擧げて帝都建康を襲うた。然し戰利なく遂に禁軍のために敗られた戰死してしまつた。その後平西將軍の崔慧景さいけいけいは命を受けて壽陽の叛兵を討伐に向つたが、中途にして志を變じ、叛旗を翻して却つて建康に迫つた。このとき豫州の刺史蕭懿せういが兵に將として建康の近くの小峴しょうけんに在つたから、寶卷は急に使を遣はして懿に助を求めた。依つて懿は兵を率ゐて慧景の軍を破り、功に依つて尙書令に任ぜられ、その弟の暢は衛尉に任ぜられた。

弟の忠言を容れずして毒殺さる

そのとき蕭懿の弟の蕭衍せうえんは密かに使者を懿の許に遣はして、寶卷を廢すべきことを勧め、若し其の事を斷行することが出来なければ、速かに歷陽に歸るがよいと云はせた。けれども篤實な懿は之に従はなかつたので、忽ち衍の云つたやうに齊主寶卷のために毒殺されてしまつた。懿は死ぬるときに、『弟の衍は今雍州にゐるが、これは中々のしつかり者だから、將來朝廷に仇をするかも知れない』と云つた。

戰備忽ちに成る

蕭衍は兄の懿が殺されたと云ふ報知を聞くと、その夜參軍の張宏策を召して擧兵のこゝとを決し、翌日大將の旗を牙城に立て、衆を集めた所が、忽ちの間に甲士萬餘人を得、尙ほ馬千餘匹、戰船三千餘艘が集つた。依つて豫て檀溪に用意しておいた竹木を以て戰船を裝ひ、茅茨を以て船の屋根を葺きなどして、戰備が瞬くうちに整つた。

かくて衍は郢城を抜き、潯陽を略し、中興元年十月には精兵を以て建康を包圍した。このとき城中には尙ほ七萬人の軍兵がゐて、王珍國が之を指揮し、袁州の刺史張稷ちやうしやくが之を輔佐してゐた。然るに寶卷は徒らに金錢を惜んで、功勞ある將士に對して毫も賞賜を與へなかつたので、軍中には不平の聲が起り、士卒は遂に鬪志を缺くに至つた。のみならず王珍國及び張稷は奸人等の讒言に依つて自分等の身の上が危くなつたので、遂に寶卷を殺戮せんと圖り、一夜宮人の内應に依つて雲龍門より宮中に闖入した。この時寶卷は殿上に笙を吹いて燕遊してゐたが、兵卒どもが亂入して之を斬り殺し、黃袖を以て寶卷の首を包み、それを博士范雲をして蕭衍の陣中に送らしめた。かくて寶卷を追廢して東昏侯とし、中興二年一月には蕭衍は自ら相國となり、梁公に封じ、九錫を加へ、次いで自ら梁王となつた。



自立の帝忽ち讓位

之より先き永元二年十一月に蕭衍が兵を擧げたとき、之と同時に南康王寶融も亦兵を江陵に起し、翌中興元年三月には自ら立つて皇帝となつてゐた。これが即ち和帝である。東昏弒せられ衍の勢力動かすべからずと見ると、和帝は建康にも入らず、姑孰に至つて詔を下し、位を蕭衍に讓り、自分は別宮に遷つて、巴陵王に封せられた。依つて衍は國號を改めて梁と名づけ、自らその始祖となつた。佛教尊信者としても有名な梁の武帝がこれである。

武帝は南海郡を巴陵國として齊の廢帝を此處に置き、以て齊の祭祀を繼がせようとしたが、謀臣の沈約といふものが、

「徒らに虚榮を慕つて、その爲に實禍を受けるやうな事をなすつてはいけません」と諫めたので、武帝は之に従ひ、鄭伯禽といふものを姑孰に遣はして廢帝の殺害を命じた。伯禽は姑孰に行つて廢帝に逢ひ、黙つて帝に刃物を進めた。すると廢帝はその意を覺つて、

「若し俺を殺すのならば刃物を用ひる必要はよい。寧ろ旨い酒を十分に飲ませてくれ、ばそれで澤山だ」と云つて、酒を飲んで沈酔した所を、伯禽が押し潰ぶして殺して了つ

刃を用ひず酒に死なん

た。

その後武帝は齊の明帝の長子蕭寶義を以て巴陵王と爲し、齊の祭祀を奉ぜしめたが、寶義は生れつき癡疾で、ものを云ふことも出来ない不具者だったので、一族のものが悉く殺されたにも拘らず、彼れ一人のみは僅にその價無き命を永らへたのであつた。



## 雲水出身の明の太祖

一

不世出の英雄、元の世祖忽必烈クハフレイが逝いてから、三十八年にして惠宗順帝が位に即いた。この時代には世祖以來元室の信仰を得た喇嘛教はますますその勢力を宮中に扶植するやうになつてゐた。そして帝は深く喇嘛教を信じた餘り、逸樂荒淫に耽り、身は常に深宮に在りて喇嘛僧と美女とに圍繞せられ、絶えて廊廟に出でて萬機を躬らすが如きことはなかつた。實に元を滅したものは喇嘛教であつた。今彼等が如何に元の朝廷から優遇されて跋扈したか、茲にその一例を擧げて見やう。

毎年元の宮中では二月十五日になると、大明殿で白傘蓋佛事を舉行するのが例であつた。白傘蓋佛事といふのは、大元一統の祖忽必烈が、至元七年に、その師、帕克斯巴の進言を用ひ、大明殿に祭壇を設け、その上に白緞子金泥で梵字を書いた一張りの白傘蓋を奉安し、そこで鎮伏邪魔、護安國利の祈禱を行はせたのが濫觴であつた。然るにその

喇嘛教に溺  
れた元



後この儀式は次第に大袈裟となり、その上越めて奢侈淫靡なものと化したのである。

華美を極めた佛事

この儀式は殆ど三日の間に亘つて行はれるのであるが、その準備には朝廷の大官以下百僚が擧つて關係するもので、蜀の關羽の神轎を始めとし、三百六十羅漢の壇などを築き、それに幢幡寶蓋などを建て列ねて美々しく裝飾するのであつた。そして幾組かの大音楽隊は、いづれも青春の男女を以て編成せられ、彼等は競つて異種族の濃艶な扮装を凝らし、嬉々として歌ひ且つ舞ふのであつた。この音楽隊の人員は殆ど一萬人を越え、彼等の着る鎧甲や美衣は悉く政府から支給されるもので、この華美極まる一隊の行列は蜿蜒として數里の長きに及んだと云ふことである。そして二月十四日には皇太子は鎮國寺に行啓になり、同寺の四門に設けたそれ／＼の歌舞遊伎などを見るのであつた。又翌十五日には大明殿に傘蓋を奉安して、一種不可思議な儀式が行はれ、次いで慶壽寺に於て梵僧どもの盛大な饗宴がある。そして天子はこの日皇后、皇妃、皇女等を率ゐて玉徳門外に出で、白傘蓋を拜し、樂隊の行列や民衆の雜沓などを見て興するのであつた。さうして宮城は三日の間完全に梵僧どもの祈禱に依つて占領されるのであつた。

帝都は僧徒に領占さる

然るに順帝の嬖臣たる伊納克圖魯特穆爾の徒が、西蕃の妖僧策琳瑟を薦めてから、帝

の淫蕩放縱の行爲は一層その度を増すに至つた。

策琳瑟は帝に謁したとき、先づ巧言を以て、

『陛下は萬乗の尊い位に居られ、四海の富を持つてをられますが、併し生命はたゞ一代限りで、たとひ天子であつても萬年の壽を保たるゝことは出来ませぬ。で、陛下はこの世にをられる間に、出来るだけ愉快な日を送られねばなりません。それには秘密大喜樂禪定の法をお受けになるのが宜しうございます』と進言した。順帝は之を嘉納し、策琳瑟を師としてその秘法を受けることゝなつた。

秘密大喜樂禪定

この秘法は又『延徹爾』とも云つて、士民の階級を問はず、苟くも美色ある良家の女子と見れば、之を宮中の一室に連れてきて、種々の奇怪なることを行ふ淫靡不法の儀式であつた。その他順帝は己が淫慾を充たすの手段として、更に幾多の奇々怪々な儀式なるものをも行つた。是に至つて宮中の風紀は極度に紊亂し、淫蕩の狀は轉た人をして撃墜せしむるものがあつた。



紙幣濫發を  
民力消耗

かくて喇嘛僧は朝廷の優遇に依りて絶大なる勢力を有するやうになつたので、權臣どもは常に彼等の援助内應に依つて自己の勢力を維持し、又彼等と結托して屢々惡政暴虐を遂行した。加ふるに當時紙幣濫發の結果、物價騰貴して國用缺乏し、賦課が徒らに過重にして、民力は極度に消耗したので、從來太祖成吉思汗や世祖忽必烈の武力暴威に依つて屈服し來つた漢人種の激昂は、今やその絶頂に達し、群雄は急ち四方に起つて元室に反するに至つた。

天下亂れて  
麻の如し

先づ台州黄巖の人方國珍は至正八年浙江に兵を擧げ、蕪州羅田の人徐壽輝は同十一年周子旺や鄒普勝に推されて湖北、江西を略し、遂に帝と稱して國號を天完と名づけ、同十三年張士誠は高郵に據りて周の誠王と號した。中にも定遠の土豪郭子興は十二年に血氣の徒數千人を集め、自ら節制元帥と稱した。かくて天下は紛然として亂れて麻の如くになつた。そして十五年後に元を滅して明の太祖となつた朱元璋は、當時郭子興の一部將に過ぎなかつたのである。

朱元璋は字を國瑞といつて、鐘離の人であつた。朱世珍といふものゝ子で、兄弟が四人あつた。父は如何なる職業の人であつたか判らないが、兎に角彼の家は貧困であつた

生き残つた  
多幸の少年

らしい。然るに至元四年大饑饉があつた上に惡疫が流行して、一家のうち父母兄弟が全部死亡してしまつたので、後には元璋がたゞ一人生き残つたのである。けれども元璋は當時僅かに十七歳の少年であつたから、自分で生活して行くことは中々困難であつた。然るに當時元では喇嘛教が非常に榮えてゐたので、彼は露命を繋ぐためには寺院に入るのが最も便利であると考へ、遂に濠州の皇覺寺に行つて、その徒弟となつた。併し皇覺寺に於ける新戒沙彌の生活は僅かに數ヶ月の間だけで、その後彼は其處から飄然として諸國行脚に出たのであつた。

當時はまだ三到投子、九上洞上と云ふやうな唐宋以來の參學の風が行はれてゐて、一人前の僧侶となるには、多くの道場を遍歴して、善知識の喝棒に接しなければならなかつた。元璋は合肥地方から六安に行き、次いで汝州、潁州地方の僧堂を歴訪した。三衣一鉢で寺門を叩けば、五六日の間は且過寮に置いて食事をさせてくれるので、巡歴中にも格別飢ゆると云ふことはなかつた。かくて彼は雲水三年にして再び皇覺寺へ歸つてきた。

雲水三年に  
して歸る

その頃蘇州、安徽などの長江沿岸の地には叛徒が起つて、戰亂の絶え間がなく、それ



經文を刀槍  
に替へるに  
迷ふ

に盜賊などが頻々として横行してゐたが、中にも濠州地方はその中心地帯とも云ふべき處で、物情騷然として、住民はいづれも安き心がなかつた。殊に寺院は朝廷の優遇を受けてゐたと云ふので、痛く叛徒などの反感を買つてゐたから、皇覺寺の如きも屢々暴徒の脅迫を受けたのであつた。そのうちに濠州も修羅の巷と化し、やがて皇覺寺は兵火に罹つて、寺僧は四散してしまつたので、元璋も今は自己の將來について考へねばならなくなつた。所が彼は讀書が出来、判斷力がある上に、人品骨格が如何にも堂々としてゐたので、諸處の叛徒から屢々招かれたことがあつた。けれども彼は今までの木魚や黄卷の經文をば俄かに弓仗刀槍に持ち替へることに、少なからず迷はざるを得なかつた。彼はいろ／＼思ひわづらつた末、遂に賣卜者を訪ねて、身の振り方について占つてもらつた。彼は先づ兵亂の起つてゐる濠州から他の地方に避難するのが吉か凶かと占つてもらつたと、卦には不吉と出た。それなら皇覺寺の焼け跡へ歸つては何うかと占つてもらつたと、それも亦不吉と出た。で、若し叛徒の中に加はつたら何うかと占つてもらつたと、今度は始めて吉といふ卦が出た。けれども元璋は叛徒に加はるのが未だ好もしくなかつたと見えて、卜者に向つて、

賣卜者に與  
へられた運  
命であつた

『避難せよと云ふ卦が出てもらひたかつた』といふと、易者は自分の卜筮が疑はれたとでも思つたか、怫然として色を作して席を立つた。

是に於て元璋もいよ／＼意を決し、直ちに濠州の城へ行つて、郭子興に面會を求めると、間諜と間違へられ、高手小手に括り上げられて子興の前へと引き出された。子興は元璋の魁偉な容貌を見、且つその來意を聞くと、大いに悦んで之を配下に屬せしめたが、その後部將として兵を指揮せしめると、元璋の軍は到る處必ず捷たないと云ふことがなかつた。依つて爾來萎縮しがちであつた子興の軍は、元璋を得て頓に生氣を生じ、各地の群雄と相並んで堂々たる威風を示すに至つた。

そのとき子興には一人の養女があつた。それは彼の刎頸の友の馬公と云ふものゝ末の娘であつたが、馬公が死ぬるときに托されたものであつた。それで子興はこの養女を元璋に娶はして、己れの大業を輔佐せしめようとし、遂に二人を結婚せしめた。この馬氏の娘が後年孝慈高皇后となるのである。

時に元の大將賈魯といふものが、大軍を率ゐて濠城を圍んだので、子興の軍は甚だしく窮地に陥つたが、元璋が能く力戰して漸く元軍を潰亂せしむることが出来た。然るに

幸運な遺孤  
の娘



俄然群雄中に抽づ

至正十四年に元璋は徐達、湯和、費聚等と共に南の方定遠に入り、計を設けて驢牌寨を降し、民兵三千を麾下に附けたが、のち滁州を攻略し、郭子興を立て、滁州王とした。次いで元璋は横澗山に張知院の軍を撃破し、その部下三萬の兵を併するに及んで、彼は俄かに群雄中の大立物となつた。そしてこの時懷遠の人常遇春と定遠の人李善長の二人が來り投じたのであつたが、この二人を得たことは、元璋にとりては三萬の新軍を得たよりも遙かに有力であつた。その後郭子興が死んだので元璋は士民の心を得て之に代つて衆を領し、至正十七年には金陵を攻略して之に據つたのである。

三

排擠反目類にたり

この時に當り順帝は相變らず妖僧の言に蟲惑され、美女の色に沈溺し、さては政治を放擲して國家の危急を顧みなかつた。かくて君側には佞人妖僧が集つて、或は天子に亂行を勧め、或は關外の將にして勢力あるものを讒して誅戮せしめ、以て自分等の勢力を維持することにのみ努めてゐた。之がために叛軍を伐つて屢々大功を樹てた右丞相脱々の如きも哈麻の讒に遭つて雲南で殺されたが、次いで哈麻も亦柳思監に取つて代られる

に至つた。その他討伐軍の中では察罕帖木兒と孛羅帖木兒の兩頭目が互に反目し、又朝廷では皇太子の愛猷識里達臘と廷臣とが睨み合つてゐた。

かくて元の朝廷では國家存亡の秋にも拘はらず、大臣宿將等が權勢を獲得せんがために互に醜い争に耽つてゐる間に、渤海から長江に至る東南方一帶の地は既に叛徒の手に歸し、元の版圖は崩壊して又收拾すべからざるの狀態に陥つた。

併しながら之と同時に各地に起つた群雄の間にも亦互に攻争が行はれた。先づ劉通福は張士誠の軍のために殺され、天完の徐壽輝はその將陳友諒のために殺害された。然るに陳友諒は張士誠と謀りて朱元璋を伐たんとしたので、元璋は先づ兵を出して陳友諒を湖廣に攻めて之を殺し、以て湖南、湖北、江西を併せ、次いで張士誠を浙西に討ちて江淮の地を藏め、更に南下して方國珍を降して浙江を定め、次いで福建、兩廣の地を平げ、遂に吳王の位に即いた。是に於て元璋は鋒を轉じて北伐し、その將徐達及び常遇春等を遣はして山東、河南の諸地を攻略して、擴廓帖木兒、李思齋等の軍を撃破せしめ、至正二十八年八月遂に長驅して元の都城に迫つた。

依つて同月丙寅の日、元の順帝は清寧殿に御し、皇妃、皇太子、皇太子妃等を集め、

雲水出身の明の太祖

元璋先づ吳王となる



廟堂の大官を召して蒙塵の會議を開いた。けれども常に深宮にあつて淫蕩の生活に耽溺してゐた順帝には、國家の危急に當り、蹶然として自ら戰陣に臨み、兵馬を統べて社稷の頽運を挽回しようなど云ふ意氣は少しもなかつた。彼はたゞ一圖に祖先の郷國である蒙古へ逃げ込むことばかり考へてゐた。併し朝臣の中には多少の硬骨漢がゐて、主戰論を主張するものもあつた。左丞相の失列明や知樞密院事の黑廝や宦官の趙伯顔不花などは極力蒙塵の不可なることを力説したが、帝は之に耳を借さうともしなかつた。で、趙伯顔不花の如きは溜りかねて、

『元の天下は世祖皇帝の開かれたものですから、陛下は當然これを死守されねばならぬのです。然るに今帝都を棄て、北へお逃げになるとは何事でございますか。私たちは譜代の臣や將士と共に飽くまでも叛軍と戦ひますから、陛下はどうぞ禁軍をお指揮になつて、帝京の守備に當つて戴きたいのです。そして若し不幸にして敗北したならば、そのときには潔く城を枕にして死するばかりです』と云つて聲涙共に下つた。けれども彼の忠言は到底帝の心を動かすことが出来なかつた。

その夜帝は健徳門を出で、一路北を指して應昌に逃れたのであつた。是に於て朱元璋

關君には迷  
惑な主戰論

雲水から天  
子になるま  
で十五年

は兵を率ゐて都城に入り、翌年正月國號を明と改めて大明國皇帝の位に即き、次いで大いに功臣を封じ三十六人を公侯伯とし、又既に故人となつた功臣二十一人を祀つて功臣廟を建てたのである。そして元璋は此の年徐達、常遇春、李文忠等をして北伐して、上都に在つて僅かに殘喘を保つてゐた元を滅さしめ、遂に天下を統一した。かくて元璋が皇覺寺の僧侶より起り、一躍して明國の帝位に上るまで、僅かに十五年の短日月に過ぎなかつた。彼は陋巷の匹夫より起つて、遂に四百餘州を征服したのであつた。



## 朋黨と流賊とに自滅

一

明は太祖の歿後靖難の役があり、次いで英宗以來宦官が權力を壟斷し、世宗の時には興獻王の追崇に關して所謂大禮の諍論などがあり、この間に又瓦剌との交戦、交趾の叛亂蒙古の侵入、倭寇の掠略などがあつたが、それでも十三代目の穆宗までは國家は比較的安定の過程を取つた。然るに神宗の時代に至つて、内は東林黨と非東林黨の軋轢があつて延臣が和せず、加之軍役及び宮中の奢侈のために、國帑は窮乏を告げ、外に在りては朝鮮に於て日本と兵を交へて打撃を蒙つたのみならず、愛親覺羅氏の清が滿洲に起りて邊疆漸く急を告ぐるあり、爲に明はこの時代に於て國勢衰微の端を開いたのである。その後朋黨の争と財政の窮乏はますます甚だしく、光宗を経て熹宗の位に即くや、宦官魏忠賢が政柄を掌握して國政大いに紊れ、次いで思宗の時に至りて國民の疲弊はその極に達し、流賊が四方に起つたので、明は遂に滅亡の悲運に陥つたのである。

漸く衰微の  
端を開く



## 神宗初期の治蹟

神宗は穆宗の子で、その名を翊鉞よきけんといった。帝の位に即くや、首輔の張居正が政を執つて之を輔け、専ら主權を強め、賞罰を正しくし、一たび號令を下せば、萬里の外と雖も直ちに之を奉行せしむるやうにした。彼は又戸口を調査し、民田を測定し、内外の冗費を省き、天下の租税を免じて一意民政に努めたので、神宗の初期には治蹟大いに擧り、綱紀振肅して爲に海内は殷阜であつた。然るに萬曆十年六月に居正が死んでからは、帝は最早憚り怖るゝ老臣がなくなつたので、漸く奢侈遊惰に耽り、深宮に引き籠つて朝政を見るものが少なくなつた。依つて大理評事雒于仁らくうじんは上疏して

『私は大理評事の官を拜してから既に一年餘となりますが、陛下に朝見したことは僅かに三回だけに過ぎません。陛下には既に久しい間朝政を廢されてをりますが、これは陛下に酒、色、財、氣の病根があるからであります。酒を嗜めば腸を腐らし、色を好めば性を害ひ、財を貪れば志を喪ひ、氣を尙たよべば生をそぐと云ふことです。陛下には常に晝夜を分たず觴酌に耽つてをられると云ふことですが、これは陛下に酒を嗜む病があるからです。又陛下は十人の嬖人を寵し、又鄭妃に溺れてをられるが、これは色を好む病があるからです。又陛下は帑金を徴し、献金を強ひて奢侈の費用となさるさうですが、これは

## 手酷しい上表

財を貪る病があるからです。又陛下は動もすれば諫臣を憎み、罪なきものを罰せられませんが、これは氣を尙ぶ病があるからです。この四つの病が身心に絡はつてゐる限りは、とても藥石を以て之を治すことが出来ませぬ。陛下には一刻も早くこの病根を斷絶せられるやうにお願いいたします』と諫めた。すると帝は大いに怒り、遂に雒于仁の官を斥けて庶人と爲した。その後帝はますます荒怠自恣に流れ、宦官や嬖人の徒に圍繞されて絶えて朝政を見なかつたので、萬曆三十八年の四月に、給事中の周曰庠しゅういつしやうが上疏して、

『朝廷の役人どもは萬曆二十年以來絶えて聖容に接しませぬ。仄かに承る所に依れば、陛下には朝夕宦官や嬖倖の徒のみを召されてをられるさうですが、これでは到底人材の正邪や政治の得失などを斷ずることが出来ませぬ。陛下には何卒爾後廟堂に出御になつて、庶政を振刷し、百姓に親しまれんことを願ひます』と諫言したが、之に對しては帝より何の答もなかつた。實に神宗は二十餘年の間一度も大臣を接見せず、萬曆四十三年の挺擊の變に、始めて久しぶりに朝臣等に謁を賜つたと云ふことである。

神宗の時代に於て朝野の注目を惹いたのは立太子問題であつた。この事件から遂に東林黨及び非東林黨の二派を生じ、爾後二派の軋轢は常に已むことがなかつたのである。

## 政務を顧みざる二十年



一體帝には萬曆十年八月、恭妃王氏から生れた長子の常洛があつたが、同十四年二月には妃の鄭氏から次子の常洵が生れた。然るに帝は鄭氏を寵し、之を封じて皇貴妃としたりたからぬであるから、常にその子の常洵をば位に即けやうと考へてゐた。是に於て朝臣どもは深く之を憂ひ、給事中の姜應鱗の如きは皇長子常洛を太子とすべしと諫めたが、帝の怒に逢つて廣昌に貶せられ、次いで、給事中孟養浩、王德完等も亦帝を諫めたに、いづれもその忌憚に觸れて貶黜せらるゝに至つた。けれども帝は皇太后の運動や、朝臣等の大勢に餘儀なくされて、萬曆二十九年十月に、遂に皇長子常洛を立て、皇太子とした。時に太子年二十であつた。

之れより先き萬曆二十二年に吏部郎中の顧憲成は常洛を立て、太子と爲すべきことを主張し、且つその一味の王家屏を入閣せしめんとして帝の意に背き、籍を削られて郷里の無錫に歸つた。依つて彼は弟の允成と共に、宋の楊時が講學所であつた東林書院を再興し、同志高攀龍、錢一本等と共に諸士を集めて講學し、往々時事を諷議し、人物を裁量したので、海内風を望んで附隨し、廷臣も亦遙かに之に應和するものあり、爲に東林の名が大いに著はれた。その後丕揚、鄒元標、趙南星等も亦志を得ずして朝を去り、共に

學を講じ氣節を自負し、政府に反抗するに至り、世に之を東林黨を稱した。

當時朝廷に在りては非東林黨の大計京官祭酒湯賓尹が諭德顧天竣と共に朋徒を集め、時政に關與して頗る權力を振つた。これを宣崑黨と云つた。之と同時に言路にも齊楚浙の三黨があり、齊黨は元詩教、周永春等が屬し、楚黨には官應震、吳亮嗣等が籍を置き、浙黨には姚宇文、劉廷元等が牛耳を取り、中にも齊黨の勢が最も盛んであつた。そして是等の言路はいづれも宣崑黨の徒と相通じて東林黨に反對し、遂に大東、小東の名を作り、太子の常洛を目して大東と稱し、東林黨を小東と稱して排斥したので、反對黨に屬するものは如何に名望あるものでも、其の位に安んずることが出来なかつた。

然るに萬曆四十三年の五月に至り、張差といふものが棒を携へて太子の慈慶宮に至り門衛を撃傷して殿中に闖入したために執へられた。依つて巡視皇城御史の劉廷元が差を調べると、彼は口の中で何かモグム云つて、取りとめがなかつたので、刑部郎中の胡士相等は犯人を瘋癲であると云つて、この事件を輕々にすまさうとした。然るに東林黨に屬する提牢主事王之寀は、鄭貴妃がその子福王常洵を太子に立てんがために、差を使喚したものであることを偵知したので、人々は大いに激昂して痛く鄭貴妃とその弟の鄭



國泰を攻撃した。依つて鄭貴妃は太子に哀を乞ひ、何等之に關係なきことを辯解したので帝は群臣の怒を和げんと欲し、太子及び三皇孫を従へて慈寧殿に至り、群臣の前で太子の手を執つて、

帝と太子と  
群臣に釋明

「お前たちは朕が太子を廢して常洵を立てると疑つてゐるが、太子は常に朕に對して能く孝行をしてくれるので、朕は太子を深く愛してゐるのである。朕は太子を廢しようなどとは少しも思つてゐないのだから、之を誤解してはならぬ」と諭した。

すると太子も亦、

「今度のことは狂人のやつたことで、別に深い意味はないのだ。然るに卿等は色々のことを云ふので、その結果は父子の間を割くやうなことになるはせぬかと心配してゐる。どうか卿等は私を不孝の兒としないやうに注意してもらひたい」と辯明した。かくてこの事件は張差を磔殺して一時落着したが、併しこれより東林黨と反對黨との軋轢はますます激しくなつた。

かくて朝廷では廷臣が二派に分れて相争つてゐた間に、人民は開礦と重税とによりて疲弊し、國帑は甚だしく窮乏するに至つた。明は神宗の初年までは財政が比較的豊かで

大に礦山を  
開く

あつたが、その中年以後、帝の奢侈と、屢々行はれた征伐のために國用が缺乏し、その結果として礦山の採掘、重税の誅求となつたのである。礦坑の採掘を許したのは萬曆二十四年七月のことで、初は畿内に限つたが、後には河南、山西、南直、湖廣、浙江等及び、全國に亘つて殆ど採掘されない所がなかつた。

地方から礦脈があると云ふ報告が來ると、中官が現地に出張して之を調べるのであるが、彼等は礦脈が微細にして得る所がなければ、その地の住民に命じて之を償はせ、或は開礦の名義を以て人民の財を掠取し、若し少しでも彼等の意に逆ふときには、之を逮捕して毫も假借する所がなかつた。更に甚だしきは富豪巨族と見れば之を盜礦者と誣ひて金錢を強奪し、又良田美宅あればその下に礦脈があるといつて地下を發掘し、さては良民を苦しめ、婦女子を辱めたので、人民の苦痛は殆ど言語に絶したのである。

礦山も浪費  
を支えず

かくて朝廷では開礦に依つて國費を支辨せんとしたが、帝の奢侈は少しも已まず、或は巨費を抛つて大峪山たいよくざんに壽宮を立て、或は三殿を築造し、或は福王の結婚費として三十萬金を費し、更にその邸を洛陽に營んだときには、二十八萬金を費して殆ど常制に十倍するの金額を支出した。その他帝は諸皇子の結婚費用として太倉の銀二千四百萬兩を費

朋黨と流賊とに自滅



新に悪税を起す

すなどいろ／＼の贅澤なことを行つた結果、財政がますます窮乏したので、遂には重税を徴し、更に新税をも課するに至つた。天津の店舗税、廣洲の採珠税、兩淮の鹽税、浙江福建廣東の市舶税の如きは一部の地方に課された特殊の新税であつた。是に於てか國民の疲弊は極度に達し、爲に怨嗟の聲は天下に滿つるに至つた。

二

日本の征韓

前に述べたやうに、明は内に在りては天子の荒怠、廷臣の不和、財政の窮乏等に依りて苦しみつゝあつたが、外に於ては屢々敵國の侵襲を受けて困難を嘗めたのである。殊に明を脅したものは日本と滿洲であつた。當時日本は豊臣秀吉が國內を統一し、その餘威を以て地を朝鮮に借りて明を征せんとしたが、朝鮮が之を拒んだので、秀吉は萬曆二十年、即ち我が文祿元年に先づ朝鮮征伐の軍を起し、加藤清正、小西行長等を先鋒として朝鮮に侵入せしめた。依つて清正等は頻りに鮮軍を破り、忽ちにして京城平壤等の諸地を陥入れたので、朝鮮王宣祖は義州に奔つて救を明に求めた。依つて神宗は遼陽の總兵祖承訓に命じて朝鮮を救はしめたが、小西行長と平壤に戦つて大敗したので、明は更

太閤の死は明の厄免れ

に李如松を遣はして行長の軍を破らしめた。然るにその後李如松の軍は小早川隆景等と碧蹄館に戦つて大敗するに及び、神宗は遂に沈惟敬を遣はして行長について和を乞はしめたが、明の猾策に依つて議が破れたので、秀吉は翌年再び軍を朝鮮に出した。然るに間もなく秀吉が死するに及んで我が軍が本國に歸つたので、明は漸く窳窮の中より救はれたのである。

滿清の勃興

之と同時に注目すべきことは當時清が滿洲に勃興したることである。愛親覺羅氏は世々寧古塔の西南鄂多量にゐたが、明の英宗の頃に赫圖阿拉に移り、後百數十年を経て神宗の萬曆年間に至り、奴兒哈赤なるものが城を呼蘭哈達の南岡に築いて之に據つた。これが清の太祖である。かくて彼は萬曆二十六年に阿也苦の地を攻略し、次いで哈達、輝發を滅し、四十年に金州城を奪取し、翌年正月烏拉を討滅した。次いで萬曆四十四年正月太祖は自ら可汗の位に上り、國號を金と云ひ、翌年三月明に對して宣戰の牒文を發し、遂に兵を發して撫順、東州、瑪哈丹の三城を降した。是に於て清は遽然として明の一大敵國となつたのである。

萬曆四十八年七月神宗が歿したので、八月皇太子常洛が位について泰昌と改元した。



太子問題の  
その後

朋黨と流賊とに自滅

一九八

光宗が即ちこれである。然るに鄭貴妃は光宗が繼嗣問題の事について銜み、己れに害を加ふることを恐れ、爲に帝に媚びて珠玉と八人の美姬を献上した。然るにその美姬のうちで、選侍の李氏といふものが最も帝の寵愛を受けたのであつたが、李氏は遂に帝に向つて自分を皇后に立て、又鄭貴妃を皇太后に封ぜられたいと願つた。帝はその請を許さうとしたが、侍郎の孫如遊が極力之を諫めたため、遂にその議は行はれなかつた。

然るに帝はその頃病氣であつたが、一日内侍崔文昇が薬を奉ると、それ以來帝の病氣は兎角経過が捗々しくなかつた。世間では、これは鄭貴妃が帝を害してその子の福王常洵を位に即けるために、崔文昇に毒薬を進めしめたのであると風説した。依つて帝の生母の王氏や皇后の郭氏は大いに心配して、朝臣を招いて鄭貴妃の陰謀を訴へたので、給事中楊璉、御史左光斗、吏部尙書周嘉謨等の東林派はいづれも鄭貴妃を責め、遂に楊璉は崔文昇及び方從哲を弾劾するに至つた。然るにその後帝の病氣はますます募つたので、鴻臚寺の承季可灼といふものが紅丸の薬を帝に進めた。帝が之を服すると、翌朝俄かに崩じたので、劉一燾、孫如遊、楊璉等は之を以て鄭貴妃の陰謀なりとして、方從哲の一派を攻撃して措かなかつた。これを「紅丸の案」といふのである。

薬を進めて  
病は重る

宮殿住居の  
争起る

然るに光宗が崩じてから、李選侍は乾清宮に據り、腹心の宦官魏忠賢と謀り、光宗の長子由校を擁立してその勢力を振はうとした。その時群臣が宮中に参内すると、宦官どもは選侍の命を受けて、彼等を殿中に入れなかつたので、楊璉は聲を勵まして、「新天子を匿くしたものは何者だ」と呼ばつたが、東宮伴讀王安が逸早く殿中に入つて皇長子を奪ひ、文華殿に於て立太子の式を擧げ、次いで之を慈慶殿に移した。このとき左光斗は上言して、

「李選侍は太子の嫡母でもなく又生母でもないのに、嚴然として王宮の乾清宮に居り、太子は却つて慈慶殿に退處せられてゐる。これは既に大義名分を紊るもので、この儘に放棄しておいたならば、選侍は專權を振つて再び武后の二の舞を演ずるに遠ひない」と云つた。選侍はこれを聞くと大いに怒り、嚴罰を加へやうと思つて屢々光斗を召したが、光斗は

「俺は天子の法官だから、天子が召すのでなければ決して行かない」と云つて頑として應じなかつた。選侍はますます怒つてこの事を太子に訴へると、太子も左光斗の言を尤もであると云つて、彼を一向に罰しなかつた。然るにその後楊璉も亦抗疏して選侍の乾

先妃李氏遂  
に屈す

朋黨と流賊とに自滅

一九九



清宮を去るべきことを主張したので、李氏は遂に曠鸞宮に移り、太子が再び乾清宮に遷つた。これを「移宮の案」といふのである。

是に於て太子由校が位に即いた。これが即ち熹宗である。然るにこの時代は内に在りては朋黨の争がますます甚だしく、外にありては清の攻撃によりて北邊が次第に危急を告ぐるに至り、遂に明の國勢はますます傾頽するに至つた。一體熹宗は即位の初に當つて、葉向高を相とし、趙南星、楊瓊、高攀龍、左光斗等をして政に與らしめたので、東林黨は一時勢を得たが、宦官魏忠賢が政柄を握るに至つて、東林黨の勢力は根柢より覆滅された。

東林黨の勢力衰ふ

奸物巧に立身を計る

魏忠賢は初め名を進忠と云つて、若い時代には無賴漢で、騎射を善くし最も賭博を好んだ。然るに或る日賭博をして大負けをしたので、方針をかへて内廷に入つた。そして縁故を求めて熹宗の母王才人の典膳となつた。そのうち忠賢は帝の乳母の客氏が宮中で勢力のあるのを見て、之と結托し、その推舉に依つて次第に高官に上つたのである。之より先き忠賢は司禮太監の王安の庇護を受けたのであつた。然るに王安は忠賢が次第に奸悪を行うのを見て、之を懲らす考であつたのを、却つて忠賢は客氏と謀つて遂に安を殺害した。その後忠賢は彼の邪魔になる功臣を除くことを謀り、嘗て言路の三黨に打撃を與へた吏郭尙書の周嘉謨を先づ罷免し、又腹心をして劉一燝、左都御史鄒元標、副都御史馮從吾等を彈劾せしめて、彼等を辭職せしむるに至つた。

悪宦官の跋跳梁

かくて魏忠賢は客氏と結びてあらゆる悪事を行つたが、もしや諸妃嬪が彼等の悪事を帝に告げはしまいかと心配して、遂に詔だと詐り、先づ趙選侍に自殺を強ひた。選侍は光宗から拜領した物品を案上に列べ、西に向つて佛に禮拜し、痛哭して縊れ死んだ。次いで忠賢は裕妃を別宮に幽閉し、その飲食を斷つたので、妃は苦痛に堪へず、僅かに匍匐して檐から流れてくる雨水を飲んでゐたが、遂に飢ゑて死んでしまつた。

その後皇后は帝に向つて客氏と忠賢の悪行を訴へたが、彼等は之を知つて大いに皇后を恨み、皇后が妊娠したときに客氏が悪計を以て之を墮胎させてしまつた。そのため熹宗には繼嗣が出来なかつた。それから忠賢は帝が郊祀をしてゐる日に、帝の寵愛してゐた馮貴人を掩殺したが、誰も後難を恐れてそれを帝に告げるものがなかつた。その他李成妃は范慧妃が讒言に依つて寵を失つたのに同情して、之れがために憐みを乞ふたのが悪いと云つて、成妃を別宮に幽してその食を絶つた。妃は密かに食物を檐の瓦の間に隠

帝の寵幸を殺しても告る者なし



しておいて僅かに露命を繋いでゐたので、半ヶ月を經ても死ななかつた。忠賢は妃を斥けて宮人としてしまつた。

飽くまでの  
さばる兇惡

魏忠賢の殘虐横暴は今や天下の指彈する所となつたので、最も剛直忠誠であつた左副都御史の楊璉は、上疏して、忠賢の二十四大罪を擧げて之を彈劾した。爲に忠賢は大いに恐れ、韓爌かんくわうに之が調停を依頼したが、爌は之に應じなかつた。忠賢は帝の前に行つて泣いて訴へ、客氏も亦奔走して忠賢のために取り做したので、帝は遂に璉の上疏を却下してしまつた。

正邪を分つ  
縉紳便覽

是に於てか魏忠賢は己れに反對する東林黨の一派を掃蕩して大權を掌握せんと欲し、先づ彼を彈劾した工部郎中萬燾に廷杖一百を加へて之を毆殺し、吏部尙書趙南星、左都御史高攀龍を罷免し、内閣中書汪文言を執へて之を獄に投じた。時に忠賢は崔呈秀を腹心として東林東を滅す謀計に餘念がなかつたが、顧秉謙といふものが縉紳便覽一冊を著し、葉向高、韓爌、趙南星、高攀龍、楊璉、左光斗等百餘人を奸黨と爲し、黃克績、王永光、徐大化、賈繼春、霍維華等を正人として之を忠賢に進めたので、忠賢は爾後多くは之に依つて廷臣の黜陟を行つた。

三

東林黨大迫  
害を蒙る

然るに天啓五年六月に至り、遂に恐るべき禍が東林黨に下つた。即ち楊璉、左光斗、魏大中、周朝瑞及び顧大章等が忠賢のために逮へられて、死罪に處せられ、又趙南星等は籍を削られて追放されたのであつた。彼等は初め移宮の事件に依つて投獄されたのであつたが、一日徐大化といふものが魏忠賢に向つて、

『彼等はたゞ移宮の事件だけで嚴罰に處するのは、世間體が面白くないから、その外に楊鐔やうかちや熊延弼ゆうえんびつから賄賂を取つたと云ふことにして、殺しておしまいなさい』と獻策した。依つて忠賢は汪文言に命じ、璉等が熊延弼等の賄賂を取つたといふ口供書を作らせやうとしたが、文言は

『楊璉のやうな立派な人が、延弼から賄賂を取つたなど云ふことを、一體誰が信ずるものがあるか。俺は死んでもそんな事は云へない』と云つて頑として應じなかつた。

かくて同年七月になつて楊璉、左光斗、魏大中の三人が獄卒のために殺された。中にも璉は土囊を以て壓せられ、耳を釘で貫かれて、最も慘酷な方法で殺された。又光斗も

賢良の大虐  
殺行はる

朋黨と流賊に自滅



大中も身體に完膚なきまでに傷を負はされて慘殺された。次いで翌月には袁化中と周朝瑞とが殺されたが、その後顧大章は自殺してしまつた。當時の人はこの六人を尊んで六君子を呼んだ。

初め楊璉が執へられたときには、數萬の士民が道に擁して號泣し、璉の過ぐる村市では悉く香を焚いてその生還を祈つた。然るに璉が死んでからは遺族が窮乏し、遂に二子が乞食をして家族を養ふまでに零落した。その上朝廷からは賄賂の追徴が急であつたが貧困で之を納むることが出来なかつたので、郷人が競つて資を出して之を助けたと云ふことである。

兇暴遂に憚る者なし

かくて忠賢は殆ど東林黨の有力者を網羅して之を除いてしまつたが、これと同時に東林、關中、江右、徽州及びその他天下一切の書院を破毀し、尙ほ殘存してゐる東林黨の人名を榜示して、彼等の手も足も出ないやうにしてしまつた。かうして忠賢は反對黨を撲滅して今や一人の憚る者もなくなつたので、專恣橫暴至らざるなく、その勢力は隆々として天子を壓するやうになつた。従つて彼に阿附して榮達を求むるものが續出した。先づ浙江の巡撫潘汝禎（おんじよてい）といふものが、忠賢を生きながら神に祀るといふので、その生祠を

全國に生祠

西湖に建てると、其後各地では何れも之に倣ひ、遂に生祠を全國に建てらるやうになつた。殊に葡遼總督の閻鳴泰（えんめい）は數十萬の巨額を抛つて部内に七ヶ所も生祠を立て、民舍二千餘戸を毀つていづれも九楹の宮殿を立てた。又巡撫の朱童蒙は祠を綏延に建てたが、その家根を琉璃瓦で葺かせた。又督餉尙書の黃運泰は忠賢の像を迎へたときに五拜、五稽首の禮を爲し、之に反して遵化道耿如杞は祠に入つても拜しなかつた廉で、投獄された上に殺されてしまつた。次いで天啓六年十月魏忠賢は上公に進み、從子良卿は寧國公に封ぜられ、かくて彼の勢力は殆どその絶頂に達した。

國內で朋黨が軋轢してゐるうち、清は新興の勢を以てますく北境を侵すやうになつた。即ち天啓元年三月には太祖親ら八旗を統べ、水陸並び進んで瀋陽（今の奉天）を陥れ、勢に乗じて遼陽に逼つた。城兵は大いに驚き、太子河の水を濠に引いて西閘を閉ぢ、濠に沿ふて火器を列ねて防備を嚴重にした。依つて太祖は東山に陣して東門外の明兵を砲撃し、次いで西閘を破つて城濠の水を決し、之を渡つて城に迫り、遂に之を陥れた。是に於て遼東の五十寨、河東の七十餘城皆風を望んで清に降つたのである。

次いで翌年正月太祖は西平堡を攻めて之を陥れ、更に明兵を追撃して廣寧に入り、凡

風を望んで  
滿清に降る



清の太祖の  
戦傷

そ四十餘城を下し、遂に總州に至つて歸つた。その後天啓六年二月に至り太祖は二十萬の大兵を擁して寧遠城を攻めたが、經略袁崇煥く戦ひ、屢々巨砲を以て清兵を苦しめ、太祖はこの役に負傷して遂に卒去した。天啓七年七月、清の太祖の子太宗は親ら兵を督して小凌河、大凌河を過ぎて寧遠を攻めたが、明兵は葡萄砲を用ひて清兵を苦しめたので、太宗は遂に圍を解き、小凌河及び大凌河の二城を毀つて軍を還へした。かくて明の北邊はますます多事となつたのである。

「天啓七年八月熹宗崩じて、遺詔に依りその弟の信王由檢が位に即いた。思宗即ちこれである。思宗は從來魏忠賢の專權を憎んでゐたが、その位に即くや、先づ楊維垣等は忠賢の腹心の崔呈秀を彈劾し、次いで錢嘉徵は忠賢の十大罪を彈劾した。依つて帝は忠賢を召し、内侍をしてその上疏を読ませた所、彼は大に恐れ、罪を免れんとして重寶を奉りて帝に媚び、又太監徐應元をして種々忠賢のために辯解せしむる所があつた。この應元と云ふのは以前忠賢の賭博仲間であつたが、帝は之を知つてゐたので、先づ應元を斥け次いで忠賢を鳳陽に逐つて之を罪せんとした。忠賢も遂に免れることの出来ないのを知つて、阜城に至つてその徒黨と共に縊死したので、朝廷ではその屍を磔し、首を河間に懸けて天下に示した。

魏忠賢遂に  
自滅す

に懸けて天下に示した。

熹宗崩御のときに帝の乳母で今まで悪事を魏忠賢と共にしてゐた客氏は梓宮の前に行つて黄色の龍袱で包んだ小さい函を取り出し、その中から熹宗の胎髮や、少年のときに抜けた齒や、薙髮等を取り出し、之を焼いて流涕しながら何處ともなく宮中を立ち去つてしまつた。依つて思宗は詔して之を誅し、又魏良卿、侯國興等をも誅戮した。次いで客氏の家を籍した所、その家に八人の宮女がゐたが、これは客氏が帝に奉つて秦の呂不韋の故事に倣はんとしたものであつたから、帝は大いに怒つて八人の宮女を管で打つて殺させてしまつた。

思宗は元來賢明な君主で、即位後直ちに魏忠賢一派の奸佞を斥け、錢龍錫、李標等の賢能を擧げて政治の面目を一新せんとしたが、悲しいかな神宗以來の弊政は延いて思宗の時に及び、今や國民の疲弊はその極に達し、加ふるに清の侵略に依つて帝都が脅かされるに至つたので、天下は騒然として流賊が到る處に起つた。

既に神宗の末年以來北方に起つた清は、この時代に於てその勢力がますます強く、遂に崇禎二年十一月には清の太祖は龍井關より薊城に至り、三河を徇へ、宣府、大同兩鎮

明君も既に  
救ひ難し



の援兵を下し、更に進んで北京に迫つた。このとき清の諸將は一舉に北京を屠らんことを勧めたが、太宗は機尙ほ熟せざることを知り、北京の圍を解いて軍を還へし、三月瀋陽に歸つた。然るに崇禎七年に至り太宗は再び兵を督して四路より明の内地に侵入し同九年には武郡王阿濟格に命じ、居庸關より昌平を過ぎて再び北京に逼らしめた。その後清は數回明に寇したが、崇禎十四年に至り太宗は吳三桂等の六鎮の兵を杏山に敗り、翌年松山を陥れて洪承疇を生擒したので、思宗は大いに恐れて和を謀つたが、遂にその事が成就しなかつた。

明は内より亡ぶ

併しながら直接に明を滅したものは清の兵ではなくて、實に明の流賊であつた。當時陝西では連年饑饉に苦しんだ所に、宦官の喬應申や陝西巡撫の朱童蒙等がいづれも貪慾飽くことを知らず、且つ毫も民を恤まなかつたので、住民の困窮はその極に達し、遂に白水には王二府、宜川には王左掛等が一時に起つて城堡を攻め、官吏を殺し、又安塞の馬賦高迎祥は自ら闡王と稱し、又王大梁は洛陽より漢中に逼り、自ら稱して大梁王といひ、次いで貴州には安邦彦等が亂を起して屢々官軍を破り、その他各地到る處に無数の流賊が蜂起したのである。

諸賊皆王を稱す

是等の流賊の中で最も大なるものは李自成であつた。彼は容貌魁偉、その聲恰も豺狼の如くであつた。彼は十三歳のときに關帝廟に詣り、神前にある重さ七十餘斤の鐵爐を擧げ、殿を廻ぐることに二回に及んだので、廟中の道士が驚歎して、

『お前の父は善徳を積んだので、お前が天から力を授けられたのだ』と云ふと彼は、

『大丈夫は正に獨立獨行すべきものだ。父のお庇で世に立つなど云ふことは恥づべきことだ』と大言した。傳ふる所によると、彼の父には子がなかつたので、華山の神に祈つた所が、一夜神が現はれて、

『破軍星を以てお前の子する』といふ夢を見て、李自成を生んだといふことである。

彼は崇禎四年に闡王に従ひ、張獻忠等と共に群賊に加はつたのであるが、崇禎九年に高迎祥の殺さるゝや、李自成が推されて流賊の頭目となつたのである。次いで彼は崇禎十四年には河南府を陥れて福王常洵を殺し、十六年には襄陽を取つて新順王となり、其の後總督孫傳庭を潼關に破り、陝西に入つて西安を陥れ、遂に國號を順と立てたのである。當時所謂十三家七十二營の流賊どもは悉く官軍のために討平せられて、李自成に對立するものは獨り張獻忠のみであつた。

賊魁は神の申し子



李自成北京  
を陥れる

李自成が自立した報は痛く明廷を驚駭せしめた。しかも自成の軍勢はますます振ひ、崇禎十七年二月には太原を陥れ代を破り、三月には居庸關を降して昌平を焚いた。依つて同月十七日思宗は群臣を召して會議を開いたが、彼等はたゞ狼狽して策の出づる所を知らなかつた。かくて李自成は北京に迫り、帝に禪位を求めしめたが、帝は怒つて之を許さなかつた。然るにその夜太監曹化淳といふものが彰義門を開いて賊軍を入れ、次いで十九日に至り内城が危急に陥つたので、帝は煤山の壽皇亭に入つて自縊した。

帝の屍を葬  
らす

思宗の死屍は宮屏にのせられ、柳の木で作つた棺に入れて東華門外の蓬廠に置かれたが、之を守るものは只二三人の老宦のみで、朝臣の多くは李自成の下に官職を得んとするに忙しくて、梓宮が目の前にあつても、一人も往つて之を拜するものがなかつた。そして帝の屍は誰も之を葬るものがなく、そのまゝに放置されてゐたが、昌平の一布衣趙一桂がそれを見兼ねて贖金を集め、漸く翌四月になつてから之を葬つたといふことである。かくて明は太祖より思宗に至るまで十七代、二百七十七年にして亡びたのである。

興亡のいろく終

賢明言行錄



### はしがき

興ると亡びるとは、常に同時に見らるゝ世相であるが、前掲の諸篇は、亡びる側を主として記したものが多く、従つて暗君愚帝に配するに奸臣佞人を以てしたもののばかりとなつた。支那には明君無く賢臣無きかと疑はしむる程で、愚劣な残酷な醜陋な事例のみ續出することになつた。その中には多くの義烈談も孤忠傳も含まれてはゐるが、要するに暗黒面が多かつた。

いふまでもなく明君賢臣は支那の史乘にも雲の如くにある。暗君と奸臣とを生める土地に、いかに聖主と良相とがその間に善政を布いたかを見るのは、更に明暗の差を鮮明にするにも意義がある。その一言一行に味はふべきところは頗る多い。さういふ意味から茲に賢明言行録を編んで末尾に掲ぐる事とした。



□吳起と病卒

吳起が魏の文侯に用ひられて、その大將となつたとき、彼は自分の寝る床を士卒の分と別に設けさせることもなく、又自分ばかり馬や車に乗つたりもせず、自分の食糧は自分で携へ、最も下級の兵卒と同じ衣服を着、同じ食物をたべて艱難辛苦を共にした。

衣食すべて  
卒に伍す

嘗て一人の兵卒が悪性腫物に罹つて苦しんでゐたとき、吳起は自分でその穢い腫物を吸つて膿を出してやつた。すると兵卒の母がそれを聞いて頻りに泣き悲しんだので、或る人がその理由を訊すと、老女は涙を拭ひながら、

恩義が恨め  
しい

『先年あの子の父が腫物で悩んでゐたときにも、吳將軍がその膿を吸ひ取つて下さつたので、父はその恩義に感じて戦のとき、敵に脊を見せないで、花々しく死んでしまつたのです。あの子も屹度將軍のために何處かで戦死するだらうと思ふと、つひ悲しくなつて泣いたのです』と答へた。

□文侯と吳起

魏の武侯が嘗て舟で西河の流を下つたことがあつた。そのとき吳起を顧みて、

美なる哉山  
河の固め

『この山河自然の有様は實に要害堅固を極めてゐるじやないか。山は高く聳え、河は水を深く湛えてゐるから、敵が外から攻め入ることは中々容易でない。この山河こそ、實に魏の國の寶といふものだ』と得意になつて云つた。そのとき吳起は、

『いや、國が榮えるのは君主が徳を施してよく民を恵むからで、決して山河が要害堅固だからではありません。その證據には、昔、三苗氏は洞庭の大湖を左にし、彭蠡の大澤を右にし、要害無雙の地に居りましたが、それでも徳を施し、義を行はなかつたために、到頭禹が之を滅してしまひました。又夏の桀王の國は、河水、濟水の二川を左にし、泰華山を右にし、その上南に伊闕の懸崖を擁し、北に羊腸の峻坂を控へてゐたにも拘らず、仁政を行はなかつたために、遂に殷の湯王のために追放されてしまひました。又殷の紂王の國は左に孟門山が聳え、右には天行山が峙ち、北には常山があり、南には大河が繞つてゐて、これも亦天險の地でありましたが、やはり徳政を行はなかつたために、遂に周の武王のために殺されてしまひました。これ等の例に依つて見ても、國の榮えるのは君が徳行を磨き、善政を施すからで、要害の地に據るためでないことが明かであります。

天險たのむ  
に足らず



若し君も徳政を行はれないときには、國が亂れてしまつて、今この舟の中にゐる忠義さうな人々も、遂には君に叛いて敵となるでせう」と云つたので、武侯は「なる程お前が云ふ通りである」と云つて大變に感心した。

□廉吏と貪吏

齊の威王が或とき卽墨そくぼくの大夫を召して、

『お前が卽墨に赴任してから、兎角お前のことを悪く云ふものが絶えなかつた。予は人をやつて卽墨の様子を視察させたところが、田野が能く開拓され、人民はいづれも富み榮えてゐる上に、役所の事務もスラ／＼と抄取はかどつて忌はしいことがなく、東方の土地は平穩安寧であることを知つた。これほどお前が治蹟を擧げてゐたにも拘はらず、左右のものがお前を悪く云つたのは、お前が彼等に賄賂をやつて、予によく吹聴してもらはうとしなかつたからであらう』と深く彼の廉直で職務に忠實なのを褒めて、戸數一萬戸ある土地を彼に與へた。次いで王は阿の大夫を召して、

『お前が阿に赴任した以來、お前のことを譽めるものが殆ど絶えなかつた。それで人を

良政の不評  
を招く原因

悪政の好評  
を招く理由

やつて阿の様子を探らせると、田野は一向に開墾されてをらず、人民は飢を凍えてゐる有様であつた。それに趙が鄆おんを攻めたときには、お前はそれを救ひに行かうとせず、又衛が薛陵せつれうを取つたときには、お前はそれを知らずにゐた。こんなにお前が施政に不熱心で、職務を疎かにしてゐたにも拘らず、左右のものが常にお前を譽めてゐたのは、お前が彼等に賄賂をつかつて、萬事都合のよいやうに譽めてもらつたからであらう」と彼と彼を常に譽めてゐた近臣等を、一緒に釜の中に入れて煮てしまつた。

群臣は大いに恐れて、それからは賄賂の有無に依つて人を譽めたり、毀こつたりするものがなく、皆誠心誠意を以て事に當つたので、齊の國は遂に天下の強國となつた。

□國寶は珠か人か

魏の惠王が或とき齊の威王に向つて、

『貴方の國には何か寶物がありますか』と訊くと、威王は『いえ、そんな物は一向ありません』と答へた。すると惠王はさも得意げに、



十個の明珠  
に誇る

賢明言行録

六

「私の國は小さいけれども、直徑一寸ある珠で、車の前後を各々十二臺づゝ照らすものが十個もあります。然るに貴方の國は私の國よりも大國であるのに、一つの寶もないと云ふことはありませんまい」と云つた。そのとき威王は

「私の寶と考へてをるものは、それとは少し違ふのです。私の家來に擅子だんしといふものがあります、この者に南城を守らせておくと、楚人が恐れて私の國に寇をしないのです。又盼子はんしといふものに高唐を守らせておくと、趙の人は東の方に来て河で漁さへしないのです。又黔夫けんぷといふものに徐州を守らせておくと、燕や趙の人はその徳になづいて、そこに徒つてきたものが七千家族もあるのです。又種首しゅしゅといふものに盜賊の取締りをさせておくと、人は道に落ちてゐるものをも決して拾はないのです。この四人のものはいづれも私の寶で、その威名は赫々として、嘗に車の十二臺のみでなく、實に千里の遠きを照らしてゐるのです」と答へたので、惠王はこれを聞いて深く恥ぢ入つてしまつた。

□惠王言を用ひず

公孫鞅こうそんげつは衛の後裔であつた。刑名の學を好んでゐたが、嘗て魏の宰相の公叔座につか

四人の名臣  
これ國寶

へてゐた。座は夙に鞅の賢いことを知つてゐたが、まだ彼を魏の王に薦めないうちに、重い病氣となつてしまつた。そのとき魏の惠王は親しく公叔座を訪ふて、その病氣を見舞つたが、座はその折王に向つて、

「私の中庶子の役を勤めてゐるものに、衛鞅といふものがあります、まだ年は若い、非常に才のあるものですから、之をお用ひになつて、國政をお任せになるがよいと思ひます」と云つて鞅を王に薦めた。すると王は返答をせず黙つてゐたので、公叔座は王が不得心であることを察して、

「若し君が鞅をお用ひになりませぬならば、是非とも彼を殺して他國へ行かぬやうになさらねばなりません。若し彼が他國へ行つて働いたなら、由々しき大事が起ります」と注意したので、王はそれを承諾して立ち去つた。その後公叔座を呼んで、

「先刻王が俺の病氣見舞に來られたとき、お前を推薦したが、王はそれをお取り上げにならぬ様子であつたから、若し鞅をお用ひすることができなければ、彼を殺しておしまひなさいと申上げた。これは俺が君のことを先にし、臣のことを後にしなければならぬと思つたからである。だが俺は既に主君のために謀つたのだから、今度はお前に告げるがお

用ひざれば  
寧ろ殺せ

賢明言行録

七



用ひ得ず又  
殺し得ず

前は今一刻も早く逃げて他國へ行くがよい。若し愚圖々々してゐるなら、屹度殺されてしまふだらう」と云つた。すると鞅は從容として、

「魏の王は貴方のお言葉の通りに私を用ひることも出来ないくらゐですから、貴方のお言葉の通りに私を殺すことも出来ませんまい」と云つて、そのまゝ魏の國に止つて立ち去らなかつた。すると果して王は公叔座の家を出てから、左右のものを顧みて、

「公叔の病氣は大層重いから、今度は恐らく回復することが出来ぬであらう。だが彼は余に向つて衛鞅といふものを用ひるやうにと勧め、若し彼を用ひることができなければ殺してしまへ」と勧めたが、俺にはどうもそんな事が出来ない」と云つて遂に彼を用ひもせず殺しもしなかつた。

□帝道王道霸道

説客を前に  
居睡る

衛鞅は魏の國から、西の方秦の國に入り、孝公の寵臣の景監といふものに頼んで孝公に謁した。そのとき鞅は頻りに自分の説を述べ立てたが、それにも拘らず公は時々居睡りして鞅の云ふことを能く聞かなかつた。そして鞅が辭し去つてから、公は怒つて景監

を叱りつけながら、

「お前の紹介した衛鞅といふものは餘程の馬鹿ものである。あんな者を用ひることは出来ないと云つたので、景監は鞅に向つて、

「私は君を紹介したばかりに、君公の首尾がわるくなつて困つた」と彼を責めた。すると彼は

「實は私は孝公に向つて帝道を説いたのだが、公がそれを悟ることが出来なかつたので」と答へた。

その後五日にして彼は再び願つて孝公に謁見した。すると公の居睡りはますます甚だしくなり、彼の説くことは少しも公の氣に入らなかつた。公は再び怒つて景監に當り散らしたので、景監も亦彼を責めた。そのとき鞅は

「私は今度は王道を説いたのですが、それでも公の氣に入らなかつたのです」と云つた。その後鞅は再び孝公に謁して、自分の説を述べると、今度はそれが公の氣に入つたがそれでも公はまだ彼を採用はしなかつた。併し公は彼が退出してから景監に向つて、

「あの鞅といふものは少し話せる奴だ」と云つた。衛鞅はこれ聞いて、

帝道王道耳  
に入らず



覇道を聞いて快談す

「私は覇道を公に説いた所が、公は之を用ひやうとする氣があるらしいのです。で、どうかもう一度公に逢はせて下さい。私は略々公の意のある所を知つたから、今度こそ屹度公を説き伏せて見ませう」と云つて又公に謁見した。

すると公は鞅と話してゐるうちに、だん／＼彼の説に引き入れられて、自然と膝が前に進むのを知らないくらいで、數日の間共に天下のことを談じて、少しも飽く氣色がなかつた。この様子を見て景監は不審に思つて、衛鞅に向ひ、

「君公は貴方と逢つて非常に悦んでをられ、が、貴方は一體どんなことを云つて君の氣に入るやうになつたのですか」と訊ねた。すると彼は、

「私は初め帝王の道を公に説くと、公はそんな迂遠な方法では徒らに長い年月を要するばかりであるから、俺は便々としてそれを待つことができない。凡そ賢君はその身一代の中に名を天下に顯はすもので、徒らに數十年を待つて帝王などになるものではないと云はれたのです。で、私は國を強うする覇道を公に説いたところが、公は之を聞いて大いに悦ばれたのです。併しこの方法によるときは、公の徳を殷の湯王や周の武王に比することは到底できないのです」と答へた。

その徳や小なり

□改革の要諦

衛鞅は秦に用ひられてから、秦の從來の法を改めやうとしたが、人民どもはそれを悦ばなかつた。で、彼は孝公に向つて、

「一體人民といふものは困難な事を創める時には、少しも相談相手にならぬもので、たゞそれが成功した後には、その成功を共に楽しむだけのものです。ですから至徳を論ずるものは俗人に和せず、又大功を樹てるものは之を衆人に謀りませぬ。それで聖人も法を改めて國が強くなると見れば、從來ありきたりの法を改むるに躊躇しなかつたのです」と云つて、法を更へることを勧めた。すると甘龍といふものが、

「いや、彼の云ふことは誤つてゐます。昔から民の習俗に依つて之を教化するものは、勞せずして成功してをります。又從來の法に依つて民を治めるときには、役人どもはその法令に習熟してゐますから、民が安心して之に従ふことが出来るのです」と云つて之に反對した。そこで衛鞅はこれを駁して、

「平々凡々な常人は從來の風俗に安じて、少しも之を改良しようとは思はず、又頑冥固

至徳俗に和せず大功衆に謀らず

常人は舊習に安じ學者は知るこゝろに溺る



陋な學者どもは、昔から云ひ傳へられたことばかりを後生大事に守つて、少しも新奇の説を創めやうとは思はない。で、かう云ふ人は官にゐて、只ぢつとして従來の法を守つてゐるにはよいが、一旦従來の法令に規定してゐないことに逢へば、周章狼敗して爲す所を知らないのであります。元來智者は法を作り、愚者は法に制せられ、賢者は禮を更へ不肖なものは之に拘束されてゐるのです。で、君は人民の苦情などに頓着なく、従來の風俗法令をお更へになるがよいと思ひます』と云つたので、孝公は鞅の説が正しいと云つて、彼を左庶長の官に任じ、遂に變法の令を出したのである。

□孫臏必勝を説く

魏が趙を伐つてその都の邯鄲を圍んだことがあつた。齊では趙を救はうとして、先づその將の田忌をして兵を率ゐて趙に行かした。そのとき孫臏は、

『もつれた糸を解かうとするには、無暗にそれを引つ張つたり、搔き亂したりすると、その糸はますますもつれるばかりである。又人が争闘してゐるときに、いきなり其の中に飛び込んで撃つてかゝつたりすると、その争はますます大きくなるものである。で、

もつれた糸を解く如く

虚を襲ふに限る

そのときには兩人の虚を窺つてその急所を打てば、争闘は自然と已むのである。今魏の精兵は悉く外に出てしまつて、内にゐるものは皆老人や幼年ばかりであるから、その虚に乗じて魏の都を伐てば、魏軍は狼狽して趙の圍を解いて歸つてくるに相違ない。かうすれば一舉にして魏をして趙の圍を解かした上、魏の疲弊してゐる所を打つことが出来るのである』と云つたので、田忌はその言葉に従ふことゝなつた。

かくて十月に魏は邯鄲を陥れたが、齊の軍が魏の都に攻め入つたので、魏軍は兵を撤して齊の軍と桂陵で戦つたが、遂に大敗の憂目に逢つたのであつた。

□昭侯の破れ袴

韓の昭侯は破れた袴があつたのを、近侍のものに、

『これをしまつて置け』と命じた。近侍は、

『我が君はこんな破れた袴を取つて置かなくても、左右のものに下されば宜いのに、さて／＼思ひやりの無い人である』と云つた。昭侯は之を聞き咎めて、

『俺が聞いてゐる所では、賢明な君主は顔を嘸めて悲しんだり、笑を湛えて悦んだりす

一舉一笑をなしむ



功臣を待つ  
のみ

ることさへも之を慎んで容易にしないと云ふことである。これは若し君が悲しめば、家來のうちに君に阿つて自分も悲しい眞似をする者が出ようし、又君が悦べば、それに倣つて悦ぶ眞似をしたりする者が出るからである。然るに袴を家來に與へることは、前に述べた一噸一笑の比ではない。若しこれを或る一人に與へると、他のものがそれを羨みさては君を怨むものも出てくる。俺は何も破れ袴を惜しむわけではないが、我が國に功勞のあるものがあつたら、それに與へやうと思つてゐるまでだ」と云つた。

□兵法を知つて謀らる

魏の國が龐涓を大將として韓を伐つた。そこで韓が救を齊に求めた。齊では田忌を大將とし、孫臏を軍師として魏の都を伐つて韓を助けしめた。龐涓はこれを聞くと早速軍を收めて韓から魏に歸ることとしたが、之と同時に魏の國でも兵を集め、太子申を大將として齊の軍を禦かうとした。このとき孫子は

『魏の兵は元來勇敢で、齊の軍を輕蔑し、常々齊の兵を卑法者だと云つてゐる。戰の巧者な大將は敵の形勢を見て、それを我が軍の都合のよいやうに利用するものである。兵

竈の數にて  
敵を釣る

法に、百里も敵地に踏み入つて戰をするときには上將を戰死せしめ、五十里も踏み込んで戰をするときには半數の兵だけが敵に赴くといふことがある。で、俺はこの理に依つて敵を破る謀を講じよう』と云つて、齊の軍が魏の國に入つたときに、先づ十萬の竈を作らせ、その翌日には五萬の竈を作らせ、その翌日には二萬の竈を作らせた。

龐涓は三日目になつて、齊軍の竈が次第に減じてゐると聞き大いに悦んで、『俺は初から齊の兵が臆病であることを知つてゐたが、果してその通りで、彼等は我が魏の國に入つてから、僅かに三日目で既にその過半の兵が逃走してしまつた。それでは之れから急に彼等を追撃しよう』と云つて、齊の軍を侮り、歩兵をすて、騎馬の兵だけを率ゐ、行程を倍にして急に之を追撃した。

このとき孫子は丁度その日の夕方頃に龐涓の軍が馬陵に來るだらうと推測してゐた。この馬陵といふ處は道路が狭い上に、その附近には嶮阻な所が多かつたので、伏兵を置くには最も適當な所であつた。孫子は其處の大きな樹に白い字で『龐涓はこの樹の下で死ぬ』と書いて、弩いしゆみを持つた澤山の兵を路の兩側に伏せ、龐涓のくるのを今や遅しと待ち構へてゐた。すると夜になつて果して龐涓が茲に來たが、大きな樹に何か白い文字

この樹下に  
死せん



で書いてあるので、火をともして之を讀んだが、未だそれを讀み終らないうちに兩側から伏兵が一時に弩を放つたので、魏の軍は大いに亂れ、遂に涓は『到頭孫子の奴に功名をさせてしまった』と云つて自刎して死んだ。で、齊の軍は大いに魏の兵を破り、遂に太子の申を虜とした。

□玉を抱いて使す

趙では天下の名寶である楚の卞和の玉を手に入れたが、秦の王がこれを聞いて、十五の城とその玉を交換したいと申込んだ。趙が若しこの玉を秦に與へなければ、秦は強國であるから直ちに趙を攻めるのは明かであつた。さりとして之を與へれば、みすく秦のために欺かれて、十五城を受取ることの出来ないのも明かであつた。で、趙の王はどうしたらなよいか、殆ど當惑してしまつたとき、藺相如が王に向つて、

『折角秦が十五城と和氏の玉とを交換しようと云つてきたものを、すげなく拒むときは趙の國が悪いと云ふことになります。併し玉を與へても秦が我が國に十五城を與へないときには、勿論秦の方がわいるのです。で、兎に角私が玉を持つて秦の國に行つて見ま

秦の難題に  
困る趙

せう。そして若し秦が約束通り城を與へようとしないやうでしたら、寶玉を無事に持つて歸りませう』と云つた。王は不安心ではあつたが、別に良策もないので、兎に角玉を持つたせて藺相如を秦にやつた。

相如は遙々秦に行つて楚氏の玉を獻じた所が、王はそれに対して十五城を渡す意思が少しもなかつた。藺相如は之を見ると、秦王を欺いて一旦獻じた玉を奪ひ取り、これを密かに従者のものに渡して間道より急に趙に歸らしめ、自分は秦王の前に出て潔く處分を乞うた。所が秦王は賢明な君主であつたから、藺相如の忠義な心に感じ、彼に危害を加へないで、そのまゝ國に歸へしてしまつた。そこで趙の王は大いに悦んで、藺相如を拜して上大夫とした。

□藺相如と廉頗

秦の昭王が趙の惠文王に使をやつて、西河の南の渾池めんちで會合して交情を厚うしたいと申込んだ。強大な秦の申込であるから、趙王は之に赴くこととなり、藺相如りしやうじよが之に陪從した。

秦果して約  
を守らす



既に會合があつて酒宴が始まつたときに、秦王が趙王を侮つて琴を弾じさせた。すると藺相如は秦王の無禮を怒つて、秦王に向ひ、

『大王も缶ほじきを叩いて歌を唄つて頂きたい』と頼んだ。秦王は無論不機嫌な貌をして應じなかつた。藺相如は立ち上つて、

『今大王と私とは五歩も離れては居ませぬぞ。若し大王が私の願を聞いて歌を唄つて下さらなければ、私は一刺に王を刺し殺すより外ありません』と脅した。

秦王の近臣どもは驚いて相如を殺さうと立ち騒いだ。然し相如が目を怒らして之を叱りつけると、彼等は一と溜りもなく縮み上つて平伏してしまつた。そこで秦王も餘儀なく缶器瓦を打ち、歌を唄つて酒宴を罷めた。そのために秦はこの會合で趙に對して少しも威力を加ふることができなかつた。かくて趙王が無事に國に歸つてから、痛く相如の功を賞して之を上卿としたので、彼の位は今や將軍廉頗れんぱの上に列することゝなつた。廉頗は之を見ると不平で溜りなかつた。

『俺はいく度か戰場に出て、生死の境を往來した功に依つて漸く將軍となつたのに、相如は元來が微賤な上に、絶えて戦功とでもないのに、たゞ少しばかり口先が上手だと云

秦王相如に  
挫がる

廉頗大に相  
如に含む

つて、今では俺の上に位するやうになつた。これは如何にも心外な話であるから、彼と逢つたが最後、一つうんと彼を辱しめてやらう』といつた。

藺相如はこの事を聞くと、成るべく廉頗に逢はないやうにと努め、常に病と稱して朝に出でず、若し途中で廉頗の來るのを見ると、早々に車を返して逃げ匿れたので、遂にはその従者どもまで主人の臆病を恥づるやうになつた。そこで一日藺相如はその従者に向つて、

『お前は廉將軍と秦の王とでは、どちらが偉いと思ふか』と訊いた。

『いくら廉將軍が偉いと云つても、秦の王には到底かなひません』

『俺は嘗てそんな偉い秦の王をも叱りつけたことがあるのだ。いくら俺が愚鈍だと云つても、秦王より遙かに劣つてゐる廉將軍を恐れるわけがないのだ。たゞ俺が心配してゐるのは、秦が兵を出して我が趙の國を攻めないのは、俺と廉頗とがあるからだ。然るに今俺が廉頗と争つたなら、二人のうちどちらかゞ死ぬるのは明かである。そのときには秦は直ちに趙を攻めるに相違ない。俺は深く國家のことを思ふので、廉頗と争ふのを避けてゐるので、決して彼を恐れてゐるのではない』と話した。

豈廉將軍を  
恐れんや



廉頗遂に相  
如に屈す

賢明言行録

二〇

廉頗はこれを聞くと今までの行を悔い、衣を脱ぎ、荊を負ひ、相如の門に行つて深く罪を謝し、それから後は遂に相如と刎頸の友となつた。

□空論と實戦と

秦が趙を攻めたとき、趙の王は廉頗の代りに、趙括を大將として之を防がうとした。そのとき藺相如は王を諫めて、

「王はたゞ趙括が兵法に通ずると云ふ虚名を信じて彼をお用ひになるのですが、それは丁度琴を弾くときに琴柱に膠を塗るやうな融通の利かないもので、括をお用ひになつたとて、彼の力では軍隊を自由自在に活用させることが出来ません。括は元來父の書いておいた兵書などを讀んで、机上で兵法を論ずることは巧者ですが、實戦に際し、臨機應變の所置を採ることなどは到底出来ないのです」と云つたが、王は之を聽かないで趙括を將としたので彼は果して、秦の白起のために大敗したのであつた。

趙括は幼少の時分から兵法を學び、戰のことを論ずる點に於ては、天下之に匹敵するものがなかつた。彼は屢々父の趙奢と兵法を論じたことがあつたが、流石の名將の奢も

兵學者の空  
論のみ

父よく子を  
相る

括の説に一點の非難をも見出すことが出来なかつた。それでも趙奢はその子の括を譽めなかつた。趙括の母がその理由を奢に問うと、彼は、

「一體戰といふものは人を死地に陥れる危険なものであるから、非常に重大なものである。それを趙括は事もなげに輕々しく論ずるのは間違つた話である。若し將來趙の國で彼を用ひて大將としたならば、恐らく趙の軍を敗北させるものは彼であらう」といつた。

□食客の集散

趙王が秦の間者の言葉に欺かれて、趙括を廉頗の代りに大將とし、廉頗を長平から召し還へしたときは、正に廉頗の失意時代であつた。すると今まで彼の許に厄介になつてゐた食客どもは、彼を見限つて皆立ち去つてしまつたが、その後趙括が秦のために破られて、廉頗が又用ひられるやうになると、先に去つた客どもが再び集つてきた。で廉頗は彼等の薄情なのを怒つて、之を逐ひ拂はうとしたとき、一人の客が笑つて、

「將軍はどうしてそんなに世情に疎いのですか。世間の人間といふものは何れも利益のために交つてゐるのです。將軍が榮えてゐるときには將軍に従つてゐますが、將軍の勢

天下市道を  
以て交る



が衰へればその許もとを去るのは當然あたりまへのことです。それで將軍は今更誰を怨んだつてしかたがないのです』と答へた。

□勇將の末路

廉頗魏に奔  
れつて用ひら  
れず

趙の國では廉頗を將とし、魏を伐つて繁陽を取らせた。その後趙の李成王が死んで、子の悼襄王の代になつて、廉頗の代りに樂乘といふものを大將とした。そこで廉頗は怒つて魏に出奔して見たが、魏では廉頗を用ひ得なかつた。

大に用ふべ  
きを示す

然るに趙では廉頗のやうな名將を失つたので、屢々敵軍のために破られて困却したので趙王は再び廉頗を用ひやうとし、先づ使者をやつて廉頗を用ひることが出来るかどうかを探らせた。そのとき廉頗と仲のわるい郭開といふものが、その使者に多くの金を贈つて、廉頗のことを王に悪く云つてくれと頼んだ。かくて使者が魏の國に行つて廉頗に逢つた所が、彼は一度の食事に一斗の飯と十斤の肉をペロリと平げてから、甲冑を着馬を乗り廻はして、年は老つてもます／＼元氣であることを示して、再び趙に用ひられやうとした。その勇姿を見て使者は還つてきたが、豫て郭開から賄賂を貰つてゐるので

趙王に向つて、

『廉將軍は年を取つても澤山に飯をたべて元氣さうに見えましたが、暫く私と話をしてみらうちに、三回までも便を洩しました』と云つたので、王は之を眞實と思ひ、遂に廉頗を用ひなかつた。その後廉頗は楚に仕へたが、楚の大將となつてから一向に戦功がなかつたので、

『俺は再び趙人を指揮して戦いくさをして見たい』と述懐してゐた。彼は遂に楚の國で死んでしまつた。

□勞せずして功を收む

秦の王翦は六十萬人に將として、楚を伐つために秦の都を出發した。その時王は自ら之を覇上はじやうまで送つて行つた。王翦は秦王に向つて、良い田畑や宅地を賜はりたいと願つた。で、王は

子孫の爲に  
美田を乞ふ

『うむ、將軍の願の趣は委細承知したから、楚に行つて十分働いてくれ。貧乏などは心配しないがい』と慰撫した。そのとき王翦は、



望の小さな  
を安んずる  
の安全を  
図るのみ

「私が大王の將となつて功を立てたとて、諸侯になることも出来ないで、大王が今私を引立て、下さるのを好機會に、田宅を賜はつて子孫のために残しておきたいと思ふのです」と云つたので、王は之を聞いて大いに笑つた。その後王翦は戰場に行つてからも屢々使者を王の許に遣はして田宅を賜はりたいと願つた。それで或人が王翦に向つて、「將軍は餘りたび／＼王に田宅を請うじやありませんか」と注意した。すると翦は、「いや、王は元來疑ひ深くて人を信じない人である。今秦ではその全軍を俺に委かせておくので、王は動もすれば俺が謀反でもしないかと疑つてゐる。それで俺がこの危難から免れて身の安全を計るには、王に向つて田宅を乞うのが一番よいのだ。すると王は俺が田宅ぐらゐを望むのを見たなら、王翦の望みも大抵知れたものだ」と云つて安心するに違いない。だから俺はたび／＼田宅を請ふのである」と答へた。

ところが楚の國では王翦が攻めて來たので、國中の兵を殘らず集めて之を防禦した。翦は堅く城壘を守つて戦はず、ひたすら士卒を休養させ、或は沐浴をさせたり、又は結構な食事などを與へて之を愛撫し、以て銳氣を養はせることに努めた。それから暫くして翦は軍中のものに向つて、

「さあ、そろ／＼と戦始めやうかな」と云つて兵卒どもの氣を引いて見ると、彼等は皆、

「え、暫く戦争をしないので、戦争がしたくて溜らないから、今まで毎日石を投げたり飛び跳ねたりしてゐたのです」と答へたので、翦は兵士等に戦意の漲つてゐるのを知つて、いよ／＼楚と戦はうと決心した。恰もそのとき楚の軍は秦の兵が一向に戦はないので兵を引いて東の方に引き去つたので、王翦はすかさず之を追撃して、大いに楚兵を打ち破つた。

□陳勝の失計

陳勝が秦に反して兵を擧げると、その地方の父老や豪傑どもは彼を立て、楚王としよと謀つた。そのとき陳餘と張耳の二人が陳勝に向つて、

「將軍は初め秦が無道で百姓を虐げた、め身を抛つて天下のために之を滅さうとして兵を擧げたではありませんか。然るに今將軍が立つて王となれば、これ天下に向つて私慾を示すものです。將軍は決して王となつてはいけません。先づ急に兵を引いて西方に

戦意漲るを  
待つ

天下に私を  
示す勿れ



赴き人を遣はして六國の後裔を求め、之を立て、王とするのが上策です。若し將軍が王となつて自ら黨與を立てるときには、これが爲に將軍の敵が増すわけです。若し敵が殖ゑれば力を盡して十分に秦を攻めることが出来ません。之に反して仲間同志が仲よくして扶け合へば兵は勢ひ強くなる道理です。かうして兵が強くなれば秦を滅して咸陽に據り諸侯に號令することが出来ますから、そのときには帝業が自ら成るわけです」と説いたが、陳勝は之に従はないで、遂に自ら立つて王となり、張楚と號した。

かくて陳勝が王となつたとき、嘗て彼と共に田圃を耕した日傭人がそのことを聞いて、態々陳王の宮門に行つて陳勝に逢ひたいと云つた。所が門番はそのものゝ扮装が賤しいので王にそれを取次がなかつたため、日傭人は王に逢ふことが出来なかつた。然るに折よくもそのとき陳王は偶然宮門を出る所だつたので、日傭人は道を遮つて陳勝の名を呼んだ。勝はそれを聞きつけて昔のことを懐しく思ひ、その者を一緒に車に乗せて宮中に歸つた、やがて客は宮殿の中に入つて、燦然たる殿堂や綺羅びやかな帷帳などを見ると、その立派なのに喫驚して、

『まあ、勝が王となつて何んと立派な所にゐるのだらう』と叫んだ。その後客はますます

舊友と同事して歸る

客に見捨てられた陳勝

繁く宮中に入出して、無遠慮に陳勝の昔のことなどを喋舌り出したので、或る者が陳王に向つて、

『君の客は無知愚鈍で、妄りなことを喋舌り、動もすると君の威光に拘はるやうなことがあります』と云つたので、陳王はその客を斬つてしまつた。それで今まで陳王の許にゐた客どもは、いづれも恐れて立ち去り、その以後は彼に親しむものがなくなつた。

□捕へられた王を取戻す

趙王武臣は耳、陳餘の二人と謀つて燕の地を略したが、一日王が外に出た所を、燕軍のために執へられた。燕では武臣を捕虜として囚へておいた。趙の使者が屢々燕に行つて王を還へしてくれと懇願したが、燕ではそのたびに使者を斬り殺して、それを承諾しなかつた。そのとき趙の國に賤しい役を勤めてゐるものがあつたが、自ら望んで王を取り戻すために燕に行き、その大將に逢つて、

『貴方は張耳と陳餘の二人がどんな人であるか知つてゐますか』と訊いた。すると燕の大將は



「彼等はいづれも賢人だ」と答へた。

「では、あの人たちは何を望んでゐるか知つてゐますか」

「うむ、多分王を取り戻したいと思つてゐるのだらう」

そのとき趙の使者は笑つて、

「いや違つてゐます。貴方はこの二人がどんな事を望んでゐるか、それを知らないのです。一體武臣と張耳と陳餘の三人は互に扶け合つて趙の數十城を下したのですか、この三人のものは銘々自分で王となりたいと思つてゐたのです。所が武臣は張耳や陳餘に比べれば幾分か先輩なので、先づ之を王に立て兎に角趙の人民を治めることゝしたのです。そして張耳と陳餘の二人は今日までどうかして武臣を廢し、趙の土地を二分して、互に王とならうと思つてゐたのですが、まだその時機がなかつたのです。ところが今貴方の國で趙王を囚へたので、二人のものは表面では王を取り戻さうとしてゐるやうに見せかけて、實は燕で之を殺してくれればよい。さうすれば二人で趙を分けて王とならうと思つてゐるのです。若しさうなれば今まで趙は一國であつても尙ほ燕を侮つてゐたのですが、今後張耳と陳餘の二人の賢王が國を二分して互に助け合ひ、燕に向つて趙王を殺し

王が囚へられたのは望むところ

二國連合して貴國に對せん

た罪を責めたならば、趙が一國であつたときよりも一層容易く燕を滅すことができるのです」と説いたので、燕の大將はまんまとその術中に陥つて、早速趙王を赦して國に歸へした。

□ 沛公囚まざる

高陽の人酈食其といふものは貧乏をして落魄おちぶれてしまつたので、高陽といふ土地の門番となつてゐた。その土地のもので沛公漢の高祖の騎士となつてゐるものがあつた。酈其食はその騎士に向つて、

「評判の通りなら、沛公は傲慢で人を侮る所はあるけれども、大略があるさうだが、俺はさう云ふ人に仕へたいから、一つ骨を折つてくれまいか」と頼んだ。すると騎士は

「沛公は元來儒者を好まない人で、若し儒生でも來ると散々に之を辱しめるのですから儒生の議論で公を説いては駄目ですよ」と注意した。酈生はそれを聞くと、

「まあ、いゝから沛公に俺を紹介してくれ」と頼んだ。

酈生は騎士の紹介で沛公を訪ねて行つた。公は床の上に踞して、二人の女子に足を洗

沛公儒生を辱しむ